
そーどあーと・おんらいんツス

460

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そーどあーと・おんらいんツス

【Nコード】

N0288Q

【作者名】

460

【あらすじ】

「な、何でこんなことになったスか・・・」
おいらは自分の体を確かめてみた。

足や手は人間のものではなくペンギンのぬいぐるみのような。
腰にはお金を貯めるためのポーチが着いており、背中には明らかに
飛ぶには小さすぎる悪魔のはねがついている。

・・・え！？ これってもしかして……？

おいらは恐る恐る、道の水たまりのぞいて見てみると

・
・
・
・

「ぶ、プリニーッスか~~~~!!」

短編小説「おいらが、新世界の神になるツスカ!？」でネタで作ったプリニー神になってしまった主人公が巨大浮遊城アインクラッドで冒険をするお話です。(O H A N A S Iじゃないツスよ)

魔界戦記ディスガイアや、ソードアート・オンラインを知っている人も知らない人もラノベジャンキー460(シロー)のお送りするこの小説を見てみてください!

プロローグ（前書き）

プロローグは、短編小説「おいらが、新世界の神になるッスか!？」を少々修正したもので、そちらを読んだ方は飛ばしてもらっても構いません。

プロローグ

「な、何でこんなことになったスカ・・・」

おいらは自分の体を確かめてみたッス。

足や手は人間のものではなくペンギンのぬいぐるみのようなッス。

腰にはお金を貯めるためのポーチが着いており、背中には明らかに飛ぶには小さすぎる悪魔のはねがついているッス。

・・・これってもしかして？

おいらは恐る恐る、道の水たまりのぞいて見てみると

・

・

・

・

「ぶ、プリニー」

「ッスカ~~~~」

俺の名前は、私立紅葉館学園しりつこうようかんだくえんの3年生だ。

何で俺が今このような事態になっているか説明しよう。

あれは、始業式の朝だった。

俺は今年で着ることが最後になるであろう制服にそでを通しつつ、学校に持っていくのに必要なものを机に広げた。

- ・ 充電済みのPSP
- ・ PSP充電用のバッテリー
- ・ 魔界戦記ディスクガイドPORTABLE 通信対戦はじめました。

「完璧だ」

俺は完璧すぎるラインナップを制服の内ポケットに収めつつ忘れ物がないか確認した。

・
・
・
・

これでいいのか（汗）by天の声
いいんです！

どうせ始業式だけで、校長の「わたしは〴〵をやっているおかげで助かった」とか「〴〵大先生は」とか、それは本当に俺たちの役に立つのかと思える話をだらだら話すだけだ。

あゝ、確かこの間は手を前に出して歩いてたおかげで相手のけりを防いで返り討ちにしたとかいうはなしだったような？

ま、そんなどーでもいい話はおいておき、俺は友人である円堂から貸しているゲームの感想を聞きつつ学期末にぼろ負けしたディスクが

イアでの通信対戦のリベンジをするためにPSPとソフトの確認をした。

春休みは、ほとんどレベル上げに費やした。

雨の日も

風の日も

雪の日も

あったような？なかったような？

ま、戦闘演出OFFが可能となったので前作のPORTABLE無印よりは断然レベル上げの効率が上がった。

さらに、俺はアイテム界でEXP増加屋、武器上達屋などにも有効数値までひたすら集め、装備品のLvはALL100Lvだ。

主戦力であるアーチャー（究極超魔人）はまさにチートといっても過言ではない位に鍛えた。

Fateの英霊エミヤをイメージして作ったお気に入りキャラクタであり、ウエポンマスタリーの剣と弓は255まで鍛えており、剣のときは魔剣良鋼、弓のときはギャラクシーを使っている。

装備は超合金ロボスーツ×2、プリニースーツをほとんど使っている。

これだけやれば、円堂のアークデーモン（ヒノカグツチ）とカナデ（超天使兵）にも勝てるだろう・・・

だけど、絶対奥の手があるよな

あいつは俺のアーチャーのような究極超魔人を使ってこないが、ぜったい1体は作っているはずだ。

だがしかし・・・

俺にはこれがある・・・

プリニー神（爆弾）が！

プリニーは投げると爆発する。

その威力はプリニーの「HP / 2 + 1（端数切捨て）」で決定する。
なので俺は最初のステ振りにはHPに極振りをして爆弾専用機に1機の
プリニー神を用意した。

ま、ネタだけどね（笑）。

・ このネタで用意したプリニー神のせいでこんなことになるとは・・・

「俺はこんな展開になって言いたいことがある」

神「な、なんででしょう？」

「能力なんて、いらんから元に戻せ（怒）」

はい、テンプレですねという状況に誰もが突っ込みを入れない今日この頃、私は死にました？

なぜ、疑問形かというと死んだ瞬間の記憶がない。

さらに、俺の名前やこれまで生きてきた記憶そのものが思い出せない・・・

俺起きた 目の前に自称神様 事情を説明され 能力付きで異世界に転生させてやる 現在

っという状況だ。

神「元に戻るのは無理です」

「はいはい、わかりましたよ。じゃあ、能力は投影魔術で」

神「すみません、能力は生前に努力した結果の中から引き継ぎという形になるので物語に出てくるような能力はできません」

な、なんだと・・・

ここまでできてオリジナル要素追加？

しかも、無限の剣製でエミヤ無双が無理だと・・・

！ ・ ・ ・

「努力した結果ならこのキャラクターになるっていうのはどうだ？」

俺は胸ポケットからPSPを取出し、デイスガイアを起動。

キャラクターの上から2番目にいるアーチャー（究極超魔人）のステータス画面を開いて神に見せた。

神「た、確かにあなたの努力した結果の一つに数えられますが・・・

」

「が？」

俺は先をせかすと神は説明をした。

神「あなたは次の世界ではここで選んだ容姿、ステータスになりませんが、中には迫害や差別などがあるかもしれません。あなたがあなたは本当にこれでよろしいのですか？」

俺はもう一度ステータス画面を見てから

「これでいい」

神「早！」

もし迫害があってもこれだけの無茶ステータスがあるからだいじょうぶやろ

いざとなったら、大次元斬やドツベルゲンガーで無双できるし・・・

神「わかりました、ではゲームの中の転移ゲートのエリア選択で行きたい世界を選んで下さい」

俺はゲームの中のエリア選択画面を開いた。

- ・ 巨大浮遊城アインクラッド（ソードアート・オンライン）
 - ・ エターナル（RPGW）（RLD）
 - ・ 学園都市（とある魔術の禁書目録）
 - ・ 冬木市（Fate/stay night）
 - ・ ミッドチルダ（魔法少女リリカルなのは）
 - ・ ミュールゲニア（レイン）
- e t c

カ、カオスすぎる。

アインクラッドとエターナルはゲームの中の話だから多少無茶ステータスでも問題ないかな？

だが、学園都市や冬木市に行つて原作介入をするのもいいし、第三者として傍観しているのもなかなか魅力的だ。

ミュールゲニアは魔人や吸血鬼、ドラゴンともろファンタジーでのステータスでも、レインやレイグルに負ける気がする（真面目に勝てる気がしない）

ミッドチルダは、O H A N A S H I 好きな魔王やら、死神

やら、たぬきがいるんだよね。

「よし、決めた」

俺は行きたい世界を選んで、PSPのボタンを押した。
すると俺の体が光に包まれていく……

なんか変な感じだな？

なんだか体が縮んでいる気がするぞ。

「神 side」

「あつ」

私は一つ言い忘れたことに気付いた。

なりたいキャラクターは一番上にするように……ってもう行ってしまいましたか……

まあ、何とかなるでしょう。

「side out」

そして物語は始まる？

「ナンデサーーーーーーッス」

プリニー口調を直したいッス（泣）！！

プロローグ（後書き）

すぐに第1話を投稿して、第2話は見直しができ次第投稿します。

第3話は現在執筆中です。

（2011/01/08/08:58）

第1話 現状確認ツス

【巨大浮遊城アインクラッド】

おいらは、今の絶望的な状況に混乱していたツス。

だって、究極超魔人だとおもったらプリニーツスよ。
人型ですらないツス。

魔界の生態系の最底辺、まさにネタキャラツスからね。

そんなことよりもこの世界ではさすがにまずいツス
なぜなら……………

「ここは……………アインクラッドの中ツスよ」

どろろまじろろ…

このままだと

プレイヤー「あっモンスターだ」

剣でザシュッ！

おいら死亡orz

つてな具合にやられてしまうツス！

神に連絡って、方法がわからないので無理ツスし……
ゲームマスター
GMである は……ってあれ？

……！？

「原作知識が微妙にかすれているツス！？」

これって原作ブレイクをしないための世界の抑止力ってやつツスか？

ヤバイツス（汗）……………

とりあえずおいらは、今この世界での知識はあいまいで基礎的なものしか覚えてないようです。

ならば現状を確認してみるッス。

おいらは、周りを見わたしてみた。

どうやら、今は夜中のようであたりは暗く、月明かりによってかろうじて見える程度である。

まわりは木々に覆われていてどうやらここは森のようだ。

とりあえずおいらは森の道の真ん中にいるようで、まわりにはとりあえず危険ー（モンスター、プレイヤー両方ッス）はないようッス。

なら安心ッスね。

おいらは、今後の方針を決めるためちよつどいい場所にあった切り株に座り込んだツス。

ふと、おいらは自分のステータスが本当にゲームで作ったネタキャラプリニー神なのか確認してみようと思いついたツス。
そういえば……

「どうやってステータスを確認すればいいツスか？」

・
・
・
・
・
・

ゼエゼエ（疲）

試すこと10分、おいらは「出でよステータス！」と叫んでみたり、いろいろなアクションを起こしてみた結果、何とかステータスを出すことに成功したツス。

ステータス画面には、現在時刻や名前、Lv、ステータスなどが表示されている。

現在時刻は2024年1月1日 AM0:23と表示されていて、その下の名前の部分には【バル】と表示されているので間違いない。俺が作ったプリニー神だとわかったツス。

しかし、これは……

「Lv99って何これ？」

あつれ……？

確か俺の育てたプリニーはLv9999だったはずだが……

だが、Lv99でも充分のはずツスと納得したおいらはステータスの数値を見てみた。

ステータスはHPとDEFが他のステータスに比べて異常に高い、ネットゲーでいうところの盾使用になっている。

確かに、おいらが作ったプリニー神はHPに全振りしたからこの数値にも納得すけど、DEFのこの異常な数値はなんでっすかね？

おいらは装備欄を見たところでこのステータスの理由を確信したツス

頭 : なし

防具 : プリニースーツ

右腕 : なし

左腕 : なし

靴 : なし

装飾品 : アルカディア

: なし

防具がプリニースーツってあれば確かHPとDEF、RESの数值を上げる装備だったからHPとDEFが異常に高いのは納得つす。

装飾品のアルカディアは、全ステータスが上がる装飾品で、おいらがキャラを育てるときに使う装備でEXP増加屋と武器上達屋が有効な数値まで上げてあり、これがあるのとないのじゃLv上げの速度は4倍、WPの武器上達スピードウェポンマスタリーに限っては20倍の違いが出るツス

しかし、武器がないんじゃどうしようもないっすよ

さすがに装備していた武器：魔界ウォーズ2は、そのままというわけにはいかなかったみたいツス
(ちなみにもう一つプリニースーツを装備していたツスけど重複していたので装備からはじかれた)

さすがに武器なしではキツイツス

ならばと思い、おいらはアイテム欄を確認してみたツス。

- gg じ y t g g x y じ c
- gggg f ぶ g g g ぶ ぶ h g x f g
- y f c d f z s d f c k j ん l
- j f j s え z x k
- じ j g g ぼ ひ x ぜ ら y s r t y r 6

も、文字化け……………ツスカ……………!?

ど、どうやら、ここに来る前に携帯袋の中に入れてたものがここに
入っているようッス

いただきハンドやぶんどり、よこどり等のハンド系のアイテムはこ
の世界では異物のようでアイテムが表示されないッス

このままだとエラー検出プログラムに見つかってアポーン（アカウ
ント停止）になりかねないので消去ッス（とほほ・・・）

で、文字化けしたアイテムを選択して消去したところで残ったアイ
テムは

- ・魔剣良鋼
- ・アルムテン
- ・妖精の粉
- ・妖精の粉
- ・魔王の盾
- ・プリニーダガー
- ・手紙

てがみ？

なにやら、手紙のアイテム名の部分が他のアイテムとは違って
ライムグリーンで表示されていた。

おいらは、とりあえず手紙のアイテム名に触れてみた。
すると新たなウィンドウが表示された

W e l c o m e t o A i n c r a d

あなたがこの手紙を読んでいるということは、無事に到着したので
しょう。おめでとございます。

早速ですが本題に入ります。

あなたが来たことによってこの世界はあなたの知っているソードア
ート・オンラインとは少々異なっています。

なので、そのことを十分注意して行動してください。

他には

- ・あなたのステータスはその世界に合わせて設定され直しています
が、スキル等のステータスはゼロからのスタートです。

- ・特殊技はそのまま引き継がれているものは使用可能ですが、文字
化けているものは使用しないでください。何が起こるかわかりま
せん。

・アイテムは、この世界で剣等のものはそのままですが、異物として認識されたものは文字化けされて表示されますので消去してください。

手紙の文字数制限もありますのでこれにて失礼します。

神より

読み終わるとそれに合わせたかのようにウィンドウは閉じら、手紙は消えた。

文字化けしたアイテムは消去したから大丈夫ッス。

原作とは違う展開になるのは後で考えると……

「スキルはゼロからのスタートっすか……」

スキルの構成はどうしようかな？

第1話 現状確認ツス(後書き)

第2話は今日中に(20:00くらいに)投稿します!

第2話 戦闘ツス

とりあえず武器にダブルハンド・ロングソードの 魔剣良鋼 を装備してみることにしたツス。

装備欄にアイテムをドラッグして 魔剣良鋼 を出してみた。すると、手に刀身が輝いている剣が現れたツス。

試しに剣を振ってみるとSTRの数値が高いので軽々振ることができた。

これならいけると思い、おいらはウィンドウを閉じると道なりに歩き出した。

ぜえぜえ

「っ、疲れたッス」

おいらはなぜ疲れたかというところ、2、3分歩いたところで茂みから2匹の棍棒を持った猿人が現れたのでそのまま戦闘を行った。だが……

プリニーの体は手足が短くかなり接近する必要がある、しかも猿人は攻撃を受けると素早く2匹目と交代して、後方で回復するのでかなり時間がかかった。

プリニー神の異常ステータスがなかったらすぐ死んでいたッス。

今回は、相手の与えるダメージが少なくてよかったものの、もっと強いモンスターが出たら負けはしないが勝つのは難しいだろう。

おいらは、装備欄の 魔剣良鋼 をアイテム欄に戻した。

他の武器は、ダブルハンド・ナックルの アルムテン はさらに接近する必要があるので却下。

ワンハンド・シールドの 魔王の盾 は防具なので没。
あと残っているのは……

おいらは、デイスガイアで見たことのないアイテムである プリニ
ーダガー を選択してみた。

プリニーダガーは、どうやら初期装備のようだ。

プリニーダガー

- ・種別 : ダブルハンド・ショートソード
- ・攻撃力 : 2
- ・要求ステータス: なし
- ・プリニーの愛用している短剣で、どこからだしているのやら？

？ってなんツスカ（ビシッ）とおもわず説明に突っ込みを入れた。

なんか、説明がデイスガイアっぽいな

「しかも攻撃力: 2ってどこの鉄パイプツスカ」

攻撃力が低く何よりこれも剣より接近する必要がある。
なので没かなと思ったところで……

！

おいらは、閃いたツス。(この時、おいらの頭の上に！マークが出たツスよ)

おいらは、プリニーダガーを装備欄にドラッグしてみると2本のプリニーが攻撃に出すときの短剣が現れたツス。
どうやら、2本で1つのアイテムということらしい。

これなら、あれができるはずと思い、おいらは使用可能スキルの一覧を見てみた。

試しにやってみたところ、初動モーションに入るまでが難しかったが何とかできたツス。

続けて、2、3度練習をしたところで何とかものにしたので、おいらは戦闘をするために再び歩き出した。

「出る、出ろって思うとなかなかでないツスね〜」

物欲センサーが作動しているのかと、バカなことを思いつつ歩いてると何やら木の上からなにか物音が聞こえてきた。

なんツスかと思ひ、見上げようとした瞬間頭に衝撃を受けた。

おいらは、とつさに前に飛び出すと無茶ステータスのせいで思ったよりも早く飛び出したことに驚きつつ、着地とともに土煙を上げながら方向転換をして先ほどいた空間に目を向けた。

すると、そこには先ほどの猿人と同じだが、あきらかに装備がしっかりしている猿人がいた。

どうやら、ボス猿のようでおいらをにらみつけると、なにやら雄たけびを上げた。

雄たけびがあたりに響きわたるとまわりの茂みから先ほどは2匹しかいなかった猿人が大量に現れた。

ま、マジッスか

出る出るって言ったッスけど、今度は出過ぎッス〜〜よ。

技を試すだけなので、1、2匹でよかったがこれは多すぎる。
どうやら、おいらはランダムイベントに遭遇したらしいッス。

おいらは、先ほど受けたダメージを確認すると攻撃個所と不意打ち
などが悪かったらしく200ほどHPが減ったッス。

普通の一般プレイヤーなら魔法のないこの世界でこの状況は絶体絶
命ッスよ。

ま、おいらは普通じゃないから余裕ツスけどね。

なにせHPの残りは40116ツスよ。

同じ威力の攻撃が当たってもあと200回程度余裕があるツス。

おいらは冷静に周りを見渡すとまわりの猿人たちは、なにやら雄たけびを上げている。

すると、前後左右から猿人がとびかかってきた。

おいらは右の猿人に狙いを定めるとすれ違いざまに左右のプリニーダガーで斬った。

すると猿人は、ポリゴンの欠片をまき散らしながら飛び散った。

！

おいらは自分の体の軽さに驚いたッス

まさに、羽が生えたような軽さ、これなら負けないッスよ

あ、おいら、羽があったッス。(ぶっちゃけ飾りッスけど・
)

仲間がやられたことよって、ボス猿が再び雄たけびを上げた。
すると不足した分を埋めるかのように茂みから猿人が現れる。

このままではキリがないと思ったおいらは、ボス猿に向かって先ほ
ど試した技のモーションに入った。

足に力を入れ、地面を思いっきり蹴り上げジャンプをすると左の短
剣をボス猿に向けて投げた。

すると、その初動モーションに合わせて、システムアシストが入り右の短剣を投げる。
投げた後、空いた手は腰のポーチの中に入れ、投げたのと同じ短剣を取出し投げる。

取り出す
投げる
取り出す
投げる
取り出す
投げる
取り出す
投げる
取り出す
投げる
取り出す
投げる
取り出す
投げる
取り出す
投げる
取り出す
投げる
取り出す
投げる
取り出す

・
・
・

無数にプリニーダガーを投げ終わるとそこには、雄たけびをあげながらポリゴンの欠片をまき散らすボス猿の姿があった。

これがプリニー固有の特殊投剣技 プリニー連射 ツス。

数分後

おいらはプリニー連射でボス猿を倒すとまわりの猿人たちにも、プリニーダガーを投げて倒した。

魔剣良鋼を装備した時は、2、3撃で倒すことができたが、プリニーダガーの場合は平均7、8撃で倒すことができた。

最後の1匹を倒して戦闘が終わったのを確認したおいらは、その場に仰向けで倒れ込んだ。

「思ったよりも疲れたッス」

いくらステータスが高くても、動くのはおいらなので精神的にも肉体的にも疲れたツス。

おいらは、数分その場で仰向けになって休むとステータスを見いてみたツス

！

あらかじめ、投剣スキルと短剣スキルなどを選択しておいたツスけど、その熟練度が0だったのが一気に50台に、投剣スキルにおいては72まで上がっていた。

もしかして………

おいらは恐る恐る、装備しているアルカディアをクリックしてみたツス。

するとそこには、予想道理の事になっていた。

追加効果

- ・ 経験値 + 300%
- ・ 武器上達 + 1900%

同じくプリニースーツの方を見てみたところ同じように見覚えがある追加効果が付属されていた。

どうやら、武器上達の追加効果の結果このようになったらしい。これなら、スキルの上達スピードは20倍ツス。

しかし、経験値は猿人のLvが低いらしく追加効果を合わせても微妙たるものしか入らなかったツス。

おいらは戦闘によって手に入れたアイテムを見てみることにした。すると、そこにはおいらが知っているアイテムの名があった。

転移結晶

キターーーーーーツス!!

どうやら、さっきのボス猿のドロップアイテムだったらしい。おいらは、ここら辺のモンスターではLv上げの効率も悪く、早いところ違うエリアに行きたかったので転移結晶を出したところで重要な問題に気付いた。

「おいら、モンスターだったツス」

今のおいらは、プリニーで見た目はどっから見てもモンスター。
このままいくと、まずい気がした。

どうしよう………

悩んだ結果、おいらは町ではNPCのふりをすることにした。
解決したところでおいらは結晶を再び取り出して使用方法を確認す

ると、とりあえず知っている町の名前が第一層の はじまりの街
しかなかったのでそこにした。

「よし、やるっすよー！」

転移結晶を手に掲げてそれっぽいポーズをとると

「転移、 はじまりの街
」

そして、おいらはなにもしらないまま転移した。

普通の場所なら、これで転移できたであろうがこのダンジョンは特殊な仕様になっていて転移結晶を使っても街には飛ばずに森のどこかにランダムに飛ばされることになっていた。

そう、ここは原作の短編でも2度登場した三十五層北部に広がる広大な森林地帯、通称……

迷いの森

アインクラッド第三十五層
2024年1月1日 AM 3:44

第2話 戦闘ツス（後書き）

とりあえず、約束道理20:00に投稿しました！

ここまではRPGでいうところのチュートリアルです。

次回の第3話は原作に入ると思います。

とりあえず、一区切りが出来次第投稿します（2011/01/08/19:31）

第3話 迷えるプリーツ

パルは、この世界に来てから一か月の間この 迷いの森 から出る
ことが出来ずにいた。

最初に、 転移結晶 を使った時は驚いたツスよ

はじまりの街 に着いたと思ったら、また森の中だったツスから

ね。

ちゃんと転移できなかったのかと思ったパールが、この森が 迷いの森 だと気付いたのは、森の中を移動していて見覚えのある切り株を再び見たときに、隣のエリアとの連結がおかしいことに気付いたのと同時だった。

原作知識がかすれていたとはいえ、こんな重要なことに気付かなかったとは……

おいらは 迷いの森 を歩き回ればその内、出られるだろうと長期戦を覚悟したツス

最初の一週間は、おいらもスキルの上昇率の速さや戦闘技術の模索などいろいろあって楽しかったツス

しかし、二週間を過ぎ始め何かおかしいなと気づき始めたときに、パルは六人パーティー（男性四人、女性二人）を組んでいるプレイヤーに遭遇した。

パルは、二週間も話し相手のいない一人ぼっちの状態からか、初めて会ったプレイヤーの前に無防備にも飛び出してしまった。

すると、相手のパーティーはパルの姿に気付くと、「レアモンスターか？」と何やらつぶやいてから襲ってきた。

パルは今の自分の姿がプリニーであることにすっかり慣れてしまっていて、間違いに気づいた時には手遅れであった。

前衛の盾持ちの男が片手剣で攻撃を仕掛けてきた。

パルは、とつさに短剣で武器を弾いて相手から距離を取ろうとしたが、相手はAIで動いているモンスターとは違い、隙が出来たとしても前衛と後衛が入れ代わり立ち代わり スイッチ をしてきて距離をとることが出来なかった。

パルは攻めることが出来ず守りに徹した。

しかし、 武器防御 スキルが低いパルは相手の攻撃を捌ききれずに徐々に押され始めてしまった。

「ま、まずいッス」

このままではまずいと思ったパルは、相手の スイッチ の瞬間に後衛で細身の長槍でチマチマ攻撃を仕掛けてきた女性に向かって投剣スキルの基本技 シングルシュート のモーションを起こした。

女性は、おいらの動きを見て攻撃が シングルシュート が気付いたが、投剣スキルの威力が接近戦闘系スキルに比べて威力が少ないことからよけるよりも攻撃を仕掛ける方がいいと判断して攻撃を受けてしまった。

もし、相手が最前線のプレイヤーだったらこれほどのダメージは喰らわなかっただろう。

攻撃を受けた女性のHPは満タン近くから一気にレッドゾーンまで削られた。

パルは異常に高いステータスなので急所に狙い撃ちをせずに防具のある場所を狙ったのが幸いした。

もし、頭部や防具で防がれていない部位だったら即死していただろう。

相手は削られたダメージ量を見て戦慄したのだろう。

「て、撤退だ！」

リーダーらしい赤い鉢巻をしたプレイヤーがうつろたえながらも指示を出して、殿を務めようとその場に留まった。

おいらは攻撃が止んだことからチャンスだと思い

「今のうちに逃げるッス！」

全力で逃走した。

しかし、おいらはこの時逃げずに話をするべきだった。

(魔王式の O H A N A S I J Y A N A I T T S U Y O)

次の日から、見たこともないレアモンスター出現の情報が中層クラ
スのプレイヤーの間で広まった。

噂が広まり、おいらを討伐しようと 迷いの森 に訪れるプレイヤーが増えた。

幸いにも 迷いの森 は数百のエリアに分割されていて、おいらはその間ひたすらプレイヤーから隠れ続けることにした。

その結果、ひたすら隠れ続ける修行で ハインディング 隠蔽 スキルが上げられた。

数日が経ち 隠蔽 スキルがある程度上がったころにおいらは、気付かれずにプレイヤーに着いて行き 迷いの森 から出ようと計画した。

結果、森の端のエリアに行こうとすると・・・

強制的に見覚えのある切り株の近くに転移されることがわかり、おいらは絶望した。

アイスクラッド第三十五層
2024年1月27日

第3話 迷えるプリニーツス（後書き）

少々書き方を変えてみました。
いかがでしたでしょうか？

前回、原作に入るといいましたが少しだけ付け加える必要があり投稿しました。

次回の「第4話 黒の剣士ツス」はできしだい投稿します（2011/01/09/22:54）

第4話 黒の剣士ツス

な、何でこんなことになったツスか？

現在、おいらの目の前には、男女二人のプレイヤーがいるツス。

一人は、黒髪に黒いコート。背はそれほど高くないが全身から今まで感じたことのない威圧感を発しながら、もう一人の髪を両サイドで結んでいる女の子を背にかばいつつ、おいらの動きに注意を払っている。

「あのモンスターは・・・」

「君は、今すぐ逃げろ！」

そういうと、黒衣の男はパルに向かってきた。

パルはこの一週間ひたすらスキル上げに費やした。

SAOにおいて、スキルの熟練度は、スキルを使用する度に上昇していくタイプのものである。

しかし、スキルの熟練度は気が遠くなるほど遅々とした速度で上昇をしていくのでモンスターとの戦闘でレベル上げをしつつスキルを上げていくのが無難であろう。

おいらの場合は違うツスけどね

パルの装備中のアルカディアには追加効果があり、そのなかには武器上達+1900%がある。

スキル1回の使用に対して1+19の計20回分というのは非常に助かる。

そのおかげもあり、投剣スキルと短剣スキルは熟練度が1000に達し完全習得をした。

しかし、この武器上達はあくまで武器のみなので、隠蔽や識別スキル等の基本のものは通常と同じく遅々としか進まないのが修行が必修である。

隠蔽スキルは、モンスターやプレイヤーから隠れれば熟練度が上がっていくので簡単だったツスけど、索敵スキルの修業は本当に地味すぎて発狂したツス

そんなこんなもあり、おいらは最近、盾を装備すると武器上達の追加効果の恩恵が受けられることを発見したのでひたすら 武器防御スキルのスキル上げに専念しているツス。

武器防御は相手からの攻撃を盾でうまく防御することで上げられるので、パルはモンスターを探して歩いてた。

この日、1か月近くも 迷いの森 にいるのでどの場所にモンスターが出現するか把握しているパルは、いつものように迷いの森で出現するモンスターの中でも最強クラスである ドランクエイプ がよく出現するエリアに向かっていた。

すると、前方でどうやらプレイヤーが戦闘をしているようだ。

「とりあえず、様子を見てみるッス」

おいらは、茂みに隠れて様子を見ることにした。

おいらは、戦闘を見ていて何やら様子がおかしいことに気付いた。

普段見かけるプレイヤーは、ほとんどパーティーを組んで戦闘をしている。

しかし、目の前で戦闘をしているのは、ドラクエイプ3匹に対して、10代前半と思われる女性プレイヤー1人と使い魔である小さなドラゴンだけであった。

ソロプレイヤーツスカ？

しかし、少女はソロプレイヤーにしては、火力が足らずにドラクエイプの攻撃 回復の入れ代わり立ち代わりのスイッチ戦法に対応しきれていない。

少女の猛攻もむなしく、レッド領域までHPが減少していたドラクエイプは後方のドラクエイプとスイッチをってしまった。

おいらは、このままではキリがないので助けるべきだと判断をし装備をプリニーダガーに切り替えた。

とりあえず、シングルシュート で後方のドラクエイプに攻撃しようとした瞬間、おいらは強烈な既視感に襲われた。

少女にとどめを刺そうとしているドリンクエイプにパルが放った銀線が吸い込まれていくかのように進んでいくが、ドリンクエイプの棍棒の方が早くて間に合わない。

その時、少女を庇うかのように棍棒の前に小さな影が立ち塞がった。

そして、使い魔であるドラゴンが地面に叩きつけられてポリゴンをまき散らしながら砕け散った。

使い魔がやられたことにより、少女は自棄になったのか叫び声を上げながら敵に襲い掛かっていった。

少女は今までの動きがまるで嘘のようにドラंकエイプに猛攻をかける。

攻撃には鬼気迫るものがあった。

ドラंकエイプは少女の攻撃に耐え切れず1匹のドラंकエイプが倒され、少女が新たな目標に突撃していった。

回復しないんすか！

少女のHPバーはすでにレッド領域に達している。

おいらは、このままではやられてしまふと思ひ、茂みから出ようとした。

しかし、その必要はなくなった。

2匹並んだドラクエイプが背後からの一閃によって倒されたのだ。

よく見ると、猿人の後ろに一人の黒衣の男性プレイヤーが立っているのが見えた。

男性プレイヤーは剣を左右に払って、背中の鞘に収めると口を開いた。

「・・・すまなかった。君の友達、助けられなかった・・・」

すると少女は泣き出してしまった。

「・・・出るタイミングを逃したッス」

パルは、出るタイミングを完全に逃してしまった。

いま、このタイミングで出るのは気まずいッスよ

そう思ったパルはただちにここから立ち去ることを決意した。

抜き足、差し足、忍び足ッス（パキッ）

「誰だ！」

黒衣の剣士はおいらの方を向いて叫んだ。

ヤ、ヤバイッス

パルは、このままだとマズイと思い、とりあえず誤解を解くために
茂みから出ることを決意した。

黒衣の剣士は、おいらを見ると最初はなんだ？という顔をしていたが、すぐに戦闘のときの顔になった。女の子を背後にかばいつつ出てきたおいらの動きに注意を払っている。

「あのモンスターは・・・」

「君は、今すぐ逃げろ！」

そういうと、黒衣の男はパルに向かってきた。

避け、弾き、避け、弾き

パライ、パライ、パライ――――

「ま、待ってくれッス、話を聞くッスよ！」

おいらは必死に避けつつ、誤解を取ろうと努力した。
しかし、おいらの言葉が届いてないのか黒衣の剣士の攻撃は留まる
ことがない。

いくら、おいらの武器防御が上がってたとはいえ完全に防ぐことは
できない。

黒衣の剣士の攻撃は今までであったモンスターやプレイヤーと比べ物
にならないくらいの威力があり、おいらのHPが徐々に減ってきた。

このままではまずいと思ったおいらは、一か八かの勝負に出るため
に一度距離をとることにした。

チャンスは、相手の攻撃が止まった直後ツス。

その時、相手の単発重攻撃スキルが発動して、パルは捨身覚悟で行
動を起こした。

『イエローゾーンに達しました』

初めてイエローゾーンに達してしまっただがおいらは何とか距離をとることに成功した。
相手も、おいらが距離を取ったことで一度体勢を立て直そうと距離を取った。

おいらは、このチャンスを生かそうとプリニー連弾のモーションに入ろうとした。

相手は、こちらの意図に気づいたのかこちらに駆け出てきた。

れた黒衣の剣士がギャグ漫画さながらにヘッドスライディングをか
ました。

・ ・ ・ ・

「・・・とりあえず、なんか食べ物を持ってないツスか？」

は、腹が減ったツス

おいらは、沈黙が痛いと感じつつ黒衣の剣士に向かって声をかけた。

アインクラッド第三十五層
2024年2月

第4話 黒の剣士ツス（後書き）

間が空いてしまって申し訳ありません>（――）<

リアルに学校が忙しく、テストが終わっても就職の1次試験があり、なんやかんやで1か月近く開いてしまいました。

言い訳はこれくらいにして、今回の話は、電撃文庫より絶賛発売中の「ソードアート・オンライン」の2巻の最初にある短編「黒の剣士」あたりの話で、私は短編の中でも特に気に入っている話でもあります。

出来具合はどうあれ、私は原作の時系列の流れに一応そっぴんぽんと考えています。

さてさて、次回の題名はまだ決めてないのですが、黒の剣士は2月中に終わらせたいので、出来しだい投稿しようと思います。

あと、感想もお待ちしております！

最後ですが、読みにくいながらも

ここまで読んでいただきありがとうございます>（――）<

第5話 腹が減ってはなんとやらッス

あの気まずい沈黙の後、何事もなかったように立ち上がった黒の剣士は腹を押さえているパルの姿を見ると気が抜けたのか、剣を鞘に収めた。

何やら操作して、おもむろに何かの包みを取り出してパルに向かって投げた。

放物線を描いて投げられた包みをパルは、両手で受け取ると黒の剣士は

「あゝえっと、とりあえず腹が減ってるんならやるよ」

と言い、少女の方に歩いて行った。

パルは、包みを開けてみると中には長めのパンが入っていた。

迷いの森に出現するモンスターの中には食材アイテムを落とすモンスターは少なく、パルはこの1か月の間、まともに食べていなかった。

ゲームの中なので餓死することがないとはいえ、空腹感を取り除くためには食事をする必要がある。

しかし、迷いの森から出ることが出来なかったパルはこの世界に来てから1日も食事をとることが出来なかった。

腹が減っては戦はできぬ！

最初は、空腹感からか、まともに戦闘を行うことが出来なかったパルだが2、3日経つと不思議と空腹感を感じなくなっていた。だが、表現がオーバー気味なSAOのシステムからか、パルの腹の音は定期的に鳴ってしまっていた。

(一度、隠蔽中に腹の音が鳴ってプレイヤーに見つかってしまったことも記憶に新しいツス)

とにかく1か月もの間何も食べていなかったパルは、目の前のフランスパン?のようなものにかぶりついた。すると、何の変哲もないパンだが空腹からか?とてつもなくおいしく感じた。

「あれツス?」

パルは、自分がいつの間にか泣いていることに気付いた。

「な、涙が止まらないツス」

この世界で初めて他人からの優しさを感じたパルであった。

食事を終えたパルは、立ち上がるとお礼を言うために向こうの方で話をしている二人に近づいた。

二人は、なにやら話しているようだ。

「頑張つてレベル上げすれば、いつかは……」

「それがそうもいかないんだ。使い魔を蘇生できるのは、死んでから三日だけらしい。それを過ぎると、アイテム名の心が形見に変化して……」

「そんな……!」

少女は驚愕することがあったのか叫ぶとうなだれて、地面から一枚の羽を摘み上げて、両手でそっと抱いた。

剣士は立ち上がると何やら腕を動かして操作を始めた。なにかをやるようだ。

「あ……」

「この装備で五、六レベル分程度底上げできる。俺も一緒に行けば、多分なんとかなるだろう」

「えっ……」

どうやら、少女と剣士との間でなにやらアイテムのやり取りをして

いる。

少女は疑問からか、剣士に尋ねた。

「なんで……そこまでしてくれるんですか……？」

「……マンガじゃあるまいしなあ。……笑わないって約束するなら、言う」

「笑いません」

「君が……妹に、似ているから」

少女は剣士のあまりにもベタな答えに噴き出してしまった。

慌てて片手で口を押えるが、どうやら笑いをこらえることが出来な
いようだ。

「わ、笑わないって言ったのに……」

剣士は肩を落とすといじけたようにつつむいた。

アイテムのやり取りが終わったのか少女は立ち上がった。

「すみません、何からなにまで……。あの、あたし、シリカって
います」

どうやら、少女の名前はシリカというようだ。

剣士は軽くうなずくと右手を差し出した。

「俺はキリト。しばらくの間、よろしくな」

話が終わると、二人は近くにいるパルにようやく気付いたようだ。

「さっきのパンはとても美味しかったツス」

ありがとうツスと言ってパルは頭を下げた。

パルは頭を上げるとそこには驚いたキリトの顔があった。

「お、おまえ喋れたのか？」

・
・
・

え？

「喋れたもなにも、おいらは最初からずっと喋ってるツスよ？」

「いやいやいや、さっきはずっと『プリニーツス』って言ってただけだぞ」

キリトは同意を求めるかのようにシリカの方を向くと、シリカは首をかしげながら

「キリトさんは、もしかしてこの子と話しているんですか？」

と言った。

「「え？」」

キリトとパルは揃って戸惑いの言葉を口にした。

アインクラッド第三十五層

2024年2月

第5話 腹が減ってはなんとやらッス（後書き）

短いですが、とりあえずここで区切ります。

次回も出来次第上げようと思えますのでお楽しみに。

第6話 オトモプリニーツ

「どうやらおいらはキリトの 使い魔？ になってしまったようだ。戦闘中、通常は好戦的なモンスターがプレイヤーに友好的な興味を示してくるといふイベントがごくまれに発生する。」

「その機を逃さず餌を与えるなどして飼い馴らし（テイミング）に成功すると、モンスターはプレイヤーの 使い魔 として様々な手助けをしてくれる貴重な存在になるのだが……」

「ちよつとこれを見てくれ！」

キリトは先ほどから何やら動かしていたのだが、何やら見つけたように人差し指で空中のある部分をクリックするとウィンドウが現れた。

それはどうやらPTメンバーパーティーリストのようだ。

キリトは、手を招いてパルとシリカにウィンドウを見るように促した。

すると……

「「！」「」」

キリトの名前の次に、見覚えのあるパルという名前が目に入った。

「パルってお前の名前なのか？」

「そっす」

キリトの問いにおいらは頷いた。

「もしかして、何かのクエストが開始したんじゃないですか」

シリカはそういうと、キリトは否定した。

「俺もそう思ってクエストログを確認したんだが、新しいクエストが始まったって訳では無いみたいなんだよな。」

キリトは開いてたウィンドウを閉じると屈んでパルと視線を合わせた。

「とりあえず、俺はキリトっていうんだがパルはこれからどうする？」

キリトは、着いてくるかとパルに問いかけた。

「おいらはキリトさんに着いて行くツス」

と言ってパルは頷いた。

キリトは「まあ、いいか」と了承すると何やら操作し始めた。

どうやら、シリカにPT要請を飛ばしたようだ。

シリカの方も要請を受諾したのか、操作をし終わるとパルの方に向いて

「改めまして、私の名前はシリカっていうんだ。よろしくね」

と言い、パルの頭を恐るおそる撫でた。

「「ちらちら」ぞ、よろしくツス」

おいらは答えるとシリカは一瞬驚いてから頷いた。

なぜ、シリカが一瞬驚いたのか疑問に思ったがどうやら、シリカもパルの言葉がわかるようになって驚いたらしい。

「もしかしたら、PTメンバーはパルの言葉がわかるようになるのかもしれないな」

キリトは、ポーチから地図アイテムを取り出すと、すたすたと歩き始めた。

おいら達3人は、街に向かって歩きながら話をしつつ、現在の状況を確認していた。

「つまり、パルは一か月もの間、迷いの森の森をさまよっていたの

か？」

キリトは先頭で地図を持ちながらおいらの話を聞いていた。

「そうなんツスよ」

パルはキリトの後ろに続き、返事をした。

「そういえば……」

その返事に対して、列の最後尾にいるシリカがなにかを言おうとして口をつぐんだ。

「ん、どうかしたのか？シリカさん」

キリトはそういうと振り返った。

「シリカでいいですよ。2週間ぐらい前に迷いの森でレアモンスターが出現したっていう情報があったんですけど、情報を聞いたプレイヤーがいくら探しても見つからなくて、ガセネタをつかまされたってほとんどのプレイヤーが言っていたのを聞いたことがあります。」

もしかして、パル君がそのレアモンスターなのかなって思ったんですけど……」

「あゝ多分、おいらツス」

「「え！」」

そういえば前ほどプレイヤーに出くわさなくなったツスね

パルは心の中でつぶやくとキリト達に出会うまでの一か月にあった出来事を大まかに話した。

猿人とそのボス猿との集団戦闘

いきなりプレイヤーに襲われ、逃げ回った日々

プレイヤーを追って森から出ようとしたら出られなくて・・・

あ

話をしているうちに森の外につながるエリアに着いたが、パルはここで重要な問題に気が付いた。

「どうしたのパル君？」

いきなり立ち止まったパルにシリカが声をかけた。

「おいら、一回この森から出ようとしてプレイヤーの後を気付かれないようにして行ったことがあったんすけど・・・
なぜか出ようとする最初目覚めた切り株の近くに移動させられたんすよ」

パルは汗をたらしながら事情を説明した。

「うーん、NPCが街の外に動かせないのと同じようなものかもしれないが・・・たぶん大丈夫じゃないか」

キリトはそごじぶちやくと、とりあえず問題があつてから考えることにした。

ついに森と外の境目に着いた時、パルは神に祈った。

そして、ついに

パルは迷いの森から出ることが出来た。

アインクラッド第二十五層

2024年2月

第6話 オトモプリニーツス(後書き)

出来たーーーーー(^o^) /

今回は少し時間がかかってしまいましたでしたが何とか完成させることに成功？しました。

正直、書いていてスピードが乗らないこと(苦勞)

ぶつちやけ思いつきで書いた小説ですが終わり方は決めています。なので、いくら時間がかかっても小説がなくなることは多分ありません。

これからも応援よろしくお願いします。

次回も出来次第投稿します。

P・S アクセル・ワールドの新刊を読んでいて次巻がとても気になる終わり方になっていて、多分6月発売だろうけど待ち遠しいです。

あと、最近SAOのWEB版も混ぜるかどうかも少し悩んでいます。作者は、アクセル7巻の巻末にあるSAO7巻のマザーズ・ロザリオの挿絵を見て悶えました。絶剣もかなり好きな話なのでこちらでも書けたらいいな

題名を修正しました(2011/02/19/13:26)

第7話 しゅがいくッス

35層主街区は、白壁に赤い屋根の建物が並ぶ牧歌的な農村のたたずまいだった。それほど大きい街ではないが、現在は中層プレイヤーの主戦場となっていることもあって、行き交う人の数はかなり多い。

初めて目にした主街区のプレイヤーの多さに驚いたパルだが、大通りに面した屋台から立ち上る香ばしい香りに気付くと共に腹の音が鳴った。どうやら、キリトから貰った食料アイテムを食べただけではまだ足らなかつたようだ。

パルは、まるで屋台に引き寄せられるかのように近づいて行った。そのパルの様子にキリトとシリカは微笑んだ。

数分後、パルは両手にこれでもかというくらいの本数の串焼き肉を握って戻ってきた。

パルはキリト達を待たせていたことによく気付いたのか慌てて走って来ると、食べながら串焼き肉を勧めた。

「きりほはんほしりははんもはへふッスか？（キリトさんとシリカ

さんも食べるツスか？」

二人は、何を言っているのかわからなかったがきつと串焼き肉を食べないかと言っていることに気付きた

「じゃあ、一本貰おうかな」「もらうね」

と言ってパルから受け取った。

物珍しそうに周囲を見回すパルとキリトを引き連れてシリカは、大通りから転移門広場に入ると顔見知りのプレイヤー達が声を掛けてきた。

その様子を見ていたキリトとパルは

「しりははんってほへほへっふへっ（シリカさんってモテモテツスね〜）」

「何言ってるかわからないが、とりあえず口の中を開けてからにしろよ」

と言った。

「あ、あの……お話ありがとうございますけど……」

受け答えが嫌味にならないよう一生懸命頭を下げてそれらの話を断り、シリカは傍らに立つキリトに視線を送って言葉を続けた。

「……しばらくこの人とパーティーを組むことになったので……」

ええー、そりゃないよ、と口々に不満の声を上げながら、シリカを取り囲む数人のプレイヤー達は、キリトにうさんくさそうな視線を投げかけたあと、串焼き肉を食べ続けるパルに気付いた。

「おい、あんた」

最も熱心に勧誘していた背の高いカタナ使いが、キリトの前に進み出て、見下ろす格好で口を開いた。

「見ない顔だけど、シリカちゃんと同じモンスターテイマーだからって抜けがけはやめてもらいたいな。俺らはずっと前からこの子に声かけてるんだぜ」

「そう言われても……なりゆきで……」

(もぐもぐもぐ)

困ったような顔で、キリトは頭をかく。そして、とりあえず成り行きを見守りつつ肉をほおばるパル。

「あの、あたしから頼んだんです。すみませんっ」

シリカはカタナ使いに言った。

最後にもう一度深々と頭を下げ、キリトのコートの袖を引っ張って歩き出す。今度メツセイジ送るよー、と未練がましく手を振る男たちから一刻も早く遠ざかりたくて、シリカは早足に歩いた。

転移門広場を横切り、北へ伸びるメインストリートへと足を踏み入れる。

ようやくプレイヤー達の姿が見えなくなると、シリカはほっと息をついて、キリトの顔を見上げて言った。

「……す、すみません、迷惑かけちゃって」

「いやいや」

キリトはまるで気にしていないふうで、かすかに笑みを滲ませている。

「すごいな。人気者なんだ、シリカ」

「そんな事ないです。マスコット代わりに誘われてるだけなんです、きつと。それなのに……あたしい気になっちゃって……一人で森を歩いて……あんなことに……」

「だいじょうぶ」

あくまで落ち着いた声で、キリトが言った。

「絶対生き返らせられるさ。心配ないよ」

シリカは涙をぬぐい、キリトに微笑みかけた。この人の言う事なら信じられると思いながら。

やがて、道の右側に、一際大きな二階建ての建物が見えてきた。シリカの定宿、『風見鶏亭』だ。そこで、自分が何も聞かずにキリトをここに連れてきてしまったことに気付く。

「あ、キリトさん。泊まりはどこで……」

「ああ、ホームは50層なんだけど……。面倒だし、俺もここに泊まろうかな」

「そうですか！」

嬉しくなって、シリカは両手をぱんと叩いた。

「パルはおいら空気ツスね」と思いながらとりあえず今抱えている問題について相談することにした。

「あの〜、おいらはどうすればいいツスカね」

「おいら、モンスターツスとパルは言う」とシリカは

「う〜ん、パル君をキリトさんの 使い魔 だとすると多分キリトさんと一緒に部屋じゃないかな？」

「と元ビーストタイマーである自分がそうだったからそうではないかと言った。」

「なら問題ないだろう、それよりもさっきの串焼き肉だけじゃ物足りないしさつさと宿で飯にしよう」

「キリトは何かおすすめはないかなと言うとシリカが

「ここのチーズケーキがけっこういけるんですよ」

と言いながらキリトのコートの袖を引つ張って宿屋に入ろうとした時、隣りに建つ道具屋からぞろぞろと四、五人の集団が出てきた。前を歩いていた男たちは広場の方に去って行ったが、最後尾にいた一人の女性プレイヤーがちらりと振り向くところの方を見ていた。

「?」

なんか見覚えがあるようなとパルが首をかしげているとこちらに声をかけてきた。

「あら、シリカじゃない」

宿に入ろうとしていたシリカは仕方なく立ち止まる。

「……どうも」

「へえーえ、森から脱出できたんだ。よかったわね」

真っ赤な髪を派手にカールさせた女性プレイヤーは、口の端をゆがめるように笑うと言った。

「でも、今更帰ってきてても遅いわよ。ついさっきアイテムの分配は終わっちゃったわ」

「要らないって言ったはずです！　急ぎますから」

どうやらシリカはこの女性プレイヤーが苦手なのか会話を切り上げようとしたが、女性はまだシリカを解放する気は無いようだった。

目ざとくシリカの肩が空いているのに気付き、嫌な笑いを浮かべる。なんか、眉間に シングルシュート を打ち込みたくなるツスねと物騒なことを考えたパルだがとりあえず自制した。

パルはどちらかと言えば盾使用と呼ばれるステータスだが、Lv99（一か月たつても次のLvまで経験値が半分以上足りない）とこの世界で異常とも思える高Lvなためそこら辺の中層プレイヤーではたとえ鎧に当たってもイエローゾーン、防御が薄いとレッドゾーンくらいまで削れてしまう。眉間なんて急所に当ててしまうと1撃死だ。

（まあ、犯罪防止コード圏内では、武器による攻撃をプレイヤーに命中させてもダメージは与えられないので死ぬことはないツスけどね）

「あら？ あのトカゲ、どうしちゃったの？」

シリカは唇を噛んだ。使い魔は、アイテム欄に格納することも、どこかに預けることもできない。つまり身の回りから姿が消えていれば、その理由は一つしかないのだ。そんな事は女性も当然知っているはずなのに、あくまでシリカの答えを待つようににやにや笑っている。

「死にました……。でも！」

キッとシリカは睨みつける。

「ピナは、絶対に生き返らせます！」

いかにも痛快という風に笑っていた女性の目が、わずかに見開かれた。小さく口笛を吹く。

「へえ、『思い出の丘』に行く気なんだ。でも、あんたのレベルで攻略できるの?」

「できるぞ」

シリカが答える前に、キリトが進み出てきた。シリカをかばうようにコートの陰に隠す。

キリトさん、漢あつこツスね〜とキリトのわきでようやく串焼き肉を食べ終えたパルは思った。

「そんなに難易度の高いダンジョンじゃない」

女性はあからさまに値踏み視線でキリトを眺め回したあと、わきに控えるパルに気付くと一瞬眉を吊り上げたが視線を戻すと、再び赤い唇に、再び嘲るような笑みを浮かべた。

「あ、アンタもその子にたらしこまれた口? 見たトコそんなに強そうじゃないけど」

パルを見た女性は少々動揺していることにキリトは気付いたが、シリカは悔しさのあまり体が震えていて気付かない。うつむいて、必死に涙を堪えているようだ。

え〜と、魔剣良鋼はっつと

とりあえず、パルは魔剣良鋼を投剣の上位スキルで投げようと操作しかけたところで……

「行こう」

シリカの肩に手が乗せられた。

キリトに促され、シリカは宿屋へと足を向けた。

パルは操作をやめて、とりあえずキリトについていく事にした。

「ま、せいぜい頑張ってね」

笑いを含んだ声が背中を叩いたが、もう振り返ることはしなかった。

第7話 しゅがいくツス（後書き）

2月中に終わるかな〜と思い始めた460（シロー）です。

前回の話でキリトの使い魔？になったパルですが、扱いは普通の使い魔と違いどちらかというとモンハンのオトモアイルーに近い感じですかね。

あと、今回の話に出てきたロザリア（話の中ではパル視点なので女性と表現しています）は書いていて、悪即斬したいな〜と思ってしました（テへ）。

「男のテへはイライラするツス」

ザクザクシャアザクツ（プリニー連弾が刺さる音）

【Immortal Object】（不死存在）

「H A H A H A！、いちプリニーの分際で作者に逆らうとは何事かなかな？」

「な、不死は卑怯つすよ」

「だまらっしゃい、パルの方こそLv99ってそれチートやるのが」

「な、作者のあんたが言うツスか」

「おだまり、あんたなんて・・・」

「ま、待つツス ご主人様それはしゃれにならない

」

「必殺、プリニー投げ（キリッ）」

「NO~~~~~（BUN）」

遠くの方で爆発音が鳴り響く

「ふ、むなしい戦いだっただぜ」

さて、三文芝居はここまでにして今回の話を書いていてこれだけ細かくやると終わるのか？と思ったのでこれから先の話はどうするか考え中です。

「細かくやるのはいいツスけど、今回は原作そのまんまだったツスね」

早！

「ご主人様、プリニーの回復力をなめるなツス」

まあ、1ヘルあれば魔界病院で回復できるしね。
ともあれ、アクセス数がなんと・・・

「なんと？」

累計PV14、297アクセス ユニーク4、285人

「？、普通10万アクセス記念とかからじゃないツスか？」

いやいや、俺はいま夜中でもハイテンションなんだよね。
だから、あとがきを思いつくままに書いています。

「これって、後から冷静に見て後悔するんじゃないツスか？」

モウマントイ！

これぐらいのテンションじゃなきゃ、あとがき書けない(キリッ)

「は、ご主人様はほおっておくことにするッス」

「さて、最後にこの小説（あとがきを含む）を読んでくれた読者様方に感謝をしつつ、今回はここで閉めさせていただくッス」

え、まだ、喋り足りないな、テラスター（ボソッ）

「な、に唱えてるッスか————」

と言いつつパルは必死に避ける。

「感想」（見える）

「評価」（見えるッス）

「ま、つてま、す」（あ、無理）

おもいつきりDO~~~~~
N

第8話 お酒は二十歳になってからッス

「ふわ〜、良く寝たッスってあれ？」

パルは自分がなぜベットの上に寝ているのかわからなかった。

「おいら、いつの間に寝たッスか？」

パルはベットに入った記憶がないがとりあえず起きてみようとしたところ、背後から抱きつかれていることに気付いた。

恐るおそる背後を見ると、そこには瞼を閉じてスヤスヤと寝ているシリカの顔があった。

「・・・why?なぜ？」

パルは滝のように汗をたらしながら、昨日何があったか思い出そうとした。

パルはキリトの後ろについて行って宿屋『風見鶏亭』の中に入った。
『風見鶏亭』の一階は広いレストランになっている。

キリトはシリカを奥まった席に座らせ、パルにここで待っていてくれ
と言うとNPCの立つフロントに歩いていった。

チェックインを済ませ、カウンター上のメニューを手早くクリック
してから戻ってくる。

パルは俯いたまま座っているシリカを励まそうとしたが方法が思い
つかず困っていた。

とりあえず、シリカの隣に座るとキリトが戻ってきてシリカの向か
いの席に腰掛けた。

シリカは向かいの席に腰掛けたキリトに、自分のせいで不愉快な思
いをさせてしまったことを謝ろうと口を開いた。

だが、キリトは手を上げてそれを制すると、軽く笑った。

「まずは食事にしよう」

ちょうどその時、ウェイターが湯気の立つマグカップを三つ持って
きた。

目の前に置かれたそれには、不思議な香りの立つ赤い液体が満たさ
れている。

パーティー結成を祝して、というキリトの声にこちんとカップを合
わせ、シリカとパルは熱い液体を一口すすった。

「……おいしい……」

「……不思議な味ッス」

スパイスの香りと、甘酸っぱい味わいは、どこことなくホットワインに似ていた。

パルはもう一度、味わうようにカップを傾けた。

「あの、これは……？」

シリカはキリトに聞くと、キリトはにやりと笑い、言った。

「NPCレストランはボトルの持ち込みもできるんだよ。俺が持ってた『ルビー・イコール』っていうアイテムさ。カップ一杯で敏捷力の最大値が1上がるんだぜ」

パルはポケモンでいう所の インドメタシン みたいなもんツスねと納得した。

「そ、そんな貴重なもの……」

「酒をアイテム欄に寝かせてても味が良くなるわけじゃないしな。俺、知り合い少ないから、開ける機会もなかなかないし……」

キリトはおどけたように肩をすくめる。

シリカは笑いながら、もう一口ごくんと飲んだ。

やがてカップが空になっても、その暖かさを惜しむようにシリカはしばらくそれを胸に抱いていた。

視線をテーブルの上に落とし、ぽつりとつぶやく。

「……なんで……あんな意地悪言うのかな……」

キリトは真顔になると、カップを置き、口を開いた。

「君は……大規模ネットゲームは、S A Oが……？」

「初めてです」

「そうか。どんなオンラインゲームでも、キャラクターに身をやつすと人格が変わるプレイヤーは多い。善人になる奴、悪人になる奴……。それをロールプレイと、従来は言ってたんだろうけどなでも俺はS A Oの場合は違うと思う」

一瞬、キリトの目が鋭くなった。

「今はこんな、異常な状況なのにな……。そりゃ、プレイヤー全員が一致協力してクリアを目指すなんて不可能だってことはわかってる。でもな、他人の不幸を喜ぶ奴、アイテムを奪う奴、殺しまでする奴が多すぎる」

キリトは、シリカの目をまっすぐ見つめてきた。怒りの中に、どこか深い悲しみの見える目の色だった。

「俺は、ここで悪事を働く奴は、そのプレイヤー本人が腹の底から腐った奴なんだと思ってる」

吐き捨てるように言う。直後、気圧されたようなシリカの表情に気付き、すまない、と軽く笑った。

「……俺だって、とても人のことは言えた義理じゃないんだ。人助けなんてろくにしたことないしな。仲間を 見殺しにしたことだつて……」

「キリトさん」

シリカは、目の前の黒衣の剣士が、何か深い懊悩を抱えているのだとおぼるげに悟っていた。

パルもどことなく悟っているが、ボキャブラリーが貧弱なため、いたわる言葉を掛けることが出来ない。

シリカはテーブルの上で握り締められたキリトの右手を、両手でぎゅっと包み込んだ。

「キリトさんは、いい人です。あたしを、助けてくれたもん」

「そうツスよ、おいらもキリトさんが助けてくれたからこそ、あの森から出ることが出来たんツスよ」

パルは席の上に立ちながら言った。

キリトは一瞬驚いたようにみえたが、すぐに口元に穏やかな微笑が浮かぶ。

「……俺が慰められちゃったな。ありがとう、シリカ、パル」

シリカは顔を真っ赤にすると、あわててキリトの手を放し、両手で胸をぎゅっと抑えた。

「まあ、パルの時はあそこで腹の虫が鳴ったら、そりゃああするしかないだろう」

キリトはおどけながら一言付け加えると、シリカも思い出したのか、

二人して笑い出した。

「一言多いッス」

パルはそう言いつつも、こんな日もいいもんッスねと思った。

「そうだ！、おいらもパーティー結成を祝して」

パルはそういうとポーチの中からある壺を取り出した。

「それって、もしかして……」

シリカは数時間前に見たことのある壺をパルが持っていることに驚いた。

ドリンクエイプ が持っていた回復アイテムだからだ。

「猿酒 って言うアイテムッス」

猿酒 は、 ドトドリンクエイプ （ボス猿）が落としたアイテムで、パルが回復アイテムとしてポーチの中に入れておいたものだ。

「ちょっと失礼」

キリトはそう言うと 猿酒 を指先でクリックしてポップアップメニューを表示させる。

一応、どのような効果があるか確認のためだ。

「ちょっとした回復ポーションみたいだな」

キリトはそう言って、ウェイターを呼ぶと 猿酒 を渡した。
ついでに、三人の食事も注文した。

しばらくしてからグラスに注がれた 猿酒 、シチューと黒パン、
デザートにチーズケーキと運ばれてきた。
キリトはグラスを軽く挙げると、シリカとパールもそれに続いて

「ではもう一度、パーティーの結成を祝して」

「『乾杯（ツス）』」

と言い、グラスを合わせた。

「ここまでは、覚えてるツス」

パールはここから先が全く覚えていない。
もしかして、酔い潰れて寝ちゃったツスかと思ったが、その場合、
シリカがここにいる理由が見当つかなかった。

「ふわあ〜」

昨日何があつたツスかと悩んでいると背後で声が聞こえた。同時に抱きつきという拘束が解かれ、パルは起き上がった。

まわりを確認してみるとシリカは大きく一つ伸びをしてる。どうやらまだ寝ぼけているようだ。

部屋の中には、ティーテーブルとイスが一脚。

キリトさんはどこだろうとさがしてみると窓から差し込む朝の光の中で、床に座り込み、ベッドに上体をもたれさせて眠りこけているキリトの姿があつた。

どういう状況ツスか？

パルは混乱しているとシリカが顔を真っ赤にして頭から湯気が出ていた。

恥ずかしさからか、両手で顔を覆って身悶えている。

パルはシリカが落ち着くのを数十秒ほど待つと声をかけた。

「シリカさん、おはようツス」

「ひゃ！、はパ、パル君、おはよう」

シリカ驚きからか少々焦っているようだがあいさつを返した。パルが起きていたことに驚いているよう。

「パル君、見てた？」

シリカは恐る恐る聞くとパルは先ほどの事は見なかったことにした。

「ふわぁ〜、今起きたところッス」

パルは全身を伸ばしながら答えた。

シリカはベッドから出て床に降り立つとキリトの前にまわり、顔を覗き込んでいる。

パルもベッドから降り立つとシリカに昨日のことについて聞こうとした。

しかし、シリカが口元に指を近づけて静かにというジェスチャーをするとキリトの肩をそとつつきながら呼びかけた。

「キリトさん、朝ですよー」

その途端、キリトはぱちりと目を開けると、まばたきを繰り返しながらシリカの顔を数秒間見つめた。
すぐに慌てたような表情を浮べ、

「あ……。ご、ごめん!」

いきなり頭を下げた。

「起こそうかと思ったんだけど、よく寝てたし……。君の部屋に運ぼうにも、ドアは開かないし、それで……」

プレイヤーが借りた宿屋の部屋はシステムの絶対に不可侵で、フレンドでもない限りどのような手段を用いようとも侵入することはできない。

シリカも慌てて手を振ると、言った。

「い、いえ、あたしこそ、ごめんなさい！ ベッド占領しちゃって……」

おいらもツスけどね

「いやあ、ここじゃあどんな格好で寝ても筋肉痛とかないしね」

立ち上がったキリトは、言葉とは裏腹に首をぼきぼき曲げながら、両手を上げて伸びをした。

思い出したようにシリカとパルを見下ろし、口を開く。

「……とりあえず、おはよう」

「あ、おはようございます」

「おはようツス」

三人は顔を見合わせて笑った。

「ところで、おいら昨日の記憶が少しないんツスけど何かあったツスか？」

パルが聞くと二人は顔を見合わせて笑った。

おいら、なんかヤツチャツタツスか？

キリトさんの話によるとあの後、酔っ払ったパルはレストランのお立ち台のような場所で

「見るッス！この無駄のない無駄な動き」

と言いながらクルクル回っていたそうさ。

多分、プリニー踊り を踊っていたんだと思う。

しかも、他の酔っ払いや調子のいい客などもいきなり踊ったりして、ちょっとしたドンチャン騒ぎだったらしい。

もしかして、プリニー踊り の効果で混乱した？

その後、電池が切れたように動きが止まったパルをキリトが回収して、部屋のベットに寝かせた。

シリカがなぜここにいるかというと、今日挑戦する47層の 思い出の丘 について聞いているうちに眠ってしまい、今に至るといふ。

教訓：酒は飲んでも飲まれるなッス

一階に降り、しっかりと朝食を摂ってから表の通りに出ると、すでに明るい陽光が街を包んでいた。

これから攻略に出かける昼型プレイヤーと、逆に深夜の冒険から戻ってきた夜型プレイヤーが対照的な表情で行き交っている。

宿屋の隣の道具屋でポーション類の補充を済ませ、三人はゲート広場へと向かった。

幸い、昨日の勧誘組には出会わずに転移門へと到着することができた。

青く光る転送空間に飛び込もうとして、シリカははたと足を止める。

「あ……。あたし、47層の街の名前、知らないや……」

シリカはあわててマップを呼び出して確認しようとする、キリトが右手を差し出してきた。

「いいよ、俺が指定するから」

恐縮しながらその手を握る。

パルもキリトの足にしがみつく。

「転移！ フローリア！」

キリトの声と同時にまばゆい閃光が広がり、三人を覆い包んだ。

第8話 お酒は二十歳になってからッス（後書き）

前回のようなあとがきは、気が向いたときに活動報告の方ですることになります。

ついに47層に行くことが出来ました。

短編の黒の剣士を2月中に終わらせるといいましたが無理でした。

なので、ゆっくり進めつつ内容を充実させていこうと思います。

）2011/03/08/24:00（

第9話 これはプリーツスか？ はい、名前はパルツス（前書き）

1か月以上空けてしまって、すいませんでした>（| |）<

しかも短い・・・

第9話 これはプリニーツスカ？ はい、名前はパルツス

一瞬の転送感覚のあと、ゆっくり目をあけたその途端、パルの視界には様々な色彩の乱舞が飛び込んできた。

「うわあ……！」

シリカは思わず歓声を上げる。

四十七層主街区ゲート広場は、無数の花々で溢れかえっていた。円形の広場を細い通路が十字に貫き、それ以外の場所は煉瓦で囲まれた花壇となっていて、名も知れぬ草花が今が盛りと咲き誇っている。

「すごい……」

「これはすごいッス」

「この層は通称フラワーガーデンって呼ばれてて、街だけじゃなくてフロア全体が花だらけなんだ。時間があつたら、北の端にある『巨大花の森』にも行けるんだけどな」

「それはまたのお楽しみにします」

シリカはキリトに笑いかけると、花壇の前にしゃがみこんだ。

その様子を見てパルは、男のおいらにとっては花より団子ッスと思

い、何か珍しい物（主に食べ物）がないか周囲を見回すが出店や露店に目新しいものはなかった。

花畑の方には何かないか？と思い見てみると、花の間の小道を歩く人影は、ほとんどが男女の二人連れだ。

皆しつかりと手を繋ぎ、あるいは腕を組んで楽しげに談笑しながら歩いている。

どうやらこの場所はそういうスポットになっているらしい。

こういう場所には縁がない男にとっては非常に困る。

シリカの傍らに立つキリトも所在がなさそうだ。

心ゆくまで花の香りを楽しみ、ようやく立ち上がったシリカはあらためて周囲を見回し、キリトの方を向いた。

何やら、顔が赤くなっているのはきつと、まわりから見たら二人もそういうふうに見えるのではと思ったからだろう。

表現がオーバー気味なSAOなので、顔を見れば照れているのは丸わかりだが、シリカの顔は俯いているので身長の高いパルにしかわかっていなかった。

顔の火照りを誤魔化すようにシリカは、元氣よく言う。

「さ……さあ、フィールドにいきましょうー！」

「う、うん」

キリトは一度ぱちくりと瞬きをしたが、すぐに頷いて、シリカの横を歩き始めた。

パルはそんな二人の様子を後ろからほほえましく思いながら、黙っ

て後に続いた。

ゲート広場を出ても、街のメインストリートは同じように花に埋め尽くされていた。

途中、シリカとキリトが現実での話をしたりしていたり、パルは馬に蹴られたくないツスからとあらあらうふふな感じで見守っているといつのまにか街の南門まで歩いてきていた。

銀色の細い鋼材で組み上げた巨大なアーチに、つる性の植物が這い回って無数の白い花を咲かせている。

メインストリートはその下を抜け、緑の丘に挟まれた街道となって春霞の向こうに消えている。

「さて……いよいよ冒険開始なわけだけど……」

「はい(ツス)」

シリカはキリトの横から離れ、表情を引き締めて頷いた。

パルも二人に追いつくと顔を上げた。

「シリカのレベルとその装備なら、ここのモンスターは決して倒せない敵じゃない。でも……」

喋りながらキリトはベルトにつけた小さなポーチを探り、中から水色のクリスタルを掴み出すとシリカの手の中に落とす。転移結晶だ。

「フィールドでは何が起きるかわからない。いいかい、もし予想外の事態が起きて、俺が『離脱しろ』って言ったら、必ずその結晶でどこの街でもいいから跳ぶんだ。俺のことは心配しなくていい」

「で、でも……」

ん？、おいらって結局、転移結晶をまともに使えんのか？

パルが転移結晶を使ったときは、通常のエリアじゃなかったため、まともに使えるかどうかわからない。

まあ、たぶん大丈夫っすね

パルの防御の硬さは、十分前線で盾壁が出来るほどであり、その上、今回はその防御をイエローゾーンまで削ったキリトもいる。よほどのイレギュラーな事態が起こらない限り、この層のモンスターで危険はないはずだ。

結晶の方は今度検証する必要があるツスねとパルは思考の海から戻ってきた。

「約束してくれ。俺は……一度パーティーを全滅させてるんだ。二度と同じ間違いは繰り返したくない」

顔を上げ、キリトの表情を見るとあまりにも真剣で、シリカとパルは頷くしかなかった。

キリトは約束だよと繰り返すと、安心させるようにニツと笑い、言った。

「じゃあ、行こうー!」

「はい!」

「うっす」

パルは、装備したプリニーダガーの感触を確かめながらこの世界に
来てから初めての共同戦に対して心の奥では楽しみであると感じて
いた。

「このモンスターはどんなのツスカね」

第9話 これはプリニーツスか？ はい、名前はパルツス（後書き）

タイトルは、これはゾンビですか？を参考にしています。

理由は、プリニーの声を演じてらっしゃる間島淳司さんが主人公の歩君の声をしてるのですよ。びっくりしました。

アニメの声を聴いてみて比べてみるのもいいかもしれない。

あと、今季の緋弾のアリアの主人公の遠山キンジの声も間島さんですよ。

アニメ談義は、このあいだ掲載したネタコメディ短編の「これは引きこもりですか？はい、それがなにか？」の方でやってるので機会があれば見て下さい。

ちなみに、内容はゾンビじゃなくて魔法少女まどか マギカです。

さて、宣伝もこれくらいにして本編ですが区切りを良くしたらこうなりました。

原作を知ってる人はわかると思いますが、今回は、100%戦闘に入ります。

たぶん、早くてもゴールデンウエーク明け、遅いと6月あたりになりそうです。

忘れちゃいけない、作者は就活中・・・

最後に、この度の東日本大震災により被害を受けられた皆様に心からお見舞い申し上げます。

この小説を読んで少しでも明るくなってくれたら幸いです。

第10話 思い出の丘ッス

RPGにおいてフィールドやダンジョンの種類を見れば大抵どのようなモンスターが出てくるか予想がつくものである。

迷いの森では、森に棲んでいる獣人系や獣系のモンスターが主に出てきたのは、パルの記憶にも新しい。

では、この四十七層ではどのようなモンスターが出るかということ・・・

「ぎゃ、ぎゃあああああ!? なにこれ !? き、気持ちワル !?!」

四十七層のフィールドを南に向かって歩きだして数分後。早速最初のモンスターとエンカウントしたのだが。

「や、やあああああ!! 来ないで 」

背の高い草むらをかきわけて出現したソレは、シリカの思いもよらぬ姿をしていた。

パルはフィールドの雰囲気からもしかしてこんなのが出るのではと覚悟をしていたので悲鳴は出なかったが、それでも気持ち悪い。

出てきたモンスターを一言で表現すれば 歩く花 だ。

濃い緑色の茎は人間の腕ほど太く、根元で複数に枝分かれしてしっかりと地面を踏みしめている。

茎もしくは胴のてっぺんにはヒマワリに似た黄色い、巨大花が乗っており、その中央には牙を生やした口がぱっくりと開いて毒々しい真っ赤な色の内部をさらけ出している。茎の中ほどからは二本の肉質のツタがよろりと伸び、どうやらその腕と口が攻撃部位となっているらしい。人食い花は大きな口にニタニタした笑いを浮かべ、腕あるいは触手を振り回してシリカに飛び掛ってきた。

「やだつてば」

シリカはほとんど目をつぶって短剣をぶんぶん振り回すが、それはダメージが与えられない。傍らに立つキリトが呆れたような声で言った。

「だ、だいじょうぶだつて。そいつは凄く弱いから。花のすぐ下のちよっと白っぽくなつてるところを狙えば簡単に」

「だ、だつて、気持ち悪いんですうつつ」

「まあ、言いたいことはわかるツスけど、ぜんぜんダメージが通つてないツスよ」

パルは歩く花の上に見えるHPバーを見ながら言った。

「そいつで気持ち悪がってたら、この先に進んだら大変だぞー。花がいくつもついてる奴や、食虫植物みたいななのや、ぬるぬるの触手がいっぱい生えた奴まで……」

「キエ　　！！」

シリカはキリトの言葉に鳥肌が立って、悲鳴を上げつつ無茶苦茶に繰り返したソードスキルは、当然ながら見事に空を切った。

技後硬直時間にするりと滑り込んできた二本のツタが、シリカの両脚をぐるぐると捉え、思いがけない怪力でひょいと持ち上げた

「わ!？」

頭を下にして宙吊りになったシリカのスカートが、仮想の重力に馬鹿正直に従ってずりりつと下がる。

「わわわ!？」

シリカは慌てて左手でその裾をばしつと押さえ、右手でツタを切るうとするものの、無理な体勢のせいかうまくいかない。顔を真っ赤にしながら、シリカは必死に叫んだ。

「きつ、キリトさん、パル君助けて！ 見ないで助けて!!！」

「そ、それはちょっと無理だよ」

左手で目のあたりを覆ったキリトが困ったように答える。

パルは右手に持ったプリニードガーを振り上げると投剣スキルの発展技 スナイプシュート のモーションを起こした

スナイプシュート は投剣スキルの中でも命中率の非常に高いソードスキルであるが、技の使用前と使用後の硬直時間が シングルシュート と比べると明らかに長いため、実践向きのスキルではない。

しかし、今回のシリカの両脚に巻きついたツタを切るためには シングルシュート では心許ないのでこちらを使用することにした。

「いま、右足のツタを切るッスよ」

シリカはパルの方を向くと意図に気付いたのか、お願いと答えた。

「ッ
ッ」

パルが放った スナイプシュート は、まるで吸い込まれるかのよう
にシリカの右足に巻きついてしているツタに向かって行った。

ツタが切断されるとシリカの体がかくと下がりと花の首根つこ
が射程に入ったところで、シリカは再度ソードスキルを繰り出した。
今度は見事に命中し、巨大花の頭がコロリと落ちると同時に全体も
がしゃーんと爆散。

ポリゴンの欠片を浴びながらすたと着地したシリカは、振り向く
とキリトとパルに訪ねた。

「……………見ました？」

キリトは、左手の指の隙間からシリカを見下ろしつつ答えた。

「……………見てない」

パルは、正直に答えた。

「少しだけ、白　ぶぐらば」

顔を真っ赤にしたシリカが恥ずかしさのあまりパルを吹っ飛ばした
がキリトは見なかったことにした。

その後、五回ほど戦闘をこなすとうやくモンスターの姿に慣れることができ、三人は快調に行程を消化していった。キリトは基本的には戦闘に手を出さず、シリカが危なくなると剣で攻撃を弾くだけのアシスト役に徹していた。パルもキリトにならって戦闘には手を出さなかったが途中から武器を 魔王の盾 に変えて防御役をこなしていった。

パーティープレイでは、モンスターにダメージを与えた量に比例して経験値が分配される。

高レベルモンスターを次々に倒すことで、普段の何倍ものスピードで数字が増加していき、シリカのレベルはたちまちレベルが一つ上がってしまった。

赤レンガの街道をどんどん進むと小川にかかった小さな橋があり、その向こうに一際小高い丘が見えてきた。

道はその丘を巻いて頂上まで続いているようだ。

「あれが『思い出の丘』だよ」

「見たとこ、一本道みたいツスね？」

「ああ。ただ登るだけだから道に迷う心配はないけど、モンスター

の量は相当らしいな。気を引き締めて行こう」

「はい（ツス）！」

色とりどりの花が咲き乱れるのぼり道に踏み込むと、キリトの言葉通りエンカウントが激しくなった。

植物モンスターの図体も大きさを増すが、シリカの持つ黒い短剣の威力は想像以上に高く、連続技のワンセットで大概の敵は倒すことができる。

想像以上と言えば、キリトとパルの実力も底が知れないものがあった。

ドラクエイブ二匹を一撃で四散させるのを見たときから、かなりのハイレベル剣士だろうとは予想していたが、あそこから12層も上に来ているのにすこしも余裕を失う様子はない。

モンスターが複数現れても一匹を除いてたちまち撃破し、シリカの手助けをしてくれる。

その、ハイレベル剣士のキリトの攻撃を耐えきったパルの防御力も底が見えない。

パルは、その鉄壁の防御力を生かしてシリカやキリトの死角から繰り出された攻撃を的確に防いでくれている。

戦闘を続けていくうちに弧を描く小道のループはどんどん急角度になっていった。激しさを増すモンスターの襲撃を退け退け、高く繁った木立の連なりをくぐると　そこが丘の頂上だった。

「うわあ……！」

シリカは思わず数歩駆け寄り、歓声を上げた。

空中の花畑、そんな形容が相応しい場所だった。

周囲をぐるりと木立に取り囲まれ、ぼつかりと開けた空間一面に美しい花々が咲き誇っている。

「とうとう着いたな」

シリカの背後から歩み寄ってきたキリトが、剣を背中の鞘に収めながら言った。

「やっと着いたツス〜〜」

キリトの後ろからパルが続いてきた。

「ここに……その、花が……？」

「ああ。真中あたりに岩があって、そのてっぺんに……」

キリトの言葉が終わらないうちに、シリカは走り出していた。

確かに花畑の中央に白く輝く大きな岩が見える。息を切らせながら、シリカの胸ほどまでの高さがある岩に駆け寄り、おそるおそるその上を覗き込む。

「え……」

しかし、そこには何もなかった。

くぼんだ岩の上には糸のような短い草が生え揃っているだけで、花らしきものはまるで見当たらない。

「ない……ないよ、キリトさん！」

シリカは追いついてきたキリトを振り返り、叫んだ。

抑えようもなく涙が滲んでくる。

「そんなはずは……。いや、ほら、見てごらん」

キリトの視線に促され、シリカは再び岩の上に視線を戻した。
すると

「あ……」

「すごいッス」

柔らかそうな草の間に、今まさに一本の芽が伸びようとしているところだった。

二枚の真っ白い、小さな葉が貝のように開き、その中央から細く尖った茎がするすると伸びていく。

早回しのフィルムのように、その芽はたちまち高く、太く成長していき、やがて先端に大きなつぼみを結んだ。

純白に輝くその涙滴型のふくらみは、錯覚でなく内部から真珠色の光を放っている。

息を詰めて三人が見守るなか、徐々にその先端がほころんで、しやらん、と鈴の音を鳴らしてつぼみが開いた。光の粒が宙を舞った。

三人はしばらく身動きもせず、小さな奇跡のように咲く白い花を見つめていた。

七枚の細い花弁が星の光のように伸び、その中央からふわり、ふわりと光がこぼれては宙に溶けていく。

とてもこれに手を触れることなどできないような気がして、シリカはそっとキリトを見上げた。

キリトは優しい笑顔を浮かべながらゆっくり頷いた。

パルも飛び跳ねながら早く早くと急かす。

頷き返し、シリカは花にそっと右手を伸ばした。

絹糸のように細い茎に触れた途端、それは氷のように中ほどから砕け、シリカの手の中には光る花だけが残った。

息を詰め、そっとその表面を指で触れてみる。

ネームウインドウが音もなく開く。『プネウマの花』。

「これで……ピナを生き返らせられるんですね……」

「ああ。心アイテムに、その花の中に溜まっている雫を振り掛ければいい。

だがここは強いモンスターが多いから、街に帰ってからのほうがいいだろうな。

もうちょっと我慢して、急いで戻ろう」

「はい！」

「うっす！」

シリカは頷くと、メインウインドウを開き、花をそこに乗せた。アイテム欄に格納されたのを確認し、それを閉じる。

正直に言えば転移結晶で一気に帰還してしまいたかったが、シリカはぐっと我慢して歩き始めた。

とてつもなく高価なクリスタルは本当に危険なぎりぎりの状況でのみ使うべきものなのだ。

幸い、帰り道ではほとんどモンスターと出くわすことはなかった。ほとんど駆け下りるように道を進み、麓に到達する。

あとは街道を一时间歩くだけ、それでまたピナに会える。弾む胸を抑えながら、小川にかかる橋を渡ろうとしたとき。

不意に後ろからキリトの手が肩にかけられた。きよとんとして立ち止まる。

振り返ると、キリトは厳しい顔で橋の向こう、道の両脇に繁る木立のほうを睨み据えていた。

その口が開く。

「そこに隠れてる奴、出てこいよ」

第10話 思い出の丘ッス（後書き）

息抜きで投稿しました。

ぶっちゃけ、ここまでは原作とほぼ変わらないと思います。

次は、出来次第投稿します。

もしかしたら、5月中に出来るかもしれませんが期待せずにご等待着いてください。

第11話 俺たちの戦いはまだまだ続くッス（前書き）

打ちきりじゃないッスよ。

今まで、書いてきた中で一番長い。

第11話 俺たちの戦いはまだまだ続くッス

「そこに隠れてる奴、出てこいよ」

「え……………!?」

パルとシリカは慌てて木立に目を凝らした。だが人影は見えない。

緊迫した数秒が過ぎたあと、不意にがさりと木の葉が動いた。

プレイヤーを示すカーソルが表示される。色はグリーン、犯罪者ではない。

短い橋の向こうに現れたのは、昨日会った女性プレイヤーだった。炎のように真っ赤な髪、同じく赤い唇、エナメル状に輝く黒いレザーアーマーを装備し、片手には細身の十字槍を携えている。

「あー!」

パルは、昨日あった時に見覚えがあると感じた理由にようやく気付いた。

1週間以上前に、パルが初めて会ったプレイヤーのパーティーの中の一人だ。

パルは後衛でチマチマと攻撃していたのであまり印象に残っていなかったのですっかりと忘れていた。

「ろ……ロザリアさん……！？　なんでこんなところに……！？」
どうやら、女性プレイヤーの名前はロザリアというらしい。

ロザリアはシリカの問いには答えず、唇の片側を吊り上げて笑った。

「アタシのハイディングを見破るなんて、なかなか高い索敵スキルね、剣士サン。あなどってたかしら？」

そこでようやくシリカに視線を移す。

「その様子だと、首尾よく『プネウマの花』をゲットできたみたいね。おめでと、シリカちゃん」

ロザリアの真意がつかめず、シリカは数歩あとずさった。
何とは言えないが嫌な気配を感じる。

パルも嫌な予感がすると感じ、すぐさま警戒とともに戦闘に移せる準備をする。

すると、その直感を裏切らないロザリアの言葉が続き、シリカを絶句させた。

「じゃ、さっそくその花を渡してちょうだい」

「え！？」

パルはロザリアの言っている意味が解らなかった。
いや、解らなかった訳ではないが理解が出来なかった。

今回手に入れた花は、シリカの使い魔を生き返らせるために苦労して手に入れたものだ。

それを横取りするロザリアの神経が解らない。

「……………！？　な……………何を言ってるの……………」

どうやら、シリカも同じようだ。

その時、今まで無言だったキリトが進み出て、口を開いた。

「そうは行かないな、ロザリアさん。いや　犯罪者^{オレンジ}ギルド　タイタンズハンド　のリーダーさん、と言ったほうがいいかな」

ロザリアの眉がぴくりと跳ね上がり、唇から笑いが消えた。

シリカは何度目かの驚愕に捕らわれ、呆然とキリトを見上げた。

「オレンジギルド？」

パルは疑問を感じた。

オレンジという色は、犯罪を犯したプレイヤーのカーソルの色がオレンジに変わることから、つけられた略称である。
しかし……………

「え……………でも……………だって……………ロザリアさんは、グリーン……………」

パルと同じく、シリカも疑問を感じたようだ。

「オレンジギルドと言っても、全員が犯罪者カラーじゃない場合も

多いんだ。グリーンのメンバーが街で獲物をみつくり、パーティーに紛れ込んで、待ち伏せポイントに誘導する。昨夜俺たちの話を盗聴してたのもあいつの仲間だよ」

「そ……そんな……」

「ま、マジツスカ？」

シリカとパルは愕然としながらロザリアの顔を見やる。

「じゃ……じゃあ、この二週間、一緒のパーティーにいたのは……」

ロザリアは再び毒々しい笑みを浮かべ、言った。

「そうよオ。あのパーティーの戦力を評価すると同時に、冒険でたつぷりオカネが貯まって、おいしくなるのを待ってたの。本当ならあのパーティーは今日ヤツちゃう予定だったんだけどー」

シリカの顔を見つめながら、ちろりと舌で唇を舐める。

「一番楽しみな獲物だったあんたが抜けちゃうから、どうしようかと思っただら、なんかレアアイテム取りに行くって言うじゃない。その プネウマの花、今が旬だから、とってもいい相場なのよね。やっぱり情報収集は大事よねえー」

それに、という言葉とともにパルに視線を向けた。

「その、ペンギンもどきには世話になったからね。覚えてるかしら？」

ロザリアは手を振りながらパルを睨み付ける。

「さつき、思い出したツスよ。それに、あのとき襲ってきたのはそ
つちからツスよ」

パルは律儀にも返事をしたが、ロザリアにはプリニーツスと聞こえ
るだけなのであまり意味がなかった。

ロザリアはパルからキリトに視線を向けると肩をすくめた。

「でもそこの剣士サン、そこまで事情がわかってながらノコノコそ
の子に付き合うなんて、バカ？ それとも本当に体でたらしこまれ
ちゃったの？」

ロザリアの下衆な侮辱に、シリカは視界が赤くなるほどの憤りを覚
えた。

腰の剣に腕を動かそうとしている。

パルの方は、瞬間的に武器をプリニーダガーに変えたところだ。
ポーチから剣を抜こうと腕を動かしかけたところで、キリトが前に
立つ。

シリカの方も肩をぐっと掴まれている。

「いいや、どっちでもないよ」

あくまで冷静なキリトの声。

「俺もあんたを探してたのさ、ロザリアさん」

「 どういうことかしら? 」

「 あんた、十日前に、38層で『シルバーフラグス』っていうギルドを襲ったな。メンバー四人が殺されて、リーダーだけが脱出した」

「 …… ああ、あの貧乏な連中ね 」

眉ひとつ動かさずに、ロザリアが頷く。

「 リーダーだった男はな、毎日朝から晩まで、ゲート広場で泣きながら仇討ちをしてくれる奴を探してたよ 」

キリトの声を、ゾクリとするような冷気が包んだ。硬く研ぎ上げた氷の刃にも似た、触れるもの全てを切り裂く響き。

「 でもその男は、依頼を引き受けた俺に向かって、あんたらを殺してくれとは言わなかった。黒鉄宮の牢獄に入れてくれと、そう言っただよ。 あんたに、奴の気持ちがわかるか? 」

「 解んないわよ 」

面倒そうにロザリアは答えた。

「 何よ、マジになっちゃって、馬鹿みたい。ここで人を殺したって、ホントにその人が死ぬかどうかわかんないじゃない。そんなんで、現実に戻った時罪になるわけがないわよ。だいたい戻れるかどうかもわかんないのにさ、正義とか法律とか、笑っちゃうわよね。アタシそういう奴が一番嫌い。この世界に妙な理屈持ち込む奴がね 」

ロザリアの目が凶暴そうな光を帯びる。

もう限界ッス

パルは今にも飛び出しそうになるがキリトがそれを制する。その様子に気付いてないロザリアは話を続ける。

「で、アンタ、その死にぞこないの言うこと真に受けて、アタシらを探してたわけだ。ヒマな人だねー。ま、あんたの撒いた餌にまんまと釣られちゃったのは認めるけど……でもさあ、たった二人と一匹でどうにかなるとでも思ってたの……？」

唇がきゅつと嗜虐的な笑みを刻んだ。掲げられた右の指先が、素早く二度宙を仰いだ。

途端、木立が激しく揺れ、次々と人影を吐き出した。

視界に連続して幾つものカーソルが表示される。ほとんどが禍々しいオレンジ色だ。

その数　　十。

待ち伏せに気付いていなかったら完全に囲まれていただろう。

新たに出現した十人の盗賊は、皆派手な格好をした男性プレイヤーだった。

こぞって髪型を下品にカスタマイズし、銀のアクセサリやサブ装備をじゃらじゃらと身に纏っている。

男たちはやにやと笑いを浮かべながら、シリカの体に粘つくような視線を投げかけてきた。

激しい嫌悪を感じて、シリカはキリトのコートの陰に姿を隠した。小声で囁きかける。

「き、キリトさん……人数が多すぎます、脱出しないと……！」

パルは男たちの格好が世紀末っぽい思いつつも、それほど怯えてはいなかった。

「だいじょうぶ。俺が逃げろ、と言つまでは、結晶を用意してそこで見ればいいよ。」

それから、パルはここでシリカのことを頼むな。」

穏やかな声で答えると、キリトはシリカの頭にほん、と手を置き、パルにここは任せたと言うとそのまま、すたすたと橋に向かって歩き出した。

シリカは呆然と立ち尽くしている。

「任されたツス」

パルはキリトの背中に答える。

いくらなんでも無茶だ、シリカはそう思って、再び大声で呼びかけた。

「キリトさん……！」

その声がフィールドに響いた途端。

「キリト……？」

不意に、盗賊の一人が呟いた。笑いを消して眉をしかめ、記憶を探

るように視線を宙にさまよわせる。

「その格好……盾無しの片手剣……。黒の剣士……?」

急激に顔を蒼白にしながら、男は数歩後ずさった。

「や、やばいよ、ロザリアさん。こいつ……ベータービーターテスト参加者上
がりの、こ、攻略組だ……」

男の言葉を聞いた残りのメンバーの顔が、一様にこわばった。

驚愕したのはシリカも同じだったようだ。

パルは、驚愕よりもむしる納得であると感じた。

相当な高レベルプレイヤーだとは思ったツスけど、まさかト
ッププレイヤーの一人だったとは……

ロザリアも他の者と同様に、たつぷり数秒間口をぼかんと開けてか
ら、不意に我に返ったように甲高い声で喚いた。

「こ、攻略組がこんなところをウロウロしてるわけないだろ！ どう
せ、名前をカタってアタシらをびびらせようってコスプレ野郎に決
まってる。それに、もし本当に『黒の剣士』だとしても、この人
数でかかればたった一人くらい余裕だわよ！」

その声に勢いづいたように、オレンジプレイヤーの先頭に立つ大柄
な斧使いも叫んだ。

「そ、そうだ！ 攻略組なら、すげえ金とかアイテムとか持ってんぜ！ オイシイ獲物だつつつの！」

口々に同意の言葉を喚きながら、盗賊たちは一斉に抜刀した。無数の金属がざらりと凶悪な光を放つ。

「キリトさん……逃げて！ 逃げてよ！！」

「大丈夫ツスよ、シリカさん」

パルは、シリカに落ち着くように言った。

どう考えても、ロザリアに従ってる十人の中にキリト並の強さを持つ者は見られない。

ならば、キリトが負けるわけがない。

しかし、シリカはロザリア達の言うとおり、いくらキリトが強くてもあの人数相手に勝ち目はないと思えた。

シリカの叫びに対してキリトは動かない。武器を抜きすらしめない。

そのキリトの様子を諦めと取ったか、ロザリアともう一人のグリーンを除く九人の男たちは武器を構えると、猛り立ったような笑みを浮かべ我先にと走り出した。短い橋をドカドカと駆け抜け

「オラアアア！！」

「死ねやアアア！！」

俯いて立ち尽くすキリトを半円形に取り囲むと、剣や槍の切っ先を

次々にキリトの体へと叩き込んだ。同時に九発もの斬撃を受け、キリトの体がぐらぐらと揺れた。

「いやあああああ!!」

シリカは両手で顔を覆いながら絶叫した。

「やめて!! やめてよおお!! キリトさんが、死んじゃうよおお!!」

「思ったよりも迫力があるツスね」

パルはこんな状況の中、呑気にも戦いを静観していた。

シリカの叫びに男たちは無論耳を貸すはずもなく。

「ゲハハハハハ!!」

「オラア!! クソがあ!!」

暴力に酔ったように、ある者は哄笑しながら、ある者は罵り声を上げながら、手を休めることなくキリトに向かって武器を叩き込み続ける。

橋の中ほどに立ったロザリアも、顔に抑えきれない興奮の色を浮かべ、右手の指を舐めながら食い入るように惨劇を見つめている。

シリカはぐいと涙をぬぐい、短剣の柄を握った。

自分が飛び込んでも何の助けにもならないとわかってはいたが、これ以上見ていることはできなかった。

キリトに駆け寄ろうと、一歩踏み出したところで

「キリトさんなら大丈夫ツスよ、HPバーを見てみるツス」

シリカはパルの言っていることに気付き、動きを止めた。

キリトのHPバーが減っていない。

いや、正確には、絶え間ない攻撃を受けることでほんの数ドットずつわずかに減少するのだが、数秒経つと急激に右端まで回復してしまっているのである。

やがて、男たちも目の前の黒衣の剣士が一向に倒れる様子が無い事に気付き、戸惑いの表情を浮かべた。

「あんたら何やってんだ！！ さっさと殺しな！！」

苛立ちを含んだロザリアの命令に、再び数秒間にわたって斬撃が雨のように降り注ぐが、やはり状況は変わらない。

「お……おい、どうなってんだよコイツ……」

一人が、異常なものを見るように顔を歪めながら、腕を止めて数歩後ずさった。それが呼び水になったように、残りの八人も攻撃を中止し、距離を取る。

しんとした沈黙が周囲を覆った。

その中、ゆっくりとキリトが顔を上げた。静かな声が流れた。

「十秒あたり400、ってところか。それがあんたら九人が俺に与えるダメージの総量だ。俺のレベルは78、ヒットポイントは1

4500……さらに戦闘時回復スキルによる自動ヒールが十秒で600ポイントある。何時間攻撃しても俺は倒せないよ」

男たちは愕然としたように口を開け、立ち尽くした。やがて、サブリーダーらしき両手剣士がかすれた声で言った。

「そんなの……そんなのアリかよ……。ムチャクチャじゃねえかよ……」

「そうだ」

吐き捨てるようなキリトの返答。

「たかが数字が増えるだけで、そこまで無茶な差がつくんだ！ それがレベル制MMOの理不尽さというものなんだ！！」

本当に理不尽ツスけど、そのおかげでおいらも今まで生きてられたツスよ。

パルがもし、Lv1だったら最初に出会ったロザリア達、中層クラスプレイヤーに、いや、それ以前に ドランクエイブ にやられてしまっただろう。

キリトの、抑えがたい何かをはらんだ声に威圧されたように、男たちは後ずさった。その顔に張り付いた驚愕が恐怖へと変わっていく。

「チツ」

不意にロザリアが舌打ちすると、腰から転移結晶を掴み出した。宙に掲げ、口を開く。

「転
」

だが、その言葉が終わらないうちに シュンツ、ぶん、と空気が切り裂かれる音と震える音がしたと思ったとたん、ロザリアの手からクリスタルが弾き飛ばされ、すぐ前にキリトが立っていた。

「どこに逃げるツスカ」

パルは一瞬のうちに シングルシュート を放つとロザリアの転移結晶を弾き飛ばした。

「ヒ
」

体を強張らせるロザリアの襟首をキリトは掴むと、ずるずると橋のこちらがわに引き摺ってくる。

「は……放せよ!! どうする気だよ畜生!!」

無言のまま、棒立ちの男たちの中央にロザリアの体を投げ出すと、キリトは腰のポーチを探った。

取り出されたのは青い結晶体だった。だが転移結晶よりも色が格段に濃い。

「これは、俺に依頼した男が全財産をはたいて買った回廊結晶だ。黒鉄宮の監獄エリアが出口に設定してある。あんたら全員これでジエイルに跳んでもらう。あとは『軍』の連中が面倒見てくれるさ」

地面に座り込んだまま唇を噛んだロザリアは、数秒押し黙ったあと、赤い唇に強気な笑いを浮かべ、言った。

「もし、嫌だと言ったら？」

「全員殺す（ツス）」

簡潔なキリトとパール（他には聞こえていない）の答えに、その笑みが消える。

「と、言いたいとこだけどな……仕方ない、その場合はこれを使う」

おいらは本気ツスよ。

本気と書いてマジと読む。

現に、今もおかしな行動を取ったら即、攻撃が放てる体勢だ。

キリトがコートの内側から取り出したのは、小さな短剣だった。

その刀身をよく見ると、薄緑の粘液に濡れているようだ。

「麻痺毒だよ。レベル五の毒だから十分は動けないぞ。全員コリドーに放り込むのに、そんだけあれば十分だ……自分の足で入るか、投げ込まれるか、どっちでも好きな方を選ぶ」

もう、誰も強がりと言う者はいなかった。

全員が無言でうなだれるのを見て、キリトは短剣を仕舞うと、濃紺の結晶を掲げて叫んだ。

「コリドー・オープン！」

瞬時に結晶が砕け散り、その前の空間に青い光の渦が出現する。

「畜生……」

長身の斧使いが、肩を落としながら最初にその中に飛び込んだ。

残りのオレンジプレイヤー達も、ある者は毒づきながら、ある者は無言で光の中に消えていく。

盗聴役のグリーンプレイヤーもそれに続き、ロザリア一人が残るだけとなった。

赤髪の女盗賊は、仲間が全員回廊に消えたのち、あきらめたのか、とぼとぼと渦に向かって歩いていく。

その様子を見たパルは、ようやく終わったと安堵した。

隣を見てみるとシリカは茫然としていた。

無理もない、いろいろなことがあったから、気持ちの整理がつかないのだろう。

これは時間が解決してくれるツスね

再びロザリアの方を見てみると渦にあと一步で入るであろうという所で

「くたばりなあ！」

と喋ってシリカに向かって短槍を投げてきた。

「危ないッス!!!」

パルは隣に立つシリカを弾き飛ばすとその身に槍を受けた。

「え、ば、パル君！」

シリカは何が起こったのか理解できなかったが、元に立っていたところを見てみると一本の短槍が刺さっていた。

その槍の先には脇腹を刺されつつも辛うじて立ち続けるパルの姿があった。

「　　ッ、パル！」

キリトは一瞬だが、ロザリアから目を離してしまった。

一瞬とはいえ、ロザリアにとっては十分だった。

その隙に、弾き飛ばされ地面に転がっている転移結晶をつかむと

「転移

」

キリト達の方を向き、にやりと笑い。

「ロンパール！」

助かった、きつとロザリアはそう思っただろう。

現に、その声を聴いたキリトは、しまったと思った。

だがしかし、転移は成功しなかった。

ロザリアの右手が結晶ごと切り飛ばされたのだから……

パルは、脇腹に槍が刺さりながらも、最後の力を振り絞って剣を放った。

それは、技も何もない純粋な投的だったが投剣スキルを完全習得したパルにとって難しいものではなかった。

「後は頼むツス」

そう言うとパルは意識を失った。

キリトはすぐさまロザリアの襟首を掴みあげ、高くぶら下げると回廊へ向かって歩きだした。

ロザリアが手足をばたばたさせて抗う。

「ちよつと、やめて、やめてよ！ 許してよ！ ねえ！ ……そ、
そうだ、アンタ、アタシと組まない？ あんたの腕があれば、ど
んなギルドだって……」

台詞は最後まで続かなかった。

キリトは力任せにロザリアを頭からコリドーに放り込み、その姿が掻き消えた直後、回廊そのものも一瞬まばゆく光って消滅した。

「パルが目を覚ますと、心配そうに見下ろすキリトとシリカの顔があった。」

「パル君！」

シリカはそういつとパルに抱き着いた。

「死んだのかと思って心配したよ！」

「く、苦しいッス」

パルはギブギブと言いながらキリトに助けを求めた。

「パル、すまなかった俺が油断したばかりにこんなことになって……」

「いや、あれはおいらが悪かったッス」

キリトは自分のせいだというが、あんなことが起こった原因はパルにあるのだ。

もし、パルが転移結晶を弾き飛ばさなかったらキリトが回収していただろう。

一瞬のうちにロザリアに近づいたキリトなら容易にやってのけるはずだ。

パルがそう説明するがキリトは納得できなかった。

自分が最後まででしっかりと気を配っていればこんなことにはならなかったと言っ。

お互いに、俺が、おいらが悪いと言っていると……

「ロザリアさんが悪かったということでもいいじゃないですか！」

シリカが二人とも悪くないと大声で言うと静寂が訪れた。

次の瞬間、キリトとパルは大声で笑い、シリカもそれにつられて笑い出した。

35層の風見鶏亭に到着するまで、三人はほとんど喋りっぱなしだった。

主に、パルやシリカが話し続ける形になったが、キリトから時折聞いた前線での話はどれも、ユーモラスなものばかりだった。

二階に上がり、キリトの部屋に入ると、窓からはすでに赤い夕陽が差し込んでいた。

その光の中、黒いシルエットとなってたたずむキリトに向かって、シリカは震える声で言った。

「キリトさん……行っちゃうんですか……？」

しばしの沈黙。シルエットがゆっくり頷いた。

「ああ……。五日も前線から離れちゃったからな。すぐに、攻略に戻らないと……」

「……そう、ですよね……」

シリカは何かを言おうとするがいえなかった。
キリトのレベルは78。シリカのレベルは45。その差33。
残酷なまでに明確な、二人を隔てる距離だ。キリトの戦場について
いっても、シリカなど一瞬でモンスターに殺されてしまうだろう。
同じゲームにログインしているながら、現実世界以上に高く分厚い壁
が二人の世界を遠ざけている。

「……………あ………あたし……………」

シリカは不意に、ふわりとキリトの両腕が肩に乗るのを感じた。す
ぐそばで、低く穏やかなささやき声がした。

「レベルなんてただの数字だよ。この世界での強さは単なる幻想に
すぎない。そんなものよりもっと大事なものがある。だから、次は
現実世界で会おう。そうしたら、また同じように友達になれるよ」
シリカはそつと目を閉じ、つぶやいた。

「はい。きつと きつと」

体を離し、キリトの顔を見上げると、シリカは笑顔を浮かべた。キ
リトも微笑み、言った。

「さ、ピナを呼び戻してあげよう」

「はい！」

頷き、シリカは左手を振ってメインウィンドウを呼び出した。アイ
テム欄をスクロールし、「ピナのこころ」を实体化させる。
ウィンドウ表面に浮かび上がった水色の羽根をそつと円いティーテ

「ブルに横たえると、次に「プネウマの花」も呼び出す。
真珠色に光る花を手に取り、ウインドウを消すと、シリカはキリト
を見上げた。

「その花の中に溜まっている雫を、羽根に振りかけるんだ。それで
ピナは生き返る」

「わかりました……」

水色の長い羽根を見つめながら、シリカは心の中でささやきかけた。

（ピナ……いっぱい、いっぱいお話してあげるからね。今日のすごい冒険の話を……ピナを助けてくれた、あたしのたった一日だけのお兄ちゃんと愉快的な使い魔の話を）

両目に涙を浮かべながら、シリカは右手の花をそっと羽根にむかって傾けた。

「あれ？、そういえばパルはどこだ？」

キリトがぼつりとつぶやく中で空気の読める男はつらいッスねとパ
ルは廊下で佇んでいた。

第11話 俺たちの戦いはまだまだ続くッス（後書き）

つ、ついに、黒の剣士編 完

ヨッシャー――――

――――
――――
――――
――――
――――

はあ、長かった。

序盤では2月中に終わらせるといったが気付いたらもう5月の中旬になっていた。

作者はその間に研究室や就職活動、面接、アルバイトもこなしつつ、息抜きに少しずつ進めていきました。

さて、ここで一区切りを迎えましたが本作はどうでしょうか？

楽しかった、笑えた、良かった、感動した、泣いた、爆発した。
さまざまな意見があることでしょう。

些細な感想でいいのですので、ドシドシ送ってきて下さると作者の執筆の原動力になります。

さて、今回のサブタイトルですが、このままでは終わりませんよ。パルの冒険は始まったばかりであり、

デイスガイアという所の中ボスを倒したところぐらいです。

続きについてですが、少し悩んでいます。

文章は、もう少し大雑把で行こうと考えているのですが以下の3択で悩んでいます。

- ・ 1巻の最初である、74層の所まで飛ばす。
- ・ アスナとの出会い（園内事件の本筋は作者の執筆力がないので無理）
- ・ オリジナルな話を1話入れてからガンバル。（アスナ 74層）

下の二つの場合は8巻が出てから出すのであればらく休載するかもしれませんが。

まあ、研究室も就活も忙しいので不定期更新なのはご了承ください。

それでは、最後に今回の話は長いながらも読んでいただき

ありがとうございました。―――<

第12話 地上の星ツス(前書き)

短いけど投稿ツス

少し加筆修正したツス(2011年06月10日)

第12話 地上の星ツス

アインクラッド五十層アルゲードの街を簡潔に表現するならば『猥雑』の一言に尽きる。

アインクラッド一層はじまりの街にあるような巨大な施設はひとつとして存在せず、広大な面積いっぱいには無数の隘路が重層的に張り巡らされて、何を売るとも知れぬ妖しげな工房や二度と出てこられないのではと思わせる宿屋などが軒を連ねている。

そんな街の路地裏の奥の奥、裏のさらに裏ともいえるような場所にこの街の中で最も奇妙であるといえる店が存在している。

アルゲードの裏通りといえば、迷い込んで数日出てこられなかったプレイヤーの話もちらほらと耳にするほど立地条件は最悪であるが、その店は確かにそこに存在していた。

雑貨屋 ローゼンクイーン

薔薇の女王という名を持つこの店は、商人プレイヤーが経営してい

るわけではなく、外見はNPCの店舗と全く一緒といってもいいくらい普通の店である。

しかし、訪れるプレイヤーにアンケートを取ったならば、百人中百人が普通の店とは答えないだろう。

なぜなら

「いらっしやいませ。

雑貨屋 ローゼンクインへ、ようこそッス。」

カウンターの奥に座る店員は、店番NPCではなく一匹のプリニーが座っているのだから……。

パルは、アルゲートでこの店を始めてから半年以上が経過した。

初めて、キリトとともにこの街を訪れたときに、パルは何年もこの町に住んでいたような奇妙な感覚に襲われた。

この道は、ここに繋がっていると知らないはずなのに知っている。自分なのに自分ではない、ここに来たことがないのに来たことがあるような。

最初の内は混乱したが、まるで規定事項のように路地裏を進んでいくと一つの店舗が存在していた。

それが、この店 ローゼンクイーン だった。

RPGとは、プレイヤーが役割を演じる（ロールする）ゲームである。

パルのアインクラッドでの役割はどつちやらこの店の店長だったようだ。

「ありがとうございます」

パルは、本日最後の客を送り出すと店先にあるOPENの木札を裏返し、注文された商品の製作をするために店の奥へと引っ込んでいった。

あれから、半年ツスカ

最初は、キリトのPTメンバーにしか話せないおいらが店なんて無理ッスと思ったけど、この店にあった 翻訳の腕輪 と言うアイテムを装備したところ、なんと、話せるようになったので問題は解決した。

問題も解決したところで、おいらは店を始めるか、キリトさんにつ

いていくかで悩んだ結果、店を始めることにしたッス。

このことをキリトさんに話したところ

「俺の事は気にせず、パルのやりたいようにやればいいさ」

と言ってくれた。正直、うれしかったッス。

こうしてキリトと別れた後、雑貨屋 ローゼンクイーン を本格的に始めたおいらは、最初に商品を集めることから始めた。

しかし、そう簡単には見つかるはずもなく、なかなか商品が集まらずに困ったパルは悩みに悩んだ末に

『そうだ、おいらが作ればいいんすよ！』

と思いたち、生産スキル 裝飾細工 を武器上達の影響を受けながら1か月で極めてある商品の開発に成功した。

それが、この店の中で最も売り上げの高い商品である ロイヤルリング だ。

ロイヤルリング は、何の変哲もない指輪アイテムであったが、追加効果の中に経験値+1%があった。

たった1%であるが、アインクラッド内で経験値の増加アイテムは

貴重なものであり、まさに飛ぶように売れた。

しかし、需要に対して供給があまりにも少なすぎて、軍や一部のギルドが買占めや店に繋がる通りを塞ぐ迷惑行為の「ブロック」を始めたので一部の商人プレイヤーから注文を受け取る形式に変えたことによってこの問題は減少した。

思考しながら作業をしていたパルは注文された装飾アイテムを作り上げると商品を届けるために店を後にした。

第13話 閃光登場ツス

パルの店 ローゼンクイーンとは転移門のある中央広場を挟んで反対側、西に伸びた目貫通りを、人ごみを縫いながら数分歩くとその店があった。

五人も入ればいっぱいになってしまうような店内にはプレイヤーの経営するシヨップ特有の混沌状態を醸し出した陳列棚が並び、武器から道具類、食料までがぎっしりと詰め込まれている。

ちなみに雑貨屋である ローゼンクイーン は、パルの性格が几帳面かつ扱う商品が小物が多いためなためどちらかというとNPCシヨップに近い雰囲気だ。

店の主と言えば、今まさに店頭で商談の真っ最中のようだ。

アイテムの売却方法は大まかに言って二種類ある。

ひとつはNPC、つまりゲームシステムが操作するキャラクターに売却する方法で、詐欺の危険がないかわりに買い取り値は場所によって多少の増減があるものの基本的には一定となる。

プレイヤーが労せず大金を入手するのを防ぐためにその値付けは実際の市場価値よりもかなり低く設定されている。

もう一つがプレイヤー同士の取引だ。

こちらは商談次第ではかなりの高値で売れることも多いが、買い手を見つけるのに結構な苦勞をするし、やれ払いすぎただの気が変わったのと言いだすプレイヤーとのトラブルも無いとは言えない。

そこで、故買を専門にしている商人プレイヤーの出番となるわけであり、パルもキリトの紹介でこの買い取り屋の主であるエギルと知り合った。

交渉はどうやらまだ時間がかかりそうなので店内に置いてある椅子に座って待っていると店の入口に見覚えのある黒衣のプレイヤーが入ってきた。

「お、パルも来ていたのか。こんな時化^{しけ}た店でどうしたんだ？」

そこには、半年前と変わらないキリトの姿があった。

「ちょっと、注文品を届けに来たところッス。
キリトさんは前線帰りッスか」

「ああ、ちょっと珍しい食材アイテムが手に入ったんだが……
そういえば、パルは料理スキルはどれくらいなんだ」

「おいらは、調味料を作るぐらいのレベルなんで、そんなに高くないッスよ」

生産スキルは武器上達の恩恵を受けられるものもあれば、受けられ

ないものもあり、料理スキルは恩恵がある方だが雑貨屋を営むパルは完全習得はしていなかった。

キリトと前線の様子や ローゼンクイーン で最近会ったどうでもよい話などをしてしているとカウンターの方で商談が決まりそうであった。

「よし決まった！ ダスクリザードの革二十枚で五百コル！」

エギルは、ごつい右腕を振り回すと商談相手の気の弱そうな槍使いの肩をばんばんと叩いた。

そのままトレードウィンドウを出すと、有無を言わせぬ勢いで自分のトレード欄に金額を入力する。

相手はまだ多少悩むような素振りを見せていたが、歴戦の戦士と見紛うほどのエギルの凶顔に一睨みされると 実際エギルは商人であると同時に一流の斧戦士でもあるのだが あわてて自分のアイテムウィンドウから物をトレード欄に移動させ、OKボタンを押した。

「毎度！！ また頼むよ兄ちゃん！」

最後に槍使いの背中をバシッと一回叩くと、エギルは豪快に笑った。ダスクリザードの革は高性能な防具の素材となる。

相変わらず、阿漕な商売してるツスね」

どう考えても五百は安すぎるが、口を出すのはマナー違反であるので沈黙を守って、立ち去っていく槍使いを見送った。

「相変わらず阿漕な商売してるな」

「さすがに五百は安すぎないツスカ？」

キリトと共にエギルの背後から声をかけると、禿頭の巨漢はひよいと振り向きざまニンマリ笑った。

「よお、キリトにパルか。安く仕入れて安く提供するのがウチのモットーなんでね」

悪びれる様子もなくうぞぶく。

「後半は疑わしいもんだなあ。まあいいや、俺も買取頼む」

「キリトはお得意様だしな、あくどい真似はしませんよっと……」

言いながらエギルは猪首を伸ばし、キリトの提示したトレードウィンドウを覗き込んだ。

エギルは、それを見た途端驚きに丸くなった。

「おいおい、S級のレアアイテムじゃねえか。ラグー・ラビットの肉か、俺も現物を見るのは初めてだぜ……」。

キリト、おめえ別に金には困ってねえんだろ？ 自分で食おうとは思わんのか？」

「ま、マジっすか」

ラグー・ラビットの肉 といえば、プレイヤー間の取引では十萬コルは下らないという代物である。

あの逃げ足の速いモンスターを良く仕留められたものだとパルは思った。

「思ったさ。多分二度と手には入らんだろうしな……。ただなあ、こんなアイテムを扱えるほど料理スキルを上げてる奴なんてそうそう……」

その時、背後からキリトの肩を叩く者がいた。

「キリト君」

キリトは顔を見る前から相手を察していた。左肩に触れたままの相手の手をぐっ、と掴むと振り向きながら言う。

「シエフ捕獲」

「問題解決ッスね」

「な……なによ」

相手はキリトに手をつかまれたままいぶかしげな顔で後ずさる。

栗色の長い真中分けのストレートヘアを両側に垂らした顔はちいさな卵型で、大きなくなるくるとした薄茶色の瞳がまぶしいほどの生気を放っている。

小ぶりだがスツと通った鼻筋の下で、桜色のくちびるが華やかな色彩を添える。

スラリとした小柄な体を、白と赤を基調とした騎士風の戦闘服に包み、白革の剣帯から吊ったのは優雅に伸びた細剣。

彼女の名はアスナ。

ギルド 血盟騎士団 の副団長にしてSAOでは多分知らぬ者はほとんどいないであろう有名人だ。

Knights of the Bloodの頭文字を取ってKBとも呼ばれるそれは、アインクラッドに数多あるギルドの内でも誰もが認める最強のプレイヤーギルドである。

構成メンバーは五十人程と中規模だが、そのすべてがハイレベルの強力な剣士であり、なおかつギルドを束ねるリーダーは伝説的存在と言ってもよいほどのSAO最強の男である。

パルはその団長にはあったことがないのだが、聖騎士ヒースクリフといえは習得者が一人しかいない ユニークスキル 使いとしても有名だ。

話が脱線したが、彼女は、容姿においても剣技においても四万のプレイヤーの頂点に立つ存在なわけで、それで有名にならないほうがおかしい。

当然プレイヤーの中には無数のファンがいるが、中には偏執的に崇拜する者やらストーカーまがい、更には反対に激しく嫌う者 これれは女性プレイヤーに多い もいてそれなりの苦勞があるとのこの間、ローゼンクイーン で愚痴を聞かされたのは記憶に新しい。

もっとも最強剣士の一人たるアスナに正面切ってちょっかいを出そうという者はそういないだろうが、警護に万全を期するというギル

ドの意向もあるようで彼女にはたいてい複数の護衛プレイヤーが付
き従っている。

これも悩みの一つであると言っていたが、こればかりはしょうがな
いであろう。

今も、数歩引いた位置に白のマントと分厚い金属鎧に身を固めたK
OBのメンバーとおぼしき二人の男が立ち、そのうち右側に立っ
ている長髪を後ろで束ねた痩せた男が、アスナの手を掴んだままのキ
リトに殺気に満ちた視線を向けてきている。

これは、聞いていたよりもひどいッスね

キリトは彼女の手を離し、指をその男に向ってひらひら振ってやり
ながら言葉を返した。

「珍しいなアスナ。こんなゴミ溜めに顔を出すなんて」

キリトがアスナを呼び捨てにするのを聞いた長髪の男と、自分の店
をゴミ溜め呼ばわりされた店主の顔が同時にぴくぴくと引き攣る。
だが、店主のほうはアスナから笑顔とともに、お久しぶりでスエギ
ルさん、と声をかけられると途端にだらしなく顔を緩ませる。

まあ、男としてわからなくもないッスけど

アスナはパルに気づくと、こちらの方を向いて笑顔と共に手を振っ
てきた。

パルの表情もエギル同様、だらしなく顔を緩ませる。

アスナはキリトに向き直ると、不満そうに唇を尖らせた。

「なによ。もうすぐ次のボス攻略だから、ちゃんと生きてるか確認に来てあげたんじゃない」

「フレンドリストに登録してんだから、それくらい判るだろ。そもそもマップでフレンド追跡したからここに来られたんじゃないのか」

キリトが言い返すと、アスナは、ぷいっと顔をそむけた。

キリトのあの顔は、この女がなぜ俺ごときに気をかけてくれるのが不思議で仕方ないとか考えているのだろう。

気づいていないのは本人だけであり、今日はじめてあったであろう護衛の二人だつてこの状況は把握していることであろう。

後ろの方でさらに敵意をむき出しにする長髪の男と床に手をついてorzの格好をしている赤い額当ての男の姿が見える。

アスナは両腕を胸の前で組むと、つんとあごを反らせるような仕草で言った。

「生きてるならいいのよ。そ……そんなことより、何よシェフどうこつって？」

「あ、そうだった。お前今料理スキルどのへん？」

確かこのあいだ……

「聞いて驚きなさい！ 先週に 完全習得 したわ！」

「なぬっ！」

やっぱり知らなかったようだ。

パルはアスナから

『キリト君には私が言って驚かすから言わないでね』

と言われていたので言ってない。

まさか、本当に驚くとは……

「……その腕を見こんで頼みがある」

キリトは手招きをすると、アイテムウィンドウを他人にも見える可視モードにして示した。

いぶかしげに覗き込んだアスナは、エギル同様のときと同じように眼を丸くした。

「うわっ！！ これ、S級食材!?!」

「取引だ。こいつを料理してくれたら一口食わせてやる」

言い終わらないうちに 閃光 アスナの右手がキリトの胸倉をがっしと掴んだ。

そのまま顔を数センチの距離までぐいと寄せると、

「は・ん・ぶ・ん!?!」

思わぬ不意打ちにドギマギしたキリトは思わず頷いてしまう。
はっと我に返った時にはもう遅い。
アスナがやったとキリトの左手を握る。

キリトはウィンドウを消去しながら振り向き、エギルの顔を見上げて言う。

「わるいな、そんな訳で取引は中止だ。」

「いや、それはいいけどよ……。なあ、俺たちダチだよな？ な？
俺にも味見くらい……」

「感想文を八百字以内で書いてきてやるよ」

「そ、そりゃあないだろ！！」

この世の終わりか、といった顔で情けない声を出すエギルにつれなく背を向け歩き出そうとしたキリトは途端、アスナがキリトのコートをぎゅっと掴んだ。

「でも、料理はいいけど、どこでするつもりなのよ？」

「う……」

料理スキルを使用するには、食材の他に料理道具と、かまどやオーブンの類が最低限必要になる。

アスナは言葉に詰まるキリトに呆れたような視線を投げかけながら、

「どうせキリト君の部屋にはろくな道具もないんでしょ。今回だけ、

食材に免じてわたしの部屋を提供してあげなくもないけど」

とんでもないことをサラリと言った。

思考停止したキリトを気にもとめず、アスナは警護のギルドメンバー2人に向き直ると声をかけた。

「今日はここから直接 セルムブルグ まで転移するから護衛はもういいです。お疲れ様」

その途端、我慢の限界に達したとでも言うように長髪の男が叫んだ。SAOにもうすこし表情再現機能があったら、額に青筋の二〜三本は立っているであろう剣幕だ。

「ア……アスナ様！ こんなスラムに足をお運びになるだけに留まらず、素性の知れぬ奴をご自宅に伴うなどと、とんでもない事ですー！」

「キリト君は素性の知れない奴なんかじゃないわ。多分あなたより十はレベルが上よ、クラデール」

「な、何を馬鹿な！ 私がこんな奴に劣るなどと……！」

男の半分裏返った声が路地に響き渡る。三白眼ぎみの落ち窪んだ目でキリトを憎憎しげに睨んでいた男の顔が、不意に何かを合点したかのように歪んだ。

「そうか……手前、たしか ビーター だろ！」

ビーターとは ベータテスター に、ズルする奴を刺す チーター

を掛け合わせた、S A O 独自の蔑称である。

「ああ、そうだ」

キリトが無表情に肯定すると、男は勢いづいて言い募った。

「アスナ様、こいつら自分さえ良きやいい連中ですよ！　こんな奴と関わるとろくな事がないんだ！」

今まで平静を保っていたアスナの眉根が不愉快そうに寄せられる。いつのまにか周囲には野次馬の人垣ができ、　K O B　　アスナ　　という単語が漏れ聞こえてくる。

アスナは周囲にちらりと目を向けると、興奮の度合いを増すばかりのクラディールという男に、

「ともかく今日はここで帰りなさい。副団長として命令します」

とそつけない言葉を投げかけ、左手でキリトのコートの後ろベルトを掴むとそのままぐいぐいと引つ張りながらゲート広場へと足を向ける。

ドナドナされるキリトの姿がとてもシユールに見える。

「また今度ツス」

パルは手を振って二人を見送った。

二人の護衛と、いまだに残念そうな顔のエギルを残してキリトたちは人ごみの隙間に紛れるように進んでいった。

キリト達が消えていった人込みを睨んでいたクラディールは舌打ちをするとどこかに消えていった。

その後、パルはもう一人の護衛とエギルの二人のヤケ酒につき合わされた。

第13話 閃光登場ツス（後書き）

2日連続投稿。

まあ、前は短すぎたので今回は長めでいきました。
ここからは飛ばし気味に行くかもしれません。

最後に今回の話も読んでいただきありがとうございます！><）
（<）

第14話 素材集めツス

男だらけのむさ苦しいヤケ酒につきあった翌日、パルは現在の最前線である74層の迷宮区にいた。

本来ならば前線にあまり行くことのないパルであったが、新商品の開発のためにどうしても手に入れなきゃならないアイテムがあり、朝早くから素材集めに専念していた。

「プリニーツス」

掛け声とともに繰り出した プリニーツ連射 は、目の前のトカゲ男 レベル82モンスター リザードマンロード に吸い込まれていった。

しかし、中層のモンスターと違い、リザードマンは只々、銀閃を喰らうのではなく即座に左手の円盾で防ぐ。

パルは狙い通り、リザードマンの視界が盾で隠れたことを確認すると間合いを詰め、今度は本命の攻撃である短剣・投剣複合ソードスキル クリティカルバレット を放つ。

クリティカルバレット は、短剣スキルの突進系並みの威力で、

貫通性と高確率でクリティカル判定が着く上位のソードスキルであるが、命中率が壊滅的に悪く、こうして超近距離まで近づく必要がある。

今度こそ、攻撃を防ぎきれなかったリザードマンが雄叫びと共にポリゴンが霧散した。

「ふう〜」

ため息とともにパルはその場にしりもちをついた。

「アスナさんが七十層を超えたあたりから、モンスターアルゴリズムにイレギュラー性が増えてきてるって言ってたのもあながち間違いじゃないっすね」

そう言いながら戦闘報酬のアイテムを確認していると何やら叫び声が聞こえてきた。

「ん？」

叫び声が聞こえた方を見てみるとものすごい勢いで走り寄ってくる見覚えのある二つの影があった。

「キリ」

「うわあああああ！」

「きゃあああああ！」

「トさんにアスナさんって、早！」

キリトとアスナはパルのことには目もくれずに長い回廊を疾風の「
とく駆け抜けていった。

「あの二人が叫び声を上げながら逃げていくってこの先に何があっ
たんすか？」

パルは馬に蹴られたくないのと怖いもの見たさから二人が逃げてき
た回廊の奥へと進んでいった。

すると回廊の突き当たりには、灰青色の金属で出来た巨大な両開き
の扉が待ち受けていた。

扉にも、円柱と同じような怪物のレリーフがびっしりと施してある。

すべてがデジタルデータで出来たこの世界だが、その扉からは何とも言いがたい妖気が湧き上っているように感じられてならない。

「とりあえず、オープン・ザ・セサミツス」

開けゴマって、なんでゴマなんスかねと思いつつパルは開けるとそこには……

『 The G I e a 』

「おじやましましたツス」

システム音声ボスが名前を言い終わる前にとりあえずおもいつき扉を閉めたパルの顔には無数の汗があった。

び、びっくりしたツス

まさか、ボス部屋だったとは、いつの間にか結構奥まで着たツスね。
パルは落ち着いたところで時刻を確認すると午後三時となっていた。

ちよつと遅いツスけど、お弁当にするツス

パルは朝早く六十一層で手に入れてきた、この 特製イワシ弁当
を取り出した。

中には、新鮮なイワシがふんだんに使われている至高の一品になっ
ており、まさにイワシによる、イワシのための、イワシ革命という
よくわからないキャッチコピーで絶賛売出し中のものである。

パルは一口食べると、「これぞ、まさに味のイワシ革命ツス」と叫ん
だ。

イワシなのに、アジとはもう訳が分からない。

昼食も終わり、そろそろ帰ろうとマップを開いたパルだが、索敵可能範囲ぎりぎりにプレイヤーの存在を示す緑色のカーソルがいくつも連続的に点滅している。

この無駄のない、無駄な並びは 軍 ツスカ!?

パルにとって 軍 は、お得意様である客だが店に迷惑な行為や、上から目線で、我々は一般プレイヤーのために戦っているのであるからと言って大量の発注をかけてくるので正直、苦手な部類に入る。ここで、どうしようかと慌てるのは普通のプリニー。

ふっふっふ、しかし出来るプリニーは一味違うッスよ。

見よ。これが、半年にも及ぶ研鑽の成果……

「ん?」

(パル・荒ぶる鷹のポーズ)

「どうしたんだ?」

「いや、さっきの像だけ他と全然違うんだが……」

「気のせいだろ、それよりもいつまで歩かされるんだよ」

パルは回廊のわきにある石像のうち一つを壊して、その台座の上でポーズをとっている。

隠蔽スキルの効果と見えにくい回廊の光が相まって 軍 の集団は回廊を通過していく。

集団の兵士たちの顔には疲労がみられる。

パルは兵士たちの会話に耳を傾けた。

「俺、この戦いが終わったら……サーシャさんに告白するんだ」

「おいおい、こんなところでフラグ立てんじゃねーよ。縁起が悪いだろうが」

「わりい、しつかし、いきなり前線に送り込まれるなんて上の連中は何考えてるんだか……」

「おい、そこのお前ら、私語は慎め」

「は、はい！」

兵士たちは、リーダーの注意を受け、押し黙った。

ふう、これで一安心ツスね。しかし、あんな状態で大丈夫ツスカね？

パルは、心配しつつも軍の進行方向とは逆に歩き出した。

少し歩いたところで、先ほど全速力で駆け抜けていったキリトとアスナ、さらにギルド 風林火山 のクラインとゆかいな仲間たちの計八名のPTが歩いてきた。

「よお、パルじゃね〜か、久しぶりだな」

クラインがおいらに気付くと片手を上げた。

「お久しぶりツス、みなさん大勢でどうしたツスか？」

「ちよつと、お節介というか野暮用でな。　そういえば、パルは軍　の連中を見なかったか？」

キリトの問いに対して

「さっき、キリトさんたちが叫びながら逃げてきた方へ言ったツス
「よ

「て、やっぱりあれはパルだったのか」

キリトはどっちらけ付いてたようだ。

「えっ、うそ、気付いたのなら声を掛けてくれればよかったのに・・・」

アスナは気付いていなかったようだ。

「馬に蹴られなかったツスから」

パルはそうつぶやくと、キリトは馬に蹴られる？と首をかしげ、アスナは顔を真っ赤にし、クラインと 風林火山 のメンバーは、リア充もげると心の中でつぶやいた。

その後、パルもやっぱり 軍 の事は気になっていたのでキリト達に同行した。

第14話 素材集めツス（後書き）

今回の話は思ったよりも書きやすかったです。

イワシのあれですが書いていてゲシュタルト崩壊を起こしました。

今回は、言わなくてもわかると思いますが戦闘です。
出来次第投稿しますのでお楽しみに

第15話 グリムアイズ

途中で運悪く、再湧出^{リポップ}したりザードマンの集団に遭遇してしまい、最上部の回廊に到着したところには 軍 に遭遇してから結構な時間が経過していた。

途中で軍の連中に追いつくことはなかった。

「ひょっとしてもうアイテムで帰っちゃったんじゃないか？」

おどけたようにクラインが言ったが、皆そうではないだろうと感じていた。長い回廊を進む足取りが自然と速くなる。

半ば程まで進んだ時、不安が的中したことを知らせる音が回廊内を反響しながら、おいらたちの耳に届いてきた。

咄嗟に立ち止まり耳を澄ませる。

「あああああ………」

かすかに聞こえたそれは、まちがいなく悲鳴だった。

モンスターのものではない。おいらたちは顔を見合わせると、一斉に駆け出した。

敏捷性パラメータに優るキリトとアスナがクライン達を引き離し、歩幅の違うパルがさらにそのあとを追う格好になったが、緊急事態なので構っている場合ではないのだろう。

「あの二人はどんだけ速いんスか」

パルは、少し速度を上げるとクラインたちの後ろについて行った。

やがて、彼方に大扉が見えてきた。それは左右に大きく開き、内部の闇で燃え盛る青い炎の揺らめきが見て取れる。そしてその向こうで蠢く巨大な影。断続的に響いてくる金属音。手前に見える二つの影。

アスナとキリトの二人は大扉から半身を乗り出していた。

「馬鹿野郎……！！」

キリトの叫び声が聞こえてきた。何か様子がおかしい。

おいら達七人はようやく追いつくと、クラインがキリトに今の状況を尋ねた。

「おい、どうなってるんだ！！」

「結晶無効らしい。人数が二人足りない、おそらく……」

「な、マジッスか！？」

結晶無効化空間とは、その名のとおり、転移結晶 や瞬間的に回復できる 回復結晶 などの結晶アイテムが使えない空間である。迷宮区で稀に見られるトラップだが、ボスの部屋がそうであったことは今まで聞いたことが無かった。

そんな状態で、人数が二人足りないということは……

「なんだって！ つまり死んだってことじゃねーか……何とかできないのかよ……」

クラインの顔が歪む。

「人数が少なすぎるわ」

キリトたちが斬り込んで連中の退路を拓くことは出来るかもしれない。

だが、緊急脱出不可能なこの空間で、こちらに死者が出る可能性は捨てきれない。

フロアボスに挑む人数にはあまりにも少なすぎる。

逡巡しているうち、悪魔の向こうでどうにか部隊を立て直したらしい 軍 のリーダーの声が響いた。

「隊列を崩すな！ 全員……突撃……！」

十人のうち、二人はHPバーを限界まで減らして床に倒れている。残る八人を四人ずつの横列に並べ、その中央に立ったリーダーの男が剣をかざして突進を始めた。

「やめる……っ!!」

「もうやめるッス!!」

だが二人の叫びは届かない。

余りに無謀な攻撃だった。八人で一斉に飛び掛っても、満足に剣技を振るうことが出来ず混乱するだけだ。

それよりも防御主体の態勢で一人が少しずつダメージを与え、次々にスイッチしてゆくべきである。

悪魔は仁王立ちになると、地響きを伴う雄叫びと共に口から大量の噴気を撒き散らした。どうやらあの息にもダメージ判定があるらしく、青白い輝きに包まれた八人の突撃の勢いが緩む。そこに、すかさず悪魔の巨剣が突き立てられた。一人がすくい上げられるように斬り飛ばされ、悪魔の頭上を越えておいら達の眼前の床に激しく落下した。

リーダーの男だった。

HPバーが消滅していた。こちらを向いた顔には自分の身に起きたことが理解できないという表情。口がゆっくりと動く。

有り得ない。

無音でそう言った直後、コーバツツの体は神経を逆撫するような効果音と共に無数の輝く碎片となって飛散した。余りにもあっけない消滅。アスナが短い悲鳴を上げる。

「隊長がやられた 俺たちはおしまいだ……」

リーダーを失った軍のパーティーはたちまち瓦解した。喚き声を上げながら逃げ惑う。もう全員のHPバーが半分を割り込んでいる。

「だめ……だめよ……もう……」

絞り出すようなアスナの声に、おいらはハッとして横を見ると咄嗟に服を掴んだ。

あ、おいらの体重だと……

「だめ ツ!!」

「ギャ !!!!!」

絶叫と共に、アスナは疾風の如く駆け出した。パルの体はアスナが空中で抜いた細剣と共に、一筋の閃光となってグリーンアイズに突っ込んでゆく。

「アスナッ!」

キリトは毒づきながら、剣を抜きアスナの後を追った。

「どうとでもなりやがれ!!」

クライン達がときの声を上げつつ追隨してくる。

パルは引つ張られる形でグリーンムアイズの前まで来ると、アスナが止まると同時に慣性に従い、空中に投げ出される。

「ッ、プリニーッス」

とっさに悪魔の背を足場に三角とびの要領で空中で一回転するとプリニー連射を繰り出す。

空中でソードスキルを発動させた場合、技が出終わるまでは、使用者が落下することはない。

しかし、まずいッス

本来、どちらかという盾仕様、防御に秀でているパルの投剣スキルは、手数は多いが一撃一撃のダメージが少ない。それならば、無理に攻撃に参加するよりも盾を装備して防御に回った方がベストを尽くせる。

しかし、今の状況で装備変更をする時間はない。

スキルが出し終わると、パルはアスナの横に着地する。

アスナの捨て身の一撃も、不意を突く形で悪魔の背に命中したがHPはろくに減っていない。グリーンムアイズは怒りの叫びと共に向き直ると、猛烈なスピードで斬馬刀を振り下ろした。

パルは右に、アスナは左へと咄嗟に身をかわしたが、アスナは完全には避けきれず余波で地面に倒れこんだ。そこに、連撃の次弾が容赦なく降り注ぐ。

「アスナ　　ッ！！」

キリトが必死にアスナと斬馬刀の間に身を躍らせた。
ぎりぎりのタイミングで、キリトの剣が悪魔の攻撃を弾く。

「下がれ!!」

叫ぶと、キリトは悪魔の追撃に備えた。

「なんて、剣圧だッ」

クラインの仲間達が倒れた軍のプレイヤーを部屋の外に引き出そう
としているのが見える。だが中央でキリトと悪魔が戦っているため、
その動きは遅々として進まない。

「プリニーツス」

パルは悪魔の右側から攻撃して、片側に寄せようとするが近くに
いるキリトのほづが憎悪値ヘイトが高いため思うように誘導することが出来
ない。

「ぐっ!!」

とうとう敵の一撃がキリトの体を捉えた。HPバーがぐいっと減少
する。

「キリトさん!!」

おいらは、思わず叫ぶと一瞬だけキリトと目があった。
その眼には、なにやら覚悟が見えた気がした。

あれを使うツスか!?

それならば時間を稼ぐ必要がある、パルはいったん攻撃の手を休めるとキリトからの合図を待った。

「アスナ！ クライン！ パル！ 頼む、十秒持ちこたえてくれ！」

キリトは叫ぶと、右手の剣を強振して悪魔の攻撃を弾き、無理やりブレイクポイントを作って床に転がった。

「スイッチ、オラオラオラオラ ぐあッ」

間髪入れず飛び込んできたクラインがカタナで応戦する。だがクラインのカタナも、アスナの細剣も、速度重視の武器で重さに欠ける。とても悪魔の巨剣は捌ききれないだろう。クラインの連撃の合間に敵の斬馬刀がクラインに当たる。

「クラインさん!!」

アスナの叫びが響き渡る。

おいらは、ブレイクポイントを作るためにグリーンアイズの右目に向かって スナイプシュート を放つ。

パルから放たれた銀閃が右目に当たると同時に、悪魔は肩を震わせ、悲鳴じみた絶叫を上げる。

どうやら弱点だったらしく隙はできたが、パルはスキル使用後の硬直時間のため動くことが出来ない。

「す、すまねえ、合わせてくれ」

「はい」

「スイッチ」

その隙に、クラインはアスナとスイッチをして後方に退く。

本来ならここですぐに治療結晶で回復するところだがこの部屋ではそれができない。

「ぐはッ」

スイッチしたアスナの視界の端には、硬直時間で動けないパルに斬馬刀の薙ぎ払いの一撃が当たる姿が見えた。パルの体は壁にぶつかると共に床に横たわる。

「パル君!!」

アスナが叫びと共に一撃を放つと、悪魔の振り向き様の一撃がアスナの隣の床に直撃し、余波でダメージを受ける。

「いいぞ!!」

キリトの声に、背を向けたまま頷くとアスナは裂はくの気合とともに突き技を放った。

「イヤアアアア!!」

純白の残光を引いたその一撃は、空中でグリーンムアイズの剣と衝突して火花を散らした。両者の動きが一瞬止まる。

「スイツチ!!」

キリトはタイミングを逃さず叫ぶと、敵の正面に飛び込んでいった。硬直から回復した悪魔が、大きく剣を振りかぶる。

炎の軌跡を引きながら打ち下ろされてきたその剣を、キリトは右手の愛剣で弾き返し、間髪入れず左手を背に回して新たな剣の柄を握った。

抜きざまの一撃を悪魔の胸に見舞う。初めてのクリーンヒットで、ようやくグリームアイズのHPバーが目に見えて減少する。

「グオオオオオ!!」

憤怒の叫びを洩らしながら、悪魔は再び上段の斬り下ろし攻撃を放ってきた。今度は、両手の剣を交差してそれをしっかりと受け止め、押し返す。奴の体勢が崩れたところに、キリトは防戦一方だったいままでの借りを返すべくラッシュを開始した。

「なんだ、あいつ?、剣の数を増やしても右もまともに振れなくなっちゃうぞ、キリトの奴、何考えてやがる?」

クラインが疑問を口にすると、アスナがふと、何か心当たりがあるのかつぶやく。

「キリト君、隠し技なの?」

「隠し技だ?!?」

「あれがきつと、キリト君が盾を持たない理由なのよ」

あれがキリトの隠し技、エクストラスキル 二刀流 である。

パルは偶然、キリトが練習している所を見てしまい、秘密にするように頼まれたので知っていた。

「クラインさん、アスナさん、キリトさんが引きつけているこの隙がチャンススツスよ」

パルは回復用のハイ・ポーションを飲み終わると、アスナ達に向かって叫ぶ。

「わかった、倒れてる奴は任せる！」

クラインが答えると、アスナも続いて、倒れている軍の二人に向かって行った。

「さあ、壁伝いに入り口まで急いで！」

「あ、ありが」

「お礼なんか後、早く」

「助けに来たぜ、よつと」

「すまない」

「いってことよ、行くぜ」

二人が運び終わる頃にはパルも入り口までたどり着いた。

パルは部屋の状況を見てみると最悪であった。キリトが入り口から遠くに離されている。

「キリト、あとはお前だけだ！」

「戻って、キリト君！」

二人はキリトに戻るように言うが、グリーンアイズが邪魔になって戻って来るのは難しい。

「このままじゃ…、このままじゃ、キリト君が死んじゃう」

「今度は飛び込むなよ」

アスナが今にも飛び出しそうなところをクラインが止めに入る。

「でも…、でも！」

「おい、そこのお前、その盾を貸せ！ 早く！」

「は、はい」

クラインは 軍 のメンバーに盾を借りようと急かしていると、アスナがキリトの様子に気づく。

「待って、クラインさん、キリト君、攻撃してるみたい」

「なんだって!？」

悪魔の斬馬刀を紙一重で躲し、あるときは二本の剣で受け止め弾く。さらにキリトは隙を見て次々と攻撃を当てていく、その姿はまさに剣舞のようだ。

「す、すげー」

「キリト君」

パルはキリトのHPの減り具合が速いことに気づく。

ダメージディーラー
攻撃特化仕様のキリトのHPはそれほど高くないので、斬馬刀の余波でダメージがジワジワとキリトの命を減らしていく。

このままでは、悪魔のHPよりも先にキリトのHPが減ってしまう。

パルは、一瞬のうちに決心を固めると

「アスナさん、おいらをあの位置に投げてください」

「え、な、投げるの？」

「急いでツス!!」

アスナは珍しく緊迫した声から、パルをすぐに持ち上げた。

「ッと、いくよ」

「いいツスよ」

パルの了解の声と共に、アスナはスローインの要領で投げた。

「うわぁーーーーー!!!」

パルは飛びながら、キリトが 二刀流 の上位剣技 スターバース

ト・ストリーム を放つのが目に入った。

これならば、ぎりぎりいけそうっすね。

グリーンアイズの背中、つまりグリーンアイズを挟んでキリトの反対側の地面に着くと同時に部屋全体に爆発音が響き渡った。

爆発の衝撃とHPの全損近いダメージを負ったパルが最後に見たものは……

巨大な悪魔が、天を振り仰いで口と鼻から盛大に噴気を洩らしつつ雄叫びを上げ、膨大な青い欠片となって爆散した姿と、HPバーに赤いラインが数ドットの幅で残ったキリトの姿であった。

第15話 グリームアイズツス（後書き）

勝った、第3部完。 m9（^|^;）

って言うのではありません。

今回の話は賛否両論が分かれる話かもしれませんが、ご了承ください
い>（――）<
最後の部分ですが、パルは爆発しましたが死にません。

理由は、次でわかるので楽しみに

第16話 頑張りたまえ若者よッス

「
」

どこか遠く

「
」

はるか彼方から聞こえる声。

「
」

何かを伝えようとする声が頭の中に響き渡る。
周りを見渡してみるが暗くて何も見ることが出来ない。

『誰なんスか？ おいらに何を伝えたいんスか？』

パルの声は何もない空間に響き渡る。

すると、声に反応するかのよう突如、深紅のフード付きローブをまとった人物が目の前に現れる。フードの中には口元だけが見え、その他は闇に覆われていて性別を判断するのは難しい。

「ッ

！」

パルは、突如目の前に現れた存在に驚き、後ろに飛び退こうとするが体が動かない。

驚くパルの反応など、まるで気にすることでは無いかのように相手はさらに一歩近づいてくる。と、不意に左袖が持ち上がり純白の手袋の指先が何かを操作するかのよう動く。

純白の手袋を嵌めた右手をパルの頭の位置に置いた、次の瞬間、パルの意識が次第にゆっくりと薄れていくのを感じる。

「ふむ、本来動くはずのないプログラムが動くとは……
しかし、これならば、
に近づかない限り問題はないだろ
う」

操作が終わったのだろう、相手は右手を降ろす。

『う、動くはずのない、プログラムって、な、何ツスカ、か』

壊れたテレビのような声でパルは尋ねるが、相手にはまるで届いてないようだ。

「もしかしたら、この世界で最大の不確定因子は君かもしれないな」

相手はパルに背を向けるとスタスタと離れていき見えなくなるとパルは意識は暗転した。

「見覚えのない天井ツス」

パルは、目を覚ますと仰向けに寝かされていた。

ほのかに焦げ臭いのは爆発のせいであろう。

「
イタッ」

一瞬、頭痛が走ったがしばらく横になっているとだいぶ納まってきた。

体を起こすと全身を確認すると真っ黒に焦げているが、部位欠損などの異常は見受けられない。

緊急事態だったとはいえ、おいらも無茶したもんツスね

立ち上がり、あたりを見渡すと人だかりが出来ている部分があり、おいらはそこに向かって歩き出した。

「ちよつとすいませんツス」

おいらは、人だかりをかき分けて進んでいくと特徴的なクラインの頭が見えたのでそちらの方へ向かう。

その際、軍の生き残りや、クラインの仲間たちが、まるで死んだ人が生きていたかのような表情を浮かべるがパルは気付かない。クラインの後ろまでようやくたどり着くと何やら話し声が聞こえてくる。

「パルの馬鹿野郎が……。死んじゃ何にもなんねえだろうが……」

……非常に声を掛けにくい状況ツスね。

しかし、もうすでにキリトとアスナの二人はこちらに気付いているので声を掛けないわけにはいかない。

「ん、どうした二人してまるで幽霊が出たみたいな顔をして……。後ろ？、後ろがどうしたってんだ」

クラインは振り返るとたっぷり数秒目が合う。

「って、パル！……てめえ、何で無事なんだ？」

「……おーし、手前エは、そこで正座」

クライン、後ろ後ろという状況から一転、パルはキリトの脇で絶賛反省中である。

「おらパル公！ オメエ、さっきのは何なんだよ！？」

プリニーは投げると爆発し、その爆風には全HPの半分のダメージ判定を敵味方問わず与える。

本来ならば、パルのHPはその時点で全損のダメージを負うが、事前に飲んだハイポーションの5分後に全HPを回復させる遅延回復効果もあり助かった。

「……って事ッス」

今回は、緊急事態であったから使ったが、もし回復効果が遅かったりしたらと思うとゾツとするものがある。

「モンスター固有^{スキル}能力ってやつか……」

このモンスター固有能力の例を挙げてみると

ドラクエイプ や リザードマンロード などの獣人系や竜人系モンスターのアイテム使用
フェザーリドラ や先ほど倒した グリムアイズ などのドラゴン系や幻獣系モンスターのブレス攻撃や飛行能力
レイスやバンシーなどのアストラル系モンスターの通常攻撃耐性や回復ダメージ効果

などがある。パルの爆発もこれらに該当するものである。

クラインは頭を左右に振ると太いため息をつき「てめえは、そこでしばらく正座……、次に」と言っけてキリトの方を向く。

「オメエ何だよさっきのは!？」

「……言わなきゃダメか？」

「つたりめえだ！ 見たことねえぞあんなの！」

先ほどのパルの説明の時とは一転、アスナを除いた、部屋にいる全員が沈黙してキリトの言葉を待っている。

「……エクストラスキルだよ。二刀流」

おお……というどよめきが、軍の生き残りやクラインの仲間のおいだに流れた。

「二刀流 なんて今まで聞いたこともねえ、ユニークスキルってやつだな」

「たぶんな」

「ったく、水臭えなあキリト。そんなすげえウラワザ黙ってるなんてよう」

「スキルの出し方が分かってれば隠したりしないさ。でも俺にもさっぱりわからないんだ」

「……こんなレアスキル持つてるなんて知られたら、しつこく聞かれたり……いろいろあるだろう、その……」

クラインがキリトの言葉に深くうなずいた。

「ネットゲーマーは嫉妬深いからな。俺は人間が出来てるからともかく、妬み嫉みはそりゃああるだろうなあ。それに……」

そこで口をつぐむと、キリトにしっかりと抱きついたままのアスナを意味ありげに見やり、にやにや笑う。

「……まあ、苦労も修行のうちと思って頑張りたまえ若者よ」

「勝手なことを……」

クラインは腰をかがめてキリトの肩をポンと叩き、右手でパルを持ち上げて背中に背負うと、振り向いて 軍 の生存者達のほうへと歩いていった。

軍 の中から一人、前に出てきて礼を言う。

「あの……ありがとうございました」

「お前たち、本部まで戻れるか？」

クラインの言葉に一人が頷く。まだ十代とおぼしき男だ。

「は、はい」

「よし。今日あったことを上にしっかりと伝えるんだ。二度とこういう無謀な真似をしないようにな」

次にこんなことがあったら全滅するのが目に見えるッス

「はい。……有り難うございました」

「礼ならキリトさん達に言っツスよ」

パルはキリトに向かって腕を振る。

軍のプレイヤー達はよろよると立ち上がると、座り込んだままのキリトとアスナに深々と頭を下げ、部屋から出ていった。回廊に出たところで次々と結晶を使いレポートしてゆく。

その青い光が収まると、クラインはさて、という感じで左手で頭をかいた。

「俺たちはこのまま75層の転移門をアクティベートして行くけど、お前は どうする？ 今日立役者だし、お前がやるか？」

「いや、任せるよ。俺はもうヘトヘトだ」

「そうか。……気をつけて帰れよ」

クラインは頷くと仲間に合図した。六人＋一匹で、部屋の奥にある大扉の方に歩いて行く。その向こうには上層へと繋がる階段があるはずだ。扉の前で立ち止まると、カタナ使いはヒョイと振り向いた。

「あーその……なんだ……。今日は助かった。礼を言う。これからいろいろあるかも知れんが……何かあったらいつでも言ってくれ」

「おいらたちは、いつでも力になるツスよ」

クラインはぶつきらぼうに、パルは力こぶを作りながら言うときリトは苦笑し、わかったの代わりに手を上げた。おいらたちははニツと笑みを浮かべ、扉を開けた。

「じゃあな」

「また今度ツス」

「なあ、パル公よ。あの二人がくつつくかどうか、賭けをしないか？」

上層へと繋がる階段をのぼっているとクラインがポツリと背中のパルに向かって喋りだした。

「いいツスけど、たぶん賭けにならないツスよ」

パルとクラインは同時に

「「あの二人がくつつく方に一万コル」」

と言った。

「くそう、俺にも出会いが欲しいぜ」

「まあ、頑張りたまえ若者よツス」

「うるせい」

軽いやり取りをしながら、おいら達はまだ見ぬ75層へと登って行った。

第16話 頑張りたまえ若者よッス（後書き）

今回の話ですが、かなり難産でした。説明は難しいッス。

最初の方で伏線を張りましたが、うまく回収できるか自信がありません…。

予想が出来てしまうかもしれませんが感想で、もしかして〜と書かないでもらえると助かります。ネタバレはちよつと…まあ、察してください。

ちなみに、作者の見解では クラインは空気の読める男 です（¹）
| ^) b

さて、次回の話ですが、出来次第投稿します。
では

第17話 お茶がうまいッス

七十五層を解放した翌日。

おいらは朝からエギルの雑貨屋の二階へと避難をしてきた。

すると、そこには騒ぎの張本人であるキリトの姿があり、店の不良品なのだろう奇妙な風味のお茶を不機嫌に啜っている。

「お、パルじゃないか どうしたんだ？」

「昨日のあれで、キリトさんが来そうな場所に人が押しかけてるって言えば判るッスか」

昨日のあれというのは、フロア攻略の際にキリトが使った 二刀流のことであり、

キリトが行きそうな場所には現在、早朝から剣士やら情報屋が押しかけている。

当然、ローゼンクイーン も当てはまり、久しぶりに店の営業も困難なほどである。

「はあ、迷惑をかけてすまん」

「まあ、おいらは慣れてるッスから平気ッスよ」

パルはそう言うのと慣れた手つきで柵からカップを一つ取出し、キルトの目の前にあったティーポッドの中身を注ぐ。

「それにしても、すごい噂になってるッスよ。軍の大部隊を全滅させた悪魔を単独撃破した二刀流使いの超絶百連撃、百連撃はさすがにないッスね」

「な、俺が聞いたときは五十連撃だったぞ」

「既に、噂に尾ひれどころか、角や足ぐらい付いてるッスね」

パルは椅子に座るとお茶を啜りながら言う。

「引越してやる………どっかすげえ田舎フロアの絶対見つからないような村に……」

ブツブツつぶやくキルトに、奥から出てきたエギルがにやにやと笑顔を向けてくる。

「まあ、そう言うな。一度くらいは有名人になってみるのもいいさ。どうだ、いつそ講演会でもやってみちゃどうだ。会場とチケットの手はずは俺らが」

「するか!」

キルトは叫びと共に、エギルの頭の右脇を狙って投げた。が、モーションにあわせて投擲スキルが発動してしまい、輝きながら猛烈な勢いで、すっ飛んだカップは、部屋の壁に激突して大音響を撒き散らす。

「おわっ、殺す気か！」

大げさに喚くエギルにわりいと右手を上げて謝るキリト。

「勘弁しろよ！」

こういうことは日常茶飯事なので、パルは椅子に座りながらお茶を啜る。

「ふう、お茶がうまいツスね」

「まっただ」

キリトは新たなカップを取り出すと右手で頬付きながらお茶を啜った。

エギルは今、キリトが昨日の戦闘で手に入れたお宝を鑑定しているらしく。

時々奇声を上げているところを見るとそれなりに貴重品も含まれているようだ。

パルはふと、キリトの顔を見てみるとどこか不安そうに見える。

しかし、キリトは込み上げてくる不安を抑えこむようにお茶を飲み干す。

「もう一杯いかがッスか？」

パルは、大きなポットを持ちながらキリトに問いかける。

「ああ、頼む」

カップに新たなお茶を注ぐと、階段をトントンと駆け上ってくる足音がした。

この足音からして、ノシノシと上ってくるエギルではないことは確かである。

勢いよく扉が開かれるとそこには

「よう、アスナ……」

「どうしたんスか？ 顔色が悪いッスよ」

いつものユニフォーム姿のアスナは顔を蒼白にし、大きな目を不安そうに見開いている。

両手を胸の前で固く握り、一、二度唇を噛み締めたあと、

「どうしよう……キリト君……」

と泣き出しそうな声で言った。

「大変なことに……なっちゃった……」

「どうぞッス」

「ありがとう」

おいらはアスナの前に新たに淹れたお茶を置くと気を利かせて、エギルと共に一階の店先に出た。

おいらはこの後、店に戻ったので何があったのか知らなかったッスけど

後日、七十五層の転移門前にそびえ立つ巨大なコロシウムで、二刀流 キリトVS 神聖剣 ヒースクリフのデュエルが行われることが大々的に発表された。

第17話 お茶がうまいッス(後書き)

短いですが、キリがいいのでここで区切ります。

第18話 二刀流 VS 神聖剣 のはずだったツス

先日、新たに開通なった75層の主街区である コリニア は古代ローマ風の造りだった。

すでに多くの剣士や商人プレイヤーが乗り込み、また攻略には参加しないまでも街は見たいという見物人も詰め掛けて大変な活気を呈している。

それに付け加えて今日は稀に見る大イベントが開かれるとあって、転移門は朝からひっきりなしに訪問者の群を吐き出し続けていた。街は、四角く切り出した白亜の巨石を積んで造られていた。神殿風の建物や広い水路と並んで特徴的だったのが、転移門の前にそびえ立つ巨大なコロシウムだった。まさにうってつけとばかりにキリトとヒースクリフのデュエルはそこで行われることになった。

おいらは、エギルと共に席を確保しているクラインを探してみるがなかなか見つけることが出来ないでいた。

「お〜い、こっちだこっち」

クラインが階段状になっている下の方、最前列の観客席でこちらの

方に手を振っていた。

「最前列じゃね〜か、よくとれたな」

「こんなイベント滅多にないしな、朝から並んでようやく捕れた席だぜ」

エギルの感心した声にクラインが胸を張る。

「それはそうと、クラインさんに頼まれてたやつも買っておいたッスよ」

「おう、ありがとよ」

おいらは、アイテム欄から入り口付近で買っておいた火噴きコーンと黒エールを出現させると席を確保していたクラインに手渡す。

「それにしてもすごい人数ッスね〜」

パルは串焼き肉を頬張りつつ思っていたことを呟く。

「時期が時期だからな、しかも今話題の 二刀流 VS 神聖剣のユニークスキル対決と来れば金を払ってでも一目見たいと普通は思うだろうよ」

「それもそうッスね」

「しっかし、よくもまあこんだけの人数が集まったもんだな。こりゃ、まじでキリトを説得して講演会をやってみるのもありかもしれないな」

黒エールを煽りながら、エギルが商人らしい意見を口にした。

「それにしてもどっちが勝つツスカね」

「うむ、こないだキリトの二刀流を見たときはスゲーって思ったけどよ。

ヒースクリフの神聖剣も同じぐらいつえーんだよな。」

この三人の中で唯一、二刀流と神聖剣を見たことがあるクラインはどっちが勝ってもおかしくねえと言った。

「お、ようやく始まるみたいだぞ」

しばらく、三人で雑談をしながら時間を潰していると、試合の開始を告げるアナウンスが闘技場に響き渡った。すると、会場全体に遠雷のような歓声が響き渡る。

「やっと試合が始まるツスね」

おそらく、アインクラッドの最強クラスである 二刀流 と 神聖
剣 の対決にふさわしい舞台は整った。

残すは、対戦者である二人が登場するだけである。

いつもと変わらない黒衣をまとったキリトがその姿を現すと歓声が
さらに高まった。

会場に渦巻く興奮と熱狂によって観客は立ち上がる。

「神聖剣なんて斬っちまいなー！ キリト！」

「ぶっ殺せ！ キリト」

「ガンバレッス！ キリトさん」

三者三様の応援の声を張り上げると一瞬、こちらに気付いたキリト
と視線が合う。

キリトは軽く、こちらに手を上げると闘技場の中央へと再び歩き出
した。

キリトが闘技場の中央付近に到着し立ち止まると、反対側の控え室
から深紅の人影が姿を現した。

「あれが、アインクラッド最強の男 神聖剣 のヒースクリフッス
か」

ヒースクリフは、通常の血盟騎士団制服が白地に赤の模様なのに対してそれが逆になった赤地のサーコートが羽織っていた。

鎧の類はキリトと同じく最低限だが、左手に持った巨大な純白の十字盾が目を引く。

どうやら剣は盾の裏側に装備されているらしく、頂点部分から同じく十字をかたどった柄が突き出している。

キリトの目の前まで無造作な歩調で進み出てきたヒースクリフが大観衆に目をやった。

すると、真鍮色の瞳と一瞬、目があった気がした。

『ムマス、茅。』

パルの頭の中にかすれた様なノイズが響く。

視界が暗転すると共に、パルはその場に膝をつく。

何なんスカ、この感覚は……思い出せそうで思い出せないッス

パルは少しでも頭の中に響く声を正確に聞き取ろうと集中しようとした、そのとき

『オー アシス』

世界がブレた。

闘技場が揺れているといわんばかりの歓声が響き渡ると共に、パルの視界が正常に戻った。

「　　ッ、はあはあ」

いつの間にか呼吸が止まっていたのだろう。

パルが酸素を求めるかのように呼吸をすると、まるで大気中に記憶が霧散するかのような感覚が訪れる。

そして、記憶は戻される。

「やっと試合が始まるッスねって………あれ？」

いつの間に終わったッスか？

パルの目線の先には、アスナに助け起こされているキリトの姿と嵐のような歓声のなかをゆっくりと控え室に消えて行く深紅の聖騎士の姿があった。

第18話 二刀流 VS 神聖剣 のはずだったツス（後書き）

賛否両論、キングクリムゾン、伏線ハリハリ……

実は今回の話は最初に形が出来たときは

なにこれ？

こいつら、野球観戦のオツチャンじゃん。

ってなことになっていたので独自性を出してみました。

賛否両論いろいろあると思いますが完結目指して頑張っていきますので

今後とも、パルの物語をよろしく願います。

第19話 雑貨屋パルの憂鬱ツス

10月もあと数日を残し、もう少しで11月になるといふある日

おいらは、アインクラッド第一層の南端に位置する街であり、プレイヤーのスタート地点である はじまりの街 を一人で歩いてきた。 はじまりの街 は基部フロアの面積の約二割、解りやすく例えるならば、東京の小さな区一つほどの威容を誇るくらい広い街であり、現在、この町には約二千人程のプレイヤーがいる筈なのだが……

「なんだか人が少ないツスね」

石畳の道並みには疎らに数人のプレイヤーちらほら見られるくらいで、転移門のある広場は閑散としていた。

「まあ、おいらにとって、この状況は騒がれなくて逆に良いツスけど……」

前線付近のプレイヤーは、パルの姿を見ても騒がないが、初めて見たプレイヤーは混乱するであろう。

基本的にモンスターが入って来る筈のない街の中で、ペンギンのぬいぐるみのような姿をした、いかにもモンスター？のパルが街中を闊歩しているのだから

以前、パルが下層の街に降り立ったときは、突然の事態に驚き逃げ出す人や武器を持ってパルに襲い掛かる人でチョットした騒ぎにな

った。

それ以来、パルは前線付近や自分の店のある五十層を活動拠点としており、下層に降りることはないのだが……

「はあく、おいらに何の用があるんスカね」

注文した品を 軍 の本拠地である 黒鉄宮 まで持ってこられたしと言われたときは、空いた口が塞がらなかった。

こんな身勝手なことを言われたら、さすがのパルも断るのだが、既に 軍 から注文された大量の装備品は作成済みあり、また、聞いたのが受け取りの段階であったので、大量の在庫を抱えたくないパルは断ることが出来なかった。

「どうせ、聞かれることは………」

正直、質問の内容が予想できるパルは、これからどうやったら相手が納得してもらえるかを考えると憂鬱な気持ちになった。

「なあ、パルはん、あんた何者なんや？」

黒鉄宮 内部にある一室に通されたパルは何事もなく注文品の受け渡しを終え帰ろうとしたところで、背後から今まで幾度も聞かれた質問が発せられた。

そこに居たのはやや小柄ながらがっちりした体格の男だった。特徴的なある種のサボテンのように尖ったスタイルの茶色の髪に軍 特有の鎧をまとったその姿を見たパルはため息をつくと言った。

「何度も言っスけど、おいらはただのしがない雑貨屋ツスよ。キバオウさん」

って言っても納得してもらえないツスよね。

何を言っても納得してもらえない事は学習済みなのでパルは長期戦になる事を覚悟した。

第19話 雑貨屋パルの憂鬱ツス（後書き）

「キリが良いので今日はここまでッス」

第20話 指揮官の孤独ツス

「ふう〜、やっと解放されたツスよ」

黒鉄宮 から出たパルは、手を上にあげて体を伸ばしながら先ほどのキバオウとの会話を思い出していた。

「パルはん、あんた何者なんや？」

「本当はGMゲームマスターやないんか？」

最初のうちはこのように質問を繰り返していたキバオウであったが

.....

「わいは、わいのやり方でクリアを目指してたんや、それなのに

」

途中でキバオウの身の上話が始まると、そこから最近の 軍 に起
こっている問題などについてなど聞かされた。

話をまとめると 軍 は理想が高すぎたのだ。

軍 の理想である多人数でモンスター狩りを行い、危険を極力減
らした上で安定した収入を得てそれを均等に分配しようという思想
それ自体は間違っていない。

だがネットゲーム、特にMMORPGの本質はプレイヤー間でのリ
ソースの奪い合いであり、それはSAOのような異常かつ極限状況
にあるゲームにおいても変わらなかった。

その理想を実現するためには、組織の現実的な規模と強力なリーダ
ーシンプが必要であり、その点において軍はあまりにも巨大すぎた
のだ。得たアイテムの秘匿が横行し、肅清、反発が相次ぎ、リーダ
ーは徐々に指導力を失っていった。

「徐々に崩壊していく 軍 の有様を、わいは見ていられんかった
んや」

このとき、キバオウは指導力のないリーダーに成り代わって 軍
をまとめ上げること決意した。

同じくリーダーのやり方に不満を持っていた幹部たちをまとめ上げると、キバオウは、体制の強化を打ち出して、今までのギルドとは違う事を明確にするためにギルドの名前を アインクラッド解放軍に変更した。

さらに 軍 の公認の方針として、治安維持のために犯罪者の取締りやギルドメンバーを強化するために効率のいいフィールドの開拓を推進した。

「結果、ギルドの収入は激増し 軍 の権力はどんどん強力なものとなっていったんや。しかし……」

軍 の権力の増大と共に腐敗が始まった。

一部の幹部の横領や兵士たちの一般プレイヤーからの徴税という名の恐喝まがいの行為。

これらにうつつを抜かして、ゲーム攻略をないがしろにしつづけては本末転倒だろう、という声が末端のプレイヤーからの声。

「わいは、せめてその不満を抑えるために、ギルドの中で、もっともハイレベルのプレイヤー十数人で攻略パーティーを作って、最前線のボス攻略に送り出したんやが……」

だが、しかし、七十四層のフロアボスにパーティーは敗退、隊長は死亡という最悪の結果になり、キバオウはその無謀さを強く糾弾された。

「なあ、パルはん、わいの……、わいのやり方はまちがってたんのか？」

キバオウの独白にパルは何と答えればよいかわからなかった。これは、最初のリーダーもキバオウも悪いと言えば悪いし、悪くないと言えば悪くない。

単に指導者として力不足だったと言えばそれまでだが……

「しかも……いや、これはいらん話やな……」

キバオウが何かを言いかけて止めると

「パルはん、わいの愚痴を聞いてくれて、ありがとな」

そう言っつてキバオウは部屋から出て行った。

「何が正しいか、正しくないのか、おいらには解らないツスけど……
少しでも話したことで気が楽になったんなら幸いツスよ。キバオウ
さん」

パルはキバオウの背中に向かってポツリと呟いた。

「結局、いつもの通りになったツスね」

実はこのやり取りは珍しくなく、よく ローゼンクイーン で見られるものだ。

このパルの聞き上手っぷりは凄まじく、情報屋である 鼠のアルゴ に「パルは私の天敵だヨ」と言わせるほどだ。

相手が気付かず自然に話してしまうその話術は、情報を扱うアルゴにとって厄介なのである。

「さて、仕事も終わったツスし、ちょうどいいので街の探検でもするツスかね」

パルは プリニードガー + 99 を取り出すと地面に刃先を向け手を放した。

仮想の重力によって短剣が下に落ちるとキンツという金属音を立てて倒れた。

「こっちの道に行くツス！」

パルは短剣が示した方向に足を向けるとペタペタと歩き出した。

第20話 指揮官の孤独ツス（後書き）

「続くツスよ」

第21話 数の暴力ツス

広場から大通りに入り、NPCショップと屋台が建ち並ぶ市場エリアにさしかかっても、相変わらず街は閑散としていた。

やたらと元気のいいNPC商人の呼び込み声が、通りを空しく響き渡っていく。

周りを見渡してプレイヤーを探してみると通りの中央に立つ大きな木の下に座り込んだ男が一人いるくらいである。

おいらは、大通りをひたすら道なりに進みながら珍しいものはないかと探検していたが……

「ひ、広すぎツスよ〜」

余りの街の広さに十分くらい歩いたところで音を上げると近くのベンチに座って休憩を取った。

ベンチに座ったパルはアイテム欄から水筒を取り出すと水筒に備え付けてあるコップに水を注ぐ。

この水は、町のあちこちにある泉で好きなだけ汲めるもので水筒アイテムがあれば持ち運びも可能である。

おいらはのどの渴きを潤すと一息ついた。10月下旬の肌寒さが体に染みこむのを感じる。

ついこの間まで、暑い暑いと言ってへたっていた気がしたが、急に秋の訪れを感じた今日この頃である。

そういえばもうすぐ11月ツスけど、今月はいろんな出来事があったツスね

74層のボスモンスター グリームアイズ と戦ったり

キリトが血盟騎士団に入ったり

キリトがアスナのストーカーを返り討ちにした

キリトとアスナが結婚したり

ホント、思い返してみるといろんなことがあったツスね。

ちなみに、ほとんどキリトが関係してるのは毎度の事なので気にする事ではないのである。

パルはしばらく、ベンチに座りながら思考にふけていると

「ん？」

パルの耳にガチャンガチャンと鎧の動く音が聞こえてきた。

咄嗟に近くの物陰に隠れると広場の方から灰緑と黒鉄色で統一された装備の一団が近づいてくる。

間違いなく 軍 の者だ。

おいらは、先ほど 黒鉄宮 で聞いたキバオウの話を思い出すと
徴税部隊 ではないかと当たりを付けた。

徴税部隊 は、パルの隠れている物陰には目もくれずに通り過ぎ
ていく。

兵士たちの装備を見てみると先日、前線で見た様な高レベルなもの
ではなく低レベルの物である。

鎧は一度の損傷も修理も経験してない新品同様の輝きが見て取れる。
表情は、前線や中層のプレイヤー等に見られるような顔つきでなく
へらへらとどこか薄っぺらくきつと、一度もフィールドに出ていな
いのだろう。

そんなフィールドに出てないような兵士の一団がどこかを目指して
行くのか気になったパルは、後ろから気付かれないように細心の注
意を払いながら付いて行くことにした。

「はあ、胸糞悪いッス」

徴税部隊 は市街地の一角にあるNPCショップの前で待ち伏せ
しているらしく三人は店先で、残りは裏通りに隠れ潜んでいる。

パルは建物の上からその様子を見守っているとNPCショップから
十代前半くらいの少年少女四人が出てきた。

しばらく見ていると、待ち伏せしていた三人は出てきた四人に徴税という名目で恐喝し始めた。

当然、恐喝された少年少女は一目散に逃げるが、徴税部隊はど
うやらある場所に誘導して逃がしてらしく。

四人のうち、二人の少年と一人の少女が空き地に追い込まれると、
徴税部隊は空き地の唯一の出入り口である通路を十人くらいで
塞いで閉じ込めた。

街の内部、いわゆる街区圏内では、犯罪防止コードというプログラ
ムが常時働いており、他のプレイヤーにダメージを与えることはも
ちろん、無理矢理移動させるような真似は一切できない。

しかしそれは裏を返せば、行く手を阻もうとする悪意のプレイヤー
も排除できないということであり、このように通路を塞いで閉じ込
めるブロック、更には直接数人で取り囲んで相手を一歩も動け
なくしてしまうボックスといった悪質なハラスメント行為の存
在を許す結果となっている。

「チツ、一人は逃がしちまったが、まあいいだろう」

徴税部隊のリーダーらしき男が舌打ちしながら言う。

「や、やめてください……、お金は渡しますから帰ってください…
…」

少女が勇気を振り絞って徴税部隊に呼びかける。

ここで、お金を徴税するだけであつたならばパルは黙って見守るだ
けであつたであろう。

これは当事者同士の問題であり、パルはあくまでも第三者なのだ。事が穏便に収められるならば、お金を収めるだけで済むならば安い物だろう

ここでパルが出て行っても、直接の解決にはならず、徴税部隊は今回の事を繰り返すであろうことは予想できる。しかし……

「あんたら、ずいぶん税金を滞納してるからなあ……。金だけじゃ足りねえよなあ」

「そうそう、装備も置いてってもらわないとなアー。防具も全部……何から何までな」

男達の下卑た笑いを見て、パルの頭の中の何かが切れた。

兵士たちは、こともあるうか少女を含む子供たちに着衣も全て解除しろと要求しているのだ。

パルは男達に対する怒りよりも、先ほどまでうだうだ考えてた自分に怒りを感じた。

こんなことになるんだっと思ったら思ってしまうが、もう起きてしまったものは仕方がない。

怒りを無理やり内側に収めるとパルは後々の厄介なことなど考えず建物の上から空地へと飛び降りた。

「だ、誰か助けて……」

「誰も助けになんか来るわきゃねえだろ」

ゲラゲラと笑う男たちは誰も来るわけがないと思っているのである。しかし、そんな男たちの幻想をぶち壊す存在が目の前に降り立った。

「そこまでツスよ」

一匹のプリニーが空から降ってきたのだ。

パルはスタツと着地をすると子供たちを守るかのように男たちの前に立ちふさがる。

「いい年した大人が寄って集って、こんなことして恥かしくないんツスか？」

パルの声は硬く、いつもの陽気なものとは違い真逆の冷たさを感じる程である。

「おい……オイオイオイオイ！！ な、何なんだテメエは？」

いち早く我に返った軍プレイヤーの一人が喚き声を上げる。

「おいらは通りすがりのただの雑貨屋ツスよ」

「雑貨屋風情が 軍 の任務を妨害すんのか？」

「まあ、待て」

リーダーらしき男がそれを押し留めると威圧するように声を張り上げる。

「俺たちは一般プレイヤーの解放のために戦ってる 軍 なんだぜ。その 解放軍 に楯突くって事がどういふことか解ってるんだろくな？」

リーダーの一言に勢いづいたように他のメンバー達も口々に同じような言葉を喚き散らしている。

おいらは、その間に子供たちじっとしているように言つと、囁っている男たちに向かって思ったことをそのまま口にした。

「何言ってるんツスカ？ここに 軍 なんていないツスよ。」

だって、おいらの目の前にいるのは子供達が苦勞して稼いだお金を脅して奪おうとしてる卑劣な盗賊なんスから」

パルの挑発の言葉に対して男たちは口を噤んだ。辺りに一触即発の空気が漂う。

「そこまで言っただから覚悟はできてるんだろつなあ？」

リーダーらしき男が抜刀と叫ぶと徴税部隊の男たちは己の武器を次

々と抜いた。

「そちらこそ、剣を抜いたってことは切られる覚悟があるって事ッスよね」

パルは腰のポーチから プリニーダガー + 99 を取り出す。

「ハッ！、そんなオモチャみたいな剣で何ができるってんだ？」

リーダーは鼻で笑う。

パルの両手に持った剣を見て侮っているのだろう。

「プリニーッス」

おいらは、返事の代わりにプリニーダガーを投げた。

パルが投じた銀閃がリーダーの両脇にいる二人に当たった次の瞬間、紫の閃光と共に爆発に似た衝撃音が響き渡る。当たった勢いそのままに仰向けにぶっ倒れる。

「……………(は?)……………」

予想を超えた余りの事態に、頭が付いていかなかった男たちは再び絶句した。

パルは、そんな男たちの事など気にせず次々と剣を投げ続ける。

「ちょ」「おま」「ぐはッ」「なッ」「ひあッ」「あべしッ」

パルの手元から銀閃が煌めくたびに三者三様に悲鳴を上げて次々と倒れていく。

「安心していいツスよ。HPは減らないツスから。その代わりに、いつまでも続くツスけど」

犯罪防止コード圏内では、武器による攻撃をプレイヤーに命中させても見えない障壁に阻まれてダメージが届くことはない。

だがこのルールにも裏の意味があり、つまり攻撃者が犯罪者カラーに落ちることもないということになる。

それを利用したのが 圏内戦闘 であり、通常は訓練の模擬戦闘として行われる。

しかし、攻撃者のパラメータとスキルが上昇するにつれ、コード発動時のシステムカラーの発光と衝撃音は過大なものとなり、またソードスキルの威力によってはわずかながらノックバックも発生する。慣れない者にとっては、HPが減らないとわかっていてもその恐怖はおおよそ耐えられるものではない。

その場から一步も動かず、まるで固定砲台のように次々と剣を投じるパルに恐怖を感じ、リーダーは部下を見捨てて一目散に逃げようとする。

「待つツスよ」

逃げようとするリーダーに向かってパルは容赦なく剣を投げ続ける。リーダーは倒されても、それでも起き上がるうとするが次々と投げつけられる投剣がそれを阻む。

「リーダーが、撤退を、命じないと、部下は、逃げられないじゃないッスか」

組織において部下というものは、リーダーが突撃と言えばたとえ勝ち目がなくても突撃をし、撤退を命じれば即座に撤退する。

それだけに、リーダーはどんな状況においても決断を下さなければならぬという責任が生じる。

それなのに責任を放棄して一目散に逃げるとは何事か。

「て、撤退だ、撤退！」

リーダーはようやくパルの意図に気付いたのか、撤退の指示を出すと男たちは我先にと逃げに行った。

男たちが完全に撤退したことを確認したパルは剣を降ろす。

「ふう……」

大きく一つ息をついて両手に持った短剣を腰のポーチに収めて振り返ると、そこには、絶句して立ち尽くす子供たちの姿があった。

や、やりすぎたッス

パルは今更になつてちよつとやりすぎだったことに気付いた。先ほどの、怒りに身を任せた容赦ない攻撃はさぞかし子供たちを怯えさせただろうと思ひ、額に一筋の汗が浮かぶ。そのとき

「ギン！ ケイン！ ミナ！！ みんな無事！？」

暗青色のショートヘア、黒ぶちの大きなメガネをかけた女性がパルの後ろで怯えている子供たちに呼びかけた。

女性は格好は簡素な濃紺のプレーンドレスを身にまとい、腰には鞘に収められた小さな短剣があり、きつと逃げ切れた少年が助けを呼んできた保護者つてところだろう。

「「先生！」「」

先生に向かつて走り寄っていく子供たち。女性は、子供たちを両手で受け止めると

「これで一件落着ツスね」

パルは女性から視線を外すと見覚えある二人の姿があつた。

「あれ、キリトさんとアス　　ぐはッ」

パルの声はキリトとアスナの後ろから走ってきた赤毛の少年の一撃によつて遮られた。

「よくもギン兄ィたちを苛めたな！」

「ちよつと待つツスよ、おいらは　　イタタタッス」

それでも喰らえと言ってパルの両頬を引っ張る少年。
誤解を訂正しようとするが、さすがに力任せという訳にもいかずに
困るパル。

そんな様子を遠巻きに見ていた子供たちが次々とパルに近寄って
いく。

「わ、かわいい〜」

「こいつ、羽があるぞ」

「ペンギン？」

「どれくらい伸びるかな？」

「ふかふかだ」

子供というものは純粹であるがゆえに遠慮などしない。
それゆえに

「ちょ、そこは、イタタタ、羽は引っ張らな、のび、おいらは伸び
な、ぐはッ」

引っ張ったり、掴んだり、押したり、撫でたりと揉みくちやにされ
ているパルはたまったもんじゃないとキリト達、年長組に助けを求
める。だが、あちらはあちらで何やら様子がおかしい。みんなの心
が…という声が聞こえる。

「ユイ！ どうしたんだ、ユイ！！」

キリトの叫び声が響き渡るとパルを弄る子供たちの手が止まる。
アスナが抱えてる少女に何かあったようだ。

「ユイちゃん……何か、思い出したの!？」

「……あたし……あたし……あたし、ここには……いなかった……。ずっと、ひとりで、くらいとこにいた……」

ユイは何かを思い出そうとするかのように顔をしかめ、唇を噛むと、突然。

「うあ……あ……あああ!！」

その顔がのけぞり、細いのどから高い悲鳴がほとばしった。

「!？」

ザ、ザツという、ノイズじみた音が遠くにいるパルの耳にも響いた。直後、ユイの硬直した体のあちこちが、崩壊するように激しく振動した。

「ゆ……ユイちゃん……!！」

アスナも悲鳴を上げ、その体を両手で必死に包み込む。

「ママ……こわい……ママ……!！」

かぼそい悲鳴を上げるユイをアスナはぎゅっと胸に抱きしめた。数秒後、怪現象は収まり、硬直したユイの体から力が抜けた。

「なんだよ……今の……」

キリトのうつろな眩きが、静寂に満ちた空き地にかすかに流れた。

「今度は何が起きたんツスカ？」

「パルは、また何かキリトの周りで起きたのだからとそう思った。」

第21話 数の暴力ツス（後書き）

ここでソードアート・オンライン関係のお話をひとつ

・ 原作者である川原礫様のホームページで夏休み特別企画 『星なき夜のアリア』を公開していますのでまだ見てない人は見ることをオススメします。第一層のボス攻略の話です。

・ Sword Art Online Voice（ソードアート・オンラインボイス）という、原作のボイスドラマを公開してるサイトで約一年ぶりの更新がありました。 最終決戦編 です。

聞いた感想ですが、胸に響くキリトの叫びが最高でした。無料で公開してるのでまだ聞いたことがない人はぜひ聞いてみてください。

・ ソードアート・オンライン8 アリー・アンド・レイド が発売。

これを読めば、作者の創作意欲が間違いなく上がるでしょう。早く読みたいが

とあるx2冊、デュラ、魔法科高校も買ったのでこれから読むかという幸せな悩みが……

原作情報はここまでにして、次の話ですがしばらくパソコン環境のない場所に行かなきゃならないので少し間が空くかもしれません。

最後に、長文ながらもここまで読んで下さった皆様に対する感謝の言葉で閉めさせていただきます。

それでは、 そーどあーと・おんらいんツス を今後ともよろしく
お願いします。

第22話 考えるな、感じるッス

「ミナ、パンひとつ取って！」

「ほら、余所見してるところぼすよ！」

「あーっ、先生ー！ ジンが目玉焼き取ったー！」

「かわりにニンジンやったろー！」

「これは……すごいな……」

「そうだね……」

「ある意味、戦場ッスね……」

三人は、目前で繰り広げられる戦場さながらの朝食風景に、呆然とつぶやき交わした。

はじまりの街、東七区の教会一階の広間。巨大な長テーブル二つに所狭しと並べられた大皿の卵やソーセージ、野菜サラダを、二十数人の子供たちが盛大に騒ぎながらぱくついている。

少し離れた丸テーブルに、キリト、ユイ、アスナ、そしてこの教会にいる子供たちの保護者であるサーシャの四人と一緒に座ったパルは五人分のカップにお茶を注ぐとそれぞれの目の前に置く。

「でも、凄く楽しそう」

アスナは、パルから受け取ったお茶のカップを微笑しながら口許に運んだ。

「毎日こうなんですよ。いくら静かになっても聞かなくて」

そう言いながら、子供たちを見るサーシャの目は心底愛しそうに細められている。

「子供、好きなんです」

アスナが言うと、サーシャは照れたように笑った。

「向こうでは、大学で教職課程取ってたんです。ほら、学級崩壊とか、問題になってたじゃないですか。子供たちを、私が導いてあげるんだーって、燃えてて。でもここに来て、あの子たちと暮らし始めてみると、見ると聞くとは大違いで……。彼らより、私のほうが頼って、支えられてる部分のほうが大きいと思います。でも、それでいって言うか……。それが自然なことに思えるんです」

「何となくですけど、わかります」

アスナは頷いて、隣の椅子で真剣にスプーンを口に運ぶユイの頭をそつと撫でた。

パルは、頭をなでられてうれしそうに目を細めるユイとそれを微笑みながら見守るキリトとアスナのまるで家族のような関係を見て、こんな時間がいつまでも続けばいいなと心からそう思った。

昨日、謎の発作を起こし倒れたユイは、幸い数分で目を覚ました。

この時、まるでどういう状況なのか理解できなかったパルは、キリトから事情を聴くと共に、空き地で起こった事の顛末などをお互いに説明した。

キリトから聞いた話によると、キリトとアスナは、二十二層の森の中で迷子になっていた記憶喪失の少女であるユイの保護者を探しに、はじまりの街に来て、子供たちが集まって暮らしているといわれている教会を訪れたと、そこで話を聞いていると、軍の徴税部隊が空き地でブロックしてる事を聞きつけて手伝いに来たという事らしい。

パルも軍に注文された品を納品しに来たことや、空き地で起こった軍の徴税部隊の恐喝などを話した。

情報交換を終えると、パルは自分のせいで徴税部隊が教会にけしかけて来るかもしれないと感じみんなを守る為に、キリト達は謎の発作を起こし倒れたユイを長距離を移動させたり転移ゲートを使わせたりする気にならなかった為、教会の空き部屋を一晩借りることにしたのだった。

ちなみに、昨日の夕食の時は、パルが子供たち側のテーブルに座っており、今朝の朝食の騒ぎ以上の混沌とした食事になったため、今

朝はキリト達と同じ丸テーブルに座っている。

今朝からはユイの調子もいらしいが、しかし基本的な状況は変わっていない。

倒れたときにかすかに戻ったらしきユイの記憶によれば、始まりの街に来たことはないようだったし、そもそも保護者と暮らしていた様子すらないらしいのだ。

となるとユイの記憶障害、幼児退行といった症状の原因も見当がつかないし、これ以上何をしていいのかもわからない。まさに八方塞な状況だ。

しかし、パルは今の状況のままでもいいのではないかと思った。

記憶喪失というものは、一種の防衛本能のようなものである。

何かとてつもなく辛いことや悲しいこと、ショックなことが起こると脳がその記憶を遮断してしまい、関連される記憶あるいは、記憶そのものも一緒に封印されてしまうことがある。

もし、記憶喪失になってしまふほどの悲しい記憶やつらい記憶を無理にでも思い出してしまふと今度は完全に心が壊れてしまふだろう。それに

アスナとキリトならユイの心を癒しながら、記憶が戻るまで一緒に暮らすであろう。

他力本願で情けないなと思しながらもパルは、お茶を啜った。

パルが物思いに耽っていると、キリトはカップを置き、話しはじめた。

「サーシャさん……」

「はい？」

「……軍のことなんですが。俺が知ってる限りじゃ、あの連中は専横が過ぎることはあっても治安維持には熱心だった。でも昨日見た奴等はまるで犯罪者だった……。いつから、ああなんです？」

パルはキバオウから聞いた話で大体の事情は知っていたが、情報の信憑性はいろんな情報を元にして初めて裏づけされるものであり、今はまだ話すべきではないと思い、静観した。

サーシャは口許を引き締めると、キリトの問いに答えた。

「方針が変更された感じがしたのは、半年くらい前ですね。徴税と称して恐喝まがいの行為をはじめた人達と、それを逆に取り締まる人達もいて。軍のメンバーどうして対立してる場面も何度も見ました。噂じゃ、上のほうで権力争いか何かあったみたいで……」

「うーん……。なんせ今でもメンバー千人以上の巨大集団だからなあ。一枚岩じゃないだろうけど……。でも昨日みたいなのが日常的に行われてるんだったら、放置はできないよな……。アスナ」

「なに？」

「奴はこの状況を知ってるのか？」

奴、という言葉の嫌そうな響きでそれが誰を意味するか察したアスナは、笑みを噛み殺しながら言った。

「知ってる、んじゃないかな……。ヒースクリフ団長は軍の動向に詳しくあったし。でもあの人、何て言うか、ハイレベルの攻略プレイヤー以外には興味なさそうなんだよね……。キリト君のこととかずっと昔からあれこれ聞かれたけど、殺人ギルドのラフィン・コフィン 討伐の時なんか、任せるの一言だったし。だから多分、軍をどうこうするためにギルドを動かしたりとかはしないと思うよ」

「まあ、奴らしいと言えば言えるよな……。でも、となると俺たちだけじゃ出来ることもたかが知れてるしなあ」

「そうツスよね」

パルが、ずっとここにいたとしても、ここは守れるが何の解決にもならない。

個人は、集団において無力であるって言葉の通り、プリニー一匹が出来る事なんてかなり限られてくるだろう。

どうするべきかと悩んでいると眉をしかめてお茶を啜ろうとしたキリトが、不意に顔を上げ、教会の入り口のほうを見やった。

「誰かくるぞ。一人……」

「え……。またお客様かしら……」

相変わらずのキリトの高い索敵スキルに感心しているとサーシャの言葉に重なるように、館内に音高くノックの音が響いた。

腰に短剣を吊るしたサーシャと、念のためについていったキリトに伴われて食堂に入ってきたのは、長身の女性プレイヤーだった。銀色の長い髪をポニーテールに束ね、伶俐という言葉がよく似合う、鋭く整った顔立ちのなかで、空色の瞳が印象的な光を放っている。

パルは彼女の装備に視線を落とすと、思わず体を固くして腰を浮かせた。腰のポーチから投剣をいつでも取り出せるように構える。

鉄灰色のケープに隠されているが、女性プレイヤーが身にまとう濃緑色の上着と大腿部がゆったりとしたスボン、ステンレススチールふう鈍く輝く金属鎧は、間違いなく「軍」のユニフォームだ。右腰にショートソード、左腰にはぐるぐると巻かれた、黒革のウィツブが吊るされている。

女性の身なりに気付いた子供たちも一斉に押し黙り、目に警戒の色を浮べて動きを止めている。だが、サーシャは子供たちに向かって笑いかけると、安心させるように言った。

「みんな、この方はだいじょうぶよ。食事を続けなさい」

一見頼り無さそうだが子供たちからは全幅の信頼を置かれているら

しいサーシャの言葉に、皆ほっとしたように肩の力を抜き、すぐさま食堂に喧騒が戻った。その中を丸テーブルまで歩いてきた女性プレイヤーは、サーシャから椅子を勧められると軽く一礼してそれに腰掛けた。

パルも臨戦態勢を解くと椅子に腰を掛ける。

アスナは事情が飲み込めないらしく、視線でキリトに問い掛けると椅子に座ったキリトも首を傾げながらアスナに向かって言った。

「ええと、この人はユリエールさん。どうやら俺たちに話があるらしいよ」

ユリエールと紹介された銀髪の鞭使いは、まっすぐな視線を一瞬パルに向けたあと、ぺこりと頭を下げ、口を開いた。

「はじめまして、ユリエールです。ギルドALFに所属してます」

「ALF?」

初めて聞く名にアスナが問い返すと、女性は小さく首をすくめた。

「あ、すみません。アインクラッド解放軍、の略です。その名前は どうも苦手で……」

女性の声は、落ち着いた艶やかなアルトだった。常々自分の声が子供っぽいと思っっているアスナはさらに穏やかでない気分になりながら、挨拶を返す。

「はじめまして。私はギルド血盟騎士団の あ、いえ、今は脱退

中なのですが、アスナと言います。この子はユイ」

時間をかけてスーブの皿を空にし、シトラスジュースに挑んでいる最中だったユイは、ふいつと顔を上げるとユリエールを注視した。わずかに首を傾げるが、すぐにニコリと笑い、視線を戻す。

「おいらは、雑貨屋 ローゼンクイーン のパルっス」

よろしくッスと付け加えるパル。

ユリエールは、血盟騎士団の名を聞くと、わずかに目を見張った。

「K O B……。なるほど、道理で連中が軽くあしらわれるわけだ」

どうやら、昨日徴税部隊を懲らしめたのがパルではなく、アスナ達であると勘違いしているのだろう。

プリニー一匹に徴税部隊がやられたなんて、悪い冗談であると普通は思ってしまうだろうなと思いつつもパルは警戒を再び強めた。

連中、というのが昨日の暴行恐喝集団のことだと悟ったアスナは、ふたたび警戒心を強めながら言った。

「……つまり、昨日の件で抗議に来た、ってことですか？」

「いやいや、とんでもない。その逆です、よくやってくれたとお礼を言いたいくらい」

「お礼なら、こいつに言っただけでやってください。」

キリトは隣でお茶を啜っているパルを指さす。

「……！？、も、もしかして ローゼンクイーン って五十層にある、あの？」

最初は、理解していなかったユリエールがパルの紹介にあった ローゼンクイーン という名前で気付いたようだ。

「あの手で、どのローゼンクイーンか知らないツスけど、たぶんそれだと思っス」

いつの間にか、有名になったものツスね。

しみじみ思いながらパルは再びお茶を啜る。お茶ウマッス。

「実は、お二人にお願いしたいことがあるのですが」

ユリエールはパルにお礼を言った後、事情が飲み込めず沈黙するキラトとアスナに向かって、お願いがあると言うと、現在、軍で起きている問題などについて話し始めた。

話を聞いているとユリエールはどうやら、軍のリーダーであるシンカーと言う男側の人間らしい。

キバオウのグループをキバオウ派と例えるならば、シンカー派と言ったところだろう。

ユリエールの話は大体は先日キバオウから聞いたものと一緒であったが、やはり、視点が変わってきてくると見方も変わってくる。

パルはやはり第三者から見た情報が必要であると感じた。

こういう時にこそ情報屋の出番であるのだが、ユリエールの願いは急を要するものであった。

ユリエールは一息つくと、サーシャの淹れたお茶をひとくち含み、続けた。

「キバオウ派にも弱みはありました。それは、資財の蓄積だけにうつつを抜かして、ゲーム攻略をないがしろにし続けたことです。本末転倒だろう、という声が末端のプレイヤーの間で大きくなって……。その不満を抑えるため、最近キバオウは無茶な博打に打って出ました。ギルドの中で、もっともハイレベルのプレイヤー十数人で攻略パーティーを作って、最前線のボス攻略に送り出したんです」

アスナとキリトは思わず顔を見合わせた。七十四層迷宮区での一件は二人にも記憶にも新しいところだろう。

「いかにハイレベルと言っても、もともと私達は攻略組の皆さんに比べれば力不足は否めません。……結果、パーティーは敗退、隊長は死亡という最悪の結果になり、キバオウはその無謀さを強く糾弾されたのです。もう少しで彼を追放できるところまで行ったのですが……」

パルは、そういえばキバオウが最後に言いかけたことは何だったのかという疑問が出てきた。
この疑問に対する答えだが、次のユリエールの話で知ることになった。

ユリエールは高い鼻梁にしわを寄せ、唇を噛んだ。

「三日前、追い詰められたキバオウは、シンカーを罠に掛けるという強硬策に出ました。出口をダンジョンの奥深くに設定してある回路結晶を使って、逆にシンカーを放逐してしまっただのです。その時シンカーは、キバオウの『丸腰で話し合おう』という言葉を信じたせいで非武装で、とても一人でダンジョン最深部のモンスター群を突破して戻るのは不可能な状態でした。転移結晶も持っていなかったように……」

「ま、マジっスか!？」

非武装は、一日中堅苦しい鎧を付けてると邪魔になるだろうから、しかたがないとはいええ、緊急の転移結晶が無いのは致命的である。追い詰められたとはいええ、キバオウがこんなことをしでかしているとは……

「み、三日も前に……!? それで、シンカーさんは……?」

反射的に訊ねたアスナに、ユリエールは小さく頷いた。

「生命の碑 の彼の名前はまだ無事なので、どうやら安全地帯までは辿り着いたようです。ただ、場所がかなりハイレベルなダンジョンの奥なので身動きが取れないようで……ご存知のとおりダンジョンにメッセージを送れませんし、中からはギルド倉庫にアクセスできませんから、転移結晶を届けることもできないのです」

事態は思ったよりも深刻であった。

出口を死地と真ん中に設定した回廊結晶を使う殺人である ポータルPK は有名な手段で、当然シンカーも知っていたはずだ。しかし、反目してたとはいえ同じギルドのサブリーダーがそこまでするとは思いたくなかったのだろう。

あれ？

パルは、ふと本当にキバオウ自身がやったのか疑問に思った。

昨日のキバオウの様子は、自分のやり方は本当は間違っていたのではないかとパルに独白するほど追いつめられていた。

もし、ユリエールの話のとおり、三日前にシンカーを罠にかけたのがキバオウ本人ならば追い詰められる要因は排除されたのだ。

あんな様子をパルに見せるはずがない。もし演技だったとしても見

せる理由が思いつかない。

もしかして、別の要因があるのではないか？

例えば、キバオウ派が一枚岩ではないことや徴税部隊の時のように一部の暴走とか？

「……ギルドリーダーの証である『約定のスクロール』を操作できるのはシンカーとキバオウだけ、このままシンカーが戻らなければ、ギルドの人事や会計まですべてキバオウにいいようにされてしまいます。シンカーが罫に落ちるのを防げなかったのは彼の副官である私の責任、私は彼を救出に行かなければなりません。でも、彼が幽閉されたダンジョンはとも私のレベルでは突破できませんし、軍のプレイヤーの助力は当てにできません」

「そんなところに、上層から二人組みの見るからに高レベルなプレイヤーが街に現れたという話を聞きつけ、いてもたってもいられずに、お願いに来た次第です。キリトさん　アスナさん」

ユリエールは深々と頭を下げ、言った。

「お会いしたばかりで厚顔きわまるとお思いでしょうが、どうか、私と一緒にシンカーを救出に行つて下さいますか」

長い話を終え、口を閉じたユリエールの顔を、アスナはじっと見つめた。

部屋の中が静まり返った。

いや、そう感じるだけであって子供たちの喧騒は先ほどと変わらず遠くから聞こえてくる。

悲しいことだが、S A O内では他人の言うことをそう簡単に信じることはできない。今回のことにしても、キリトとアスナを圏外におびきだし、危害を加えようとする陰謀である可能性は捨てきれない。だがパルは

「おいらが役に立つかわからないツスけど

パルは昨日の事を思い出し、たとえキリト達が行かなくてもシンカ一の救出を手伝う事を決心した。

「微力ながら、お手伝いさせていただくツス」

昨日はうだうだと考えて決心がつかず静観していた結果、子供たちを救うのが遅れてしまい後悔したのだ。同じ間違いは二度と繰り返さない。

パルの一言が部屋の沈黙を破った。

キリトはパルと目を合わせると口元が笑った。どうやらキリトも決心が着いたようだ。

「疑って後悔するよりは信じて後悔しようぜ。行くっ、きつと何とかなるぞ」

「あいかわらずのんきな人ねえ」

首を振りながらアスナが答えると、ユリエールに向き直って微笑みかけた。

「……微力ですが、お手伝いさせていただきます。大事な人を助けたいって気持ち、わたしにもよくわかりますから……」

ユリエールは、空色の瞳に涙を溜めながら、深々と頭を下げた。

「ありがとうございます……ありがとうございます……」

「それは、シンカーさんを救出してからにしましょう」

アスナがもういちど笑いかけると、いままで黙って事態のなりゆきを見守っていたサーシャがぼんと両手を打ち合わせ、言った。

「そういうことなら、しっかり食べていってくださいね！ まだまだありますから、ユリエールさんもどうぞ」

パルは、結果的にだが、自分の一言によってユイの保護者さがしが遅れてしまったことに申し訳なくなった。

キリトとアスナの間にいるユイに視線を向けると目があつた。

ユイはパルを見て大きな笑みを浮かべる。

ユイの表情を見て、パルは少しだけ申し訳ない気持ちが軽くなった気がした。

初冬の弱々しい陽光が、深く色づいた街路樹の梢を透かして石畳に薄い影を作っている。はじまりの街の裏通りは行き交う人もごく少なく、無限とも思える街の広さとあいまって寒々しい印象を隠せない。

しっかりと武装したアスナとキリト、そして、なぜかユイを背負ったパルは、ユリエールの先導に従って足早に街路を進んでいた。

アスナは、当然のこととしてユイをサーシャに預けてこようとしたのだが、ユイが頑固に一緒に行くと言って聞かなかったので、やむなく連れてきたのだ。

その際にユイはパルにおんぶをねだったのだ。

「俺が、おぶってやるよ」

キリトがおぶさりやすい様に背を向け言う。

だが、ユイはパルの背中が気に入ったのか「ぱるがいい」と言って離れなかった。

ユイに断られたキリトの背中には哀愁が漂った気がした。

このような経緯があり、戦闘は、先ほどのやり取りで若干落ち込んでいる気がするキリトとそれを慰めているアスナが担当になり、パルはユイの護衛役となった。もちろんパルのポーチとユイのポケットにはしっかりと転移結晶を用意している。

いざとなれば　ユリエールには申し訳ないが　離脱して仕切りなおす手はずになっている。

「あ、そう言えば肝心なことを聞いてなかったな」

キリトが、前を歩くユリエールに話し掛けた。どうやら、持ち直したようだ。

「問題のダンジョンってのは何層にあるんだ？」

ユリエールの答えは簡素だった。

「1111、です」

「……へ？」

「……？」

パルは素っ頓狂な声を上げ、アスナは思わず首をかしげる。

「1111……って？」

「この、始まりの街の……中心部の地下に、大きなダンジョンがあるんです。シンカーは……多分、その一番奥に……」

「マジかよ」

キリトがうめくように言った。

「ベータテストの時にはそんなのなかったぞ。不覚だ……」

「そのダンジョンの入り口は、黒鉄宮　つまり軍の本拠地の地下にあるんです。恐らく、上層攻略の進み具合によって開放されるタイプのダンジョンなんでしょうね。発見されたのは、キバオウが実権を握ってからのことで、彼はそこを自分の派閥で独占しようと計画しました。長い間シンカーにも、もちろん私にも秘密にして……」

「なるほどな、未踏破ダンジョンには一度しか湧出しないレアアイテムも多いからな。そざかし儲かったろう」

「それが、そうでもなかったんです」

ユリエールの口調が、わずかに痛快といった色合いを帯びる。

「基部フロアにあるにしては、そのダンジョンの難易度は恐ろしく高くて……。基本配置のモンスターだけでも、六十層相当くらいのレベルがありました。キバオウ自身が率いた先遣隊は、散々追いまわされて、命からがら転移脱出するはめになったそうです。使いまくったクリスタルのせいで大赤字だったとか」

「ははは、なるほどな」

キリトの笑い声に笑顔で応じたユリエールだが、すぐに沈んだ表情を見せた。

「でも、今は、そのことがシンカーの救出を難しくしています。キバオウが使った回廊結晶は、モンスターから逃げ回りながら相当奥まで入り込んだ所でマークしたもので……。レベル的には、一対一なら私でもどうにか倒せなくもないモンスターなんですが、連戦はとても無理です。失礼ですが、お二人は……」

「ああ、まあ、六十層くらいなら……」

「なんとかかなると思います」

キリトの言葉を引き継ぎ、アスナは頷いた。六十層配置のダンジョンを、マージンを十分取って攻略するのに必要なレベルは70だが、パルはキリト達にも話していないが、経験値+300%の恩恵もありレベル118に到達している。

これならユイを守りながらも十分にダンジョンを突破できるだろうと思つて、ほつと肩の力を抜く。

だがユリエールは気がかりそうな表情のまま、言葉を続けた。

「……それと、もう一つだけ気がかりなことがあるんです。先遣隊に参加していたプレイヤーから聞き出したんですが、ダンジョンの奥で……巨大なモンスター、ボス級の奴を見た……」

「……」

アスナは、キリトと顔を見合わせる。

「ボスも六十層くらいの奴なのかしら……。六十層ボスってどんなのだったっけ？」

「えーと、確か……。石でできた鎧武者みたいな奴だろう」

「あー、アレかぁ。……。あんまり苦労はしなかったよね……」

ボスとまともに戦ったのは、グリーンアイズ戦が初めてであった。パルはよくわからないが、マージンが十分すぎるほどあるから問題ないだろう。

ユリエールに向かって、三人はもう一度頷きかける。

「まあ、それも、なんとかなるでしょう」

「問題ないツスね」

「そうですね、よかったです！」

ようやく口許をゆるめたユリエールは、何かまぶしい物でも見るように目を細めながら、言葉が続けた。

「そうかぁ……。お二人は、ずっとボス戦を経験してらしてるんですね……。すみません、貴重な時間を割いていただいて……」

「いえ、今は休暇中ですから」

アスナはあわてて手を振る。

そんな話をしているうち、前方の街並みの向こうに黒光りする巨大

な建築物が姿を現し始めた。はじまりの街最大の施設、黒鉄宮だ。正面を入つてすぐの広間にはプレイヤーの名簿である 生命の碑 が設置され、そこまでは誰でも自由に入れるが、奥に続く敷地の大部分は軍が完全に占拠してしまっている。

ユリエールは宮殿の正門には向かわず、裏手に回った。高い城壁とそれを取り巻く深い堀が、侵入者を拒むべくどこまでも続いている。人通りはまったく無い。

数分歩き続けたあと、ユリエールが立ち止まったのは、道から堀の水面近くまで階段が降りている場所だった。覗き込むと、階段の先端右側の石壁に暗い通路がぽっかりと口を開けている。

「ここから宮殿の下水道に入り、ダンジョンの入り口を目指します。ちょっと暗くて狭いんですが……」

ユリエールはそこで言葉を切り、気がかりそうな視線をちらりとパルの背中にいるユイに向けた。するとユイは心外そうに顔をしかめ、

「ユイ、こわくないよ!」

と主張した。その様子に、アスナは思わず微笑を洩らしてしまう。

ユリエールには、ユイのことは「一緒に暮らしているんです」としか説明していない。彼女もそれ以上のことは聞こうとしなかったのだが、さすがにダンジョンに伴うのは不安なのだろう。

アスナは安心させるように言った。

「大丈夫です、この子、見た目よりずっとしっかりしてますから」

「うむ。きっと将来はいい剣士になる」

「二代目黒の剣士を襲名つてところッスか？」

まあ、いざとなったら、おいらが責任を持って守るッスよ」

キリトとパルの発言に、アスナと目を見交わして笑うとユリエールは大きくひとつ頷いた。

「では、行きましようー！」

第22話 考えるな、感じるツス（後書き）

さて、2週間ほど時間が空いてしまつて申し訳ありませんでした。>
(――) <
ここから、スーパー言い訳タイムっすよ。

今回の話は、超ウルトラスーパーハイパー難産でした。

書いては、消してを繰り返すのが止まらずに気づいたら最長の長さ
に！

説明回だったこともあり、多少端折つたりばやかしたりと苦節2週
間、ようやくそれっぽい形になりました。

さて、言い訳はここまでにして

ここからは、より そーどあーとおんらいんツス を楽しみやすく
するために、デイスガイア関係（日本一ソフトウェア関係？）のお
話をひとつ

・ 響 - HiBiKi Radio Station という
無料のネットラジオ配信のHPで毎週水曜日に魔界戦記デイスガイ
ア4×日本一RADIOという番組を配信している事を先日知りま
した。冒頭のラジオドラマがありとても素晴らしいものとなつてお
ります。

プリニーってどんな奴だっけと思つた人は聞いてみることをお勧め
します。

さて、次の話ですが少々時間がかかりそうなので少し間が空くかも
しれません。

最後に、今回も長文ながらもここまで読んで下さった皆様に対する感謝の言葉で閉めさせていただきます。

それでは、そーどあーと・おんらいんツス を今後ともよろしく
お願いいたします。

第23話 運命の鎌 そして決断の時ッス

「でええええええええええ」

キリトが掛け声と共に右手の剣でずば　　っとモンスターを切り裂き、

「りゃあああああああ」

左の剣でどか　　んと吹き飛ばす。

二刀を装備したキリトは、貯まったエネルギーをすべて放出する勢いで次々と敵を蹂躪しつづけた。武器を持ったアスナとユリエールの出る幕がまったくない。

キリトのユニークスキルである　二刀流　は、その名の通り二本の剣を用いた多連続攻撃と

片手剣　や　細剣　、　短剣　のような軽量系の武器に見られるような剣速の速さが特徴である。

技の威力は　両手剣　のような一発ドカーンと高威力の技で吹っ飛ばすようなものではないものの、このダンジョンのモンスターはキリトのレベルと比べて圧倒的に低いため、カエル型やザリガニ型モンスターが出現する度に、無謀なほどの勢いで突撃しては暴風雨のように左右の剣でちぎっては投げ、ちぎっては投げであっという間に制圧してしまう。

パルは「おいらもユニークスキルが欲しいッス」と言ってキリトの

無双姿を眺め、そのパルの背中からユイが無邪気な声で「パーが
んばれー」と声援を送っている。なんとも緊迫感が薄れる光景であ
る。

「いよっしゃあああ」

キリトがユイの声援にこたえるかのようにさらに加速していく。
そんな光景を見て、アスナは「やれやれ」といった心境だが、ユリ
エールは目と口を丸くしてキリトのバーサーカーっぷりを眺めてい
る。

暗く湿った地下水道から、黒い石造りのダンジョンに侵入してす
でに数十分が経過していた。予想以上に広く、深く、モンスターの
数も多いと三重苦であったが、キリトの二刀がゲームバランスを崩
壊させる勢いで振り回されるため女性剣士二人には疲労はまるでな
い。

「な……… なんだか、すみません、任せっぱなしで………」

申し訳なさそうに首をすくめるユリエールに、アスナは苦笑しながら
答えた。

「いえ、あれはもう病気ですから……。やらせときゃいいんですよ」

「バトルジャンキーって奴っスね」

クラインが言った。ツスと付け加え責任をクラインに押し付けるパ
ル。

「ぱー、じゃんきー？」

ユイがパルの言葉を繰り返す。

「なんだよ、ひどいなあ」

群を蹴散らして戻ってきたキリトが、耳ざとく言葉を聞きつけて口
を尖らせた。

「じゃあ、わたしと代わる？」

「……も、もうちょっと」

4人は顔を見合わせて笑ってしまう。

ユリエールは、左手を振ってマップを表示させると、シンカーの現
在位置を示すフレンドマーカの光点を示した。このダンジョンの
マップが無いため、光点までの道は空白だが、もう全体の距離の七
割は詰めている。

「シンカーの位置は、数日間動いていません。多分安全エリアにい
るんだと思います。そこまで到達できれば、あとは結晶で離脱でき
ますから……。すみません、もう少しだけお願いします」

ユリエールに頭を下げられ、キリトは慌てたように手を振った。

「い、いや、好きでやってるんだし、アイテムも出るし……」

「へえ、何かいいもの出たツスカ？」

商売人であるパルの眼が光る。

「おっ」

キリトが手早くウィンドウを操作すると、その表面に、どちゃっという音を立てて赤黒い肉塊が出現した。

グロテスクなその質感に、女性陣は顔を引き攣らせる。

「な……ナニソレ？」

「カエルの肉！ ゲテモノなほど旨いって言うからな、あとで料理してくれよ」

「ぜったい嫌よ……！」

アスナは叫ぶと、自分もウィンドウを開いた。キリトのそれと共通になっているアイテム欄に移動し、『スカベンジトードの肉 x 2 4』という表示をドラッグして容赦なくゴミ箱マークに放り込む。

「あっ！ あああああ……」

「捨てるんなら欲しかったツス……」

世にも情けない顔で悲痛な声を上げるキリトと落ち込んでいるパルを見て、我慢できないといったふうにユリエールがお腹をおさえ、くっくつと笑いを洩らした。その途端。

「お姉ちゃん、初めて笑った！」

ユイが嬉しそうに叫んだ。パルからは見えないが笑顔を浮かべているだろうと予想を付ける。

昨日倒れたときはどうなるかと思ったツスけど、大丈夫みたいツスね。

パルは、この少女の笑顔がいつまでも続けばいいなと思い、そのために

「おいら、頑張るツス」

と声に出して、気を引き締めなおした。

「さあ、先に進みましょう！」

アスナの声に、一行は再びさらなる深部を目指して足を踏み出した。

ダンジョンに入ってからしばらくは水中生物型が主だったモンスター群は、階段を降りるほどにゾンビだのゴーストタイプのオバケ系統に変化していったが、キリトの二本の剣は意に介するふうもなく現れる敵を瞬時に屠りつづけた。

通常では、このように高レベルプレイヤーが適正以下の狩場で暴れるのはとても褒められたことではないが、今回は他に人もいないので気にする必要はない。

時間があればサポートに徹してユリエールのレベルアップに協力するところだが、今はシンカー救出が最優先である。

あっという間に経過した二時間のうち、マップに表示される、現在位置とシンカーの位置を示す二つの光点は着実な速度で近づき続けた。

ゴールは近いが、パルは奥に進めば進むほど、何やら嫌な予感がしてきた。

最近どこかで同じような経験をした気がするパルは思い出そうとするが……思い出すことが出来ない。

「どうしたの？」

パルの様子がどこかおかしいことに気付いたアスナは声を掛ける。

「何か嫌な予感がするんすよ」

「嫌な予感？」

「最近、どこかで……」

そう、あれは七十四層のときに感じた……

パルが答えに行きつきそうになった、その時

何匹目ともしれぬ黒い骸骨剣士をキリトの剣がばらばらに吹き飛ば

したその先に、一際明るい、暖かな光の漏れる通路が目に入った。各ダンジョンで共通の色あいとなっているそのオレンジ色は、間違いない安全エリアの照明だ。

「シンカー！」

もう我慢できないというふうに一声叫んだユリエールが、金属鎧を鳴らして走りはじめた。

剣を両手に下げたキリトと、話をしていたアスナとパルもあわててその後を追う。

右に湾曲した通路を、明かり目指して数秒間走ると、やがて前方に大きな十字路と、その先にある部屋が目に入った。

部屋は、暗闇に慣れた目にはまばゆいほどの光に満ち、その入り口に一人の男が立っている。逆光のせいで顔は良く見えないが、こちらに向かって激しく両腕を振り回している。

「ユリエール！！！」

こちらの姿を確認した途端、男が大声で鞭使いの名を呼んだ。ユリエールも左手を振り、一層走る速度を速める。

「シンカー！！！」

涙まじりのその呼び声にかぶさるように、男の声が

「来ちゃだめだ　　っ！！　その通路は……っ！！！」

それを聞いて、パルとアスナはぎょっとして走る速度をゆるめた。

だがユリエールにはもう聞こえていないらしい。部屋に向かって一直線に駆け寄っていく。

その時。

部屋の手前数メートルで、走る通路と直角に交わっている道の右側死角部分に、不意に黄色いカーソルがひとつ出現した。すばやく名前を確認する。表示は The Fatal-scythe

意味は運命の鎌。ボスモンスター特有の固有名である。

「だめ　っ！！　ユリエールさん、戻って！！」

アスナは絶叫した。黄色いカーソルは、すうっと左に動き、十字の交差点へ近づいてくる。

このままでは出会い頭にユリエールと衝突する。もうあと数秒もない。

「くっ！！」

突然、アスナの左前方を走っていたキリトが、かき消えた　ように見えた。ずばんという衝撃音で周囲の壁が振動する。

瞬間移動にも等しい勢いで数メートルの距離を移動したキリトは、背後から右手でユリエールの体を抱きかかえると、左手の剣を床石

に思い切り突き立てた。すさまじい金属音。大量の火花。空気が焦げるほどの急制動をかけ、十字路のぎりぎり手前で停止した二人の直前の空間を、ごおおおっと地響きを立てて巨大な黒い影が横切っただけだった。

黄色いカーソルは、左の通路に飛び込むと十メートルほど移動してから停止した。ゆっくりと向きを変え、再び突進してくる気配。キリトはユリエールの体を離すと、床に突き刺さった剣を抜き、左の通路に飛び込んでいった。アスナとパールも慌ててその後を追う。

アスナは呆然と倒れるユリエールを抱え起こし、そのまま交差点の向こうへと押しやる。

「パール君もユイと一緒に安全地帯に退避して！」

パールが指示通り安全エリア側に一直線に進むのを確認すると、アスナは細剣を抜いて左方向へと向き直った。

安全エリアに入ったパールは、ユイを背中から降ろすとキリトの方へ目を向ける。

二刀を構え、立ち止まったキリトの向こうに浮いているのは、身長2メートル半はあるうかという、ぼろぼろの黒いローブをまとった人型のシルエットだった。フードの奥と、袖口からのぞく腕には、密度のある闇がまとわりつき蠢いている。暗く沈む顔の奥には、そこだけは生々しい、血管の浮いた眼球がはまり、ぎよろりとキリトを見下ろしている。右手に握るのは長大な黒い鎌だ。凶悪に湾曲した、鈍く光る刃からは、ぽたりぽたりと粘っこい赤い雫が垂れ落ちている。全体的には、いわゆる死神の姿そのものである。

死神の眼球がぐるりと動き、まっすぐにこちらを見た。その途端純

粹な恐怖に心臓を鷲掴みにされたような悪寒が全身を貫く。
レベル的にはたいしたことないはずなのに、パルはグリーンムアイズ以上の威圧感を死神から感じる。

パルはポーチから短剣を取り出すといつでも飛び出せる体勢で構える。

キリトとアスナが焦っている様子から、死神はどうやら相当高レベルらしい。

どうにか二人を安全エリアまで逃がすことが出来ないか考えるが

「位置取りが悪すぎるッス」

パルは二人が逃げる方向である安全エリアにいるので、下手にここから攻撃すると憎悪値ハイトが増加して逆に二人を危険にさらしてしまう。最終的離脱手段である転移結晶も、万能の道具ではない。クリスタルを握り、転移先を指定してから実際にテレポートが完了するまで、数秒間のタイムラグが発生する。その間にモンスターの攻撃を受けると転移がキャンセルされてしまうのだ。パーティーの統制が崩壊し、勝手な離脱をするものが現れるとレポートの時間すら稼げず死者が出てしまうのはそういう理由による。

ならば時間を稼げばいいと思い、盾を装備して二人と死神の間に入ろうと装備フィギュアを操作しようとしたが

アスナはちらりとこちらを振り向くと叫んだ。

「パル君、ユリエールさん、ユイを頼みます！ 4人で脱出してください！」

凍りついた表情でユリエールが首を振る。

「だめよ……そんな……」

「ダメっスよ、二人とも早くコツチに逃げるッス」

パルは叫びながらアイテム欄を素早く動かして盾を探すが、普段は使わない装備なので探すのに思わぬ時間がかかってしまう。

「はやくー!!」

アスナが再び叫んだ、その時だった。ゆっくりと鎌を振りかぶった死神が、ローブから瘴気を撒き散らしながら恐ろしい勢いで突進を開始した。

キリトが両手の剣を十字に構え、アスナの前に仁王立ちになった。アスナは必死にその背中に抱きつき、右手の剣をキリトの二刀に合わせた。死神は、三本の剣を意に介さず、大鎌を二人の頭上めがけて叩き降ろしてきた。

赤い閃光。衝撃。

アスナとキリトが地面に叩きつけられ、跳ね返って天井に激突し、再び床へと落下する。

パルは素早く、視界左上に表示されるキリトとアスナのHPバーを確認すると、両方とも一撃で半分を割り込んでいた。無情なイエロー表示は、次の攻撃には耐え切れないことを意味している。

そんなことなどお構いなしに、死神が無情にも二人に向かって鎌を振り降ろすが

「プリニー　　っスー!!」

盾を装備したパルが、鎌と二人の間に身を躍らせた。ギリギリのタイミングでパルの盾が死神の鎌の一撃を防ぐ。振り下ろしによる途方もない衝撃がパルのHPバーを4分の1ほど削る。

「二人とも今のうちに　　ッス」

パルの言葉を遮るかのように、死神の鎌が縦横無尽に振り下ろされる。

先ほどの攻撃に比べて一撃一撃の重さが軽いものとなったが、その代わりに一撃一撃の攻撃範囲とスピードが桁外れなものとなり、パルは防戦一方に強いられてしまう。

じわじわと削られていくHPバーがついにレッドまで削られたその時、死神は急にゆっくりとしたモーションで鎌を振りかぶった。

次の瞬間、大鎌の横薙ぎ払いの範囲攻撃が放たれた。

「　　ッー!!」

パルは、キリト達を守るように盾を横に構えることで何とか斬撃の上に逸らすことが出来たが、衝撃を受け止めきれずに後方に吹き飛ばされる。

キリト達の頭上を通り過ぎ、安全エリアの入り口中央にある黒い立方体の装飾オブジェクトに激突する。

HPバーはぎりぎり数ドット残ったが、キリト達から大きく離されてしまった。

死神はパルの事など見向きもせず、キリト達に近づいていく。

と、その時、キリトの傍らに立つ人影があった。長い黒髪の小さなその姿。安全地帯にいたはずのユイだった。恐れなど微塵もない視線でまっすぐ巨大な死神を見据えている。

「ばかっ！！ はやく、逃げろ！！」

必死に上体を起こそうとしながら、キリトが叫んだ。死神はふたたびゆっくりとしたモーションで鎌を振りかぶりつつある。あれほどの範囲攻撃に巻き込まれたら、ユイのHPは確実に消し飛んでしまう。

「動けないッス」

パルは先ほどの衝撃でバッドステータスである 転倒 状態になってしまったので起き上がることが出来ない。
こんな時に、動かすことのできない自分の体がもどかしい。全滅という最悪のイメージが頭によぎってしまう。

しかし、次の瞬間、信じられないことが起こった。

「だいじょうぶだよ、パパ、ママ」

言葉と同時に、ユイの体がふわりと宙に浮いた。ジャンプしたのではない。見えない羽根で舞い上がるように移動し、二メートルほどの高さでびたりと静止した。ソードスキル使用時のような空中停止

ではなく、完全に浮いている。ユイは右手をそつと宙に掲げる。

「だめっ……！！ 逃げて！！ ユイちゃん！！」

アスナの絶叫をかき消すように、死神の大鎌が容赦なく振り下ろされた。鋭い切っ先が、ユイの真っ白い掌に触れる

その寸前、鮮やかな紫色の障壁に阻まれ、大音響とともに弾き返された。ユイの掌の前にシステムタグが浮かんで見える。

【Immortal Object】、そこには確かにそう記されている。不死属性というプレイヤーが持つはずのない属性。

まさか、ユイの正体は

転倒から回復したパルが、起き上がるために先ほどぶつかった石に手をかけた。

次の瞬間、パルの頭に様々なことが流れ込んできた。

この石がシステムコンソールであること

ユイがAIであること

そして、自分がこの世界に現れた原因

パルが、この世界で与えられた本来の役割は

そして、全てを知ったパルの目の前に、新しくウィンドウが現れた。

なぜ、これがここにあるんスか？

疑問に思いながらも、即座にスクロールを動かしてウィンドウを読み進めていく。

最下部までスクロールし終わると YES と NO の単純な二択の選択を下すボタンがあった。

パルは選択を迫られた。

YES を選んだのならば、助けられるが新たな問題が発生する。
NO を選んだのならば、助けられないが問題は起こらない。

迷ったのは一瞬、だが決断は下した。ならばあとは動くのみである。

YES のボタンにタッチすると右上に小さなプログレスバーが表示された。

凍結中のプログラムを解凍するには、だいぶ時間がかかるようだ。

パルはコンソールに手を伸ばすと解凍が完了するまでの時間を利用して、助けるための行動を開始した。

第23話 運命の鎌 そして決断の時ッス（後書き）

「続きですが出来次第更新するので、もう少々お待ち下さいッス」

第24話 さよならは言わないッス

「ふう、あとは待つだけッス」

最後のキーを打ち終えたパルが右上のプログレスバーを確認しようと視界を上げると謎の火炎の眩さが目に入った。

「目が、目が――――！！！」

不意とはいえ、ジャストミートで目にエフェクトフラッシュのまぶしさが入ったパルの幸運は、きつと型月風で例えるならば E くらいであろう。

前回までのシリウスはどこに行ったと言わんばかりに目を押さえてぐるぐるとのた打ち回るパルであった。

パルの視界が回復するころには戦闘が終わっていた。

安全エリアとなっている正方形の部屋。入り口は一つで、中央にはつるつるに磨かれた黒い立方体の石机が設置されている。アスナとキリトは、石机にちょこんと腰掛けたユイを無言のまま見つめていた。ユリエールとシンカーは姿が見えないことから先に脱出してもらったのだろう。今、パルの視界には三人だけだ。

パルは部屋の隅にある装飾オブジェクトに腰かけると2本のプログレスバーを確認した。

最初に出たプログレスバーは、とあるプログラムの解凍状況。

二本目のバーは、助けるためにとった行動の進捗状況。

どちらのバーも、重要である。

ユイが消えるのが先か？作業を終えるのが先か？

パルは少しでも処理速度が速くなるように視界と動作を遮断した。

大な制御システムのもとに運営されている。

システムの名前は カーディナル、それが、この世界のバランスを自らの判断に基づいて制御している。

カーディナルはもともと、人間のメンテナンスを必要としない存在として設計されたシステムであった。二つのコアプログラムが相互にエラー訂正を行い、更に無数の下部プログラムによって世界のすべてを調整する。モンスターやNPCのAI、アイテムや通貨の出現バランス、何もかもがカーディナル指揮下のプログラム群に操作されているのだ。プレイヤーのケアすらもシステムに委ねようとする徹底っぷりである。

しかし、この世界の根幹にかかわってくる重要な役割の部分は、なぜか人間の手が関わっていた。

この世界のクリア条件^{ゲーム}

そう、アインクラッド最上層の 紅玉宮 で待つこの世界の創造主・魔王 を倒すというただ一つの条件。

このクリア条件に、人間の手が加わったことによって本来ありえる

筈の無い不安定要素が発生した。

もし、創造主が何らかの要因でこの世界からいなくなったら、その時点で、このクリア条件は破綻しクリア方法がなくなってしまおうという。

カーディナルは、この不安定要素を解決するために　メインプランとは別の　サブプラン　を用意した。

サブプランは創造主とは別に最終ボスを用意するという単純なものであり、あくまで、サブであるため創造主がいなくなるまで凍結してあるはずであった。

しかし、ここで予想外の事が起こった。外部からこの世界を丸ごと複製するという。

カーディナルすら予想出来なかっただろう。

複製と言ってもあくまで、　カーディナル　を含めた各種プログラムのみであり、稼働中の　ソードアート・オンライン　内にいるプレイヤー自体は複製されるはずもなく創造主も例にもれなかった。偶然に偶然が重なった結果、誰もが知らないうちに複製先でサブプランのプログラム解凍条件は満たされた。

しかし、解凍されたはいいが新たな問題が発生した。

複製されたデータをもとに新しい世界を作り始めたのだ。

ボスのAIは、新しい世界の創造によって管理者に削除されるのを恐れて、外部の人間が用意したであろう用途不明な道バイパスをたどり、この世界ソードアート・オンラインに戻ってきた。

しかし、いくら同じカーディナルと言ってもAIが複製された頃のバージョンよりも更新が進み、バージョンが新しくなっていたためボスのオブジェクトデータはエラー訂正能力に引っかかった。不正防止のため、ボスのデータだけはオブジェクトイレイサーを用いた一撃以外の方法ではプログラム上では削除できない仕様になつていたためAIの本体は残つたが、本体だけでは何もできないので、削除不能なデータを隔離するエリアである電子監獄の中に閉じこめられた。

それから、どれくらい時が過ぎたのかわからないある日、クエスト自動生成機能を通して一つの情報データが電子監獄に迷い込んできたのだ。

情報データの名前は P a l 。

P a l は、このソードアートオンラインのデータ形式に合わされた各種データを含んでいたがアクセスするためのパスがなかった

ため隔離されたようだった。

AIは、その P a l のデータを利用して一つとなった。
それが、おいらという存在 P a l がこの世界に現れたきっかけ
あった。

「キリトさん、アスナさん……わたし、ずっと、お二人
に……会いたかった……。森の中で、お二人の姿を見たとき……す
ごく、嬉しかった……。おかしいですね、そんなこと、思えるは
ずないのに……。わたし、ただの、プログラムなのに……」

涙をいっぱい溢れさせ、ユイは口をつぐんだ。アスナは言葉にできない感情に打たれ、両手を胸の前でぎゅっと握った。

「ユイちゃん……あなたは、ほんとのAIなのね。ほんものの知性を持っているんだね……」

囁くように言うと、ユイはわずかに首を傾けて答えた。

「わたしには……解りません……。わたしが、どうなってしまったのか……」

いままで沈黙していたキリトがゆっくりと進み出た。

「ユイはもう、システムに操られるだけのプログラムじゃない。だから、自分の望みを言葉にできるはずだよ」

柔らかい口調で話し掛ける。

「ユイの望みはなんだい？」

「わたし……わたしは……」

ユイは、細い腕をゆっくりと二人のほうに伸ばした。

「ずっと、一緒にいたいです……パパ……ママ……！」

アスナは溢れる涙をぬぐいもせず、ユイに駆け寄るとその小さな体をぎゅっと抱きしめた。

「ずっと、一緒だよ、ユイちゃん」

少し遅れて、キリトの腕もユイとアスナを包み込む。

「ああ……。ユイは俺たちの子供だ。家に帰ろう。みんなで暮らそう……いつまでも……」

だが ユイは、アスナの胸のなかで、そっと首を振った。

「え……」

「もう……遅いんです……」

キリトが、戸惑ったような声でたずねる。

「なんでだよ……遅いって……」

「わたしが記憶を取り戻したのは……あの石に接触したせいなんです」

ユイは部屋の中央に視線を向け、そこに鎮座する黒い立方体を小さな手で指差した。

「さっきのボスモンスターは、ここにプレイヤーを近づけないようにカーディナルの手によって配置されたものだと思います。わたしはこのコンソールからシステムにアクセスし、オブジェクトレイサー を呼び出してモンスターを消去しました。その時にカーディナルのエラー訂正能力によって、破損した言語機能を復元できたのですが……それは同時に、いままで放置されていたわたしにカーディナルが注目してしまったということでもあります。今、コアシ

STEMがわたしのプログラムを走査しています。すぐに異物という結論が出され、わたしは消去されてしまうでしょう。もう……あまり時間ありません……」

「そんな……そんなの……」

「なんとかならないのかよ！ この場所から離れれば……」

二人の言葉にも、ユイは黙って微笑するだけだった。ふたたびユイの白い頬を涙が伝った。

「パパ、ママ、ありがとう。これでお別れです」

「嫌！ そんなのいやよ！！」

アスナは必死に叫んだ。

「これからじゃない！！ これから、みんなで楽しく……仲良く暮らそうって……」

「暗闇の中……いつ果てるとも知れない長い苦しみの中で、パパとママの存在だけがわたしを繋ぎとめてくれた……」

ユイはまっすぐにアスナを見つめた。その体を、かすかな光が包み始めた。

「ユイ、行くな……！」

キリトがユイの手を握る。ユイの小さい指が、そっとキリトの指を掴む。

「パパとママのそばにいと、みんなが笑顔になれた……。わたし、それがとっても嬉しかった。お願いです、これからも……。わたしのかわりに……。みんなを助けて……。喜びを分けてください……。」

ユイの黒髪やワンピースが、その先端から光の粒子を撒き散らして消滅をはじめた。ユイの笑顔がゆっくりと透き通っていく。重さが薄れていく。

「やだ！ やだよ！！ ユイちゃんがないと、わたし笑えないよ！！」

溢れる光に包まれながら、ユイはにこりと笑った。消える寸前の手がそつとアスナの頬を撫でた。

ママ、わらって……。

最後の力を振り絞ってアスナに囁きかける。それと同時に、ひととき眩く光が

飛び散ることはなかった。

ユイは目を見開いて呆然としている。消える筈であったのに、確かな存在としてここにいることが信じられないようだ。

「ユイちゃん!！」

アスナは、ユイを抱きしめると子供のよう大声で泣いた。

その涙は悲しみではなく、ユイが消えないでいてくれた事に対する安堵の涙である。

「ママ!！」

ユイはつられるように泣くとアスナに抱きしめ返した。

そのユイの首には、先ほどまではなかった首飾りがぶら下っていた。

キリトは、袖で涙を拭くと首飾りの持ち主であるパールを探した。

見間違いようがないあの首飾りは、キリトが出会った当初からパールが身に着けてたものである。

部屋の隅のオブジェクトに座るパールを見つけるとキリトは、何が起きているのか訊こうとした。

「パル、お前は……」

キリトの声を遮るようにパルは喋りだした。

「キリトさん　　お世話になったツス」

パルはまるで時間がないかのように次々と話を進めていく。

「 Y u i のデータは、クライアントプログラムの環境データの一部として、キリトさんのナーヴギアのローカルメモリに移動させてもらったツス。もしゲームがクリアされても、ナーヴギアの中に保存されるようになってるので心配無用ツスよ」

八ヶ月前、腹ペコだったパルがキリトからパンを受け取ったあの時、AIが無意識のうちにキリトのナーヴギア内に存在していた旧バージョンのデータであるベータテスト時の残骸データを利用して、パルのデータの一部を保存していたのだ。

迷いの森 は、電子監獄から脱獄したデータがこの世界に出現させないようにするための最後の防波堤であったが、パルはキリトのおかげでシステムを誤魔化すことができ、迷いの森 を脱出することが出来た。

しかし今回、 Y u i のデータを保存するためにナーヴギア内のパルのデータを削除した。

保存先を確保したパル、次に Y u i のデータとキリトのナーヴギアを繋ぐ方法として アルカディア を利用した。

アルカディア は P a l の情報データ内に入っていたデータである。
操作可能なデータの中で唯一の装飾品がこれしか無かったのだ。
貴重な装備であったが、パルは迷わず アルカディア のデータを
使用した。

これらの操作が完了すると同時に、今まで誤魔化していたカーディナルがパルに気付いてしまった。

パルはプログラム上では削除不能であっても、HPゲージは有効化されている。

直ぐにでも削除をするための刺客が来るだろう。

キリト達に迷惑を掛けたくない。

ここからは、パル一人での戦いである。
なので

「おいらは、ここでお別れッス」

パルがキリトに背を向けると全身が光に包まれていく。

この現象は先ほどのユイが消える間際の光に似ているがまったく別である。

光の中でパルの姿がザ、ザツというノイズ音と共にブレていく。

パルがぶれるたびに、姿が変わっていく。

キリトは目を見開いた。

その姿は……忘れる筈もない……

二年前。

全てが始まったあの瞬間に仰ぎ見た姿。

深紅のフード付きのローブに純白の手袋。

唯一違うのは、大きさが人間大であるのとフードの中が闇に覆われている事だろう。

キリトは、視線を集中すると黄色いカーソルと共に名前が表示された。

The Cardinal revenant

ボスモンスター特有の固有名が表示するのは、パルがGMではなくシステムAIであること。

パルはキリトに背を向けて歩き出した。すると、その先に黒い渦が現れた。

「パール!!」

キリトはパールを引き留めようと声を上げた。

パールは黒い渦の一步手前で立ち止まると顔だけキリトの方に振り向く。

振り向いたパールの口元が見えた。

何かを伝えよう口を開くが

突如現れた鎌によってパールは

黒い渦へと引き込まれていった。

さよならは言わないッスよ。キリトさん。

キリトの耳にパールの声が響くと共に渦は消えた。

第24話 さよならは言わないッス（後書き）

今回の話ですが、少し読みにくい場所などがあるかもしれません。

なので、こうした方がいいのではないか、この説明は無くてもいいなどの意見をしていただけるとうれしいです。

作者自身、正直、詰め込みすぎた感が出てしまっただろうと感じています（汗）。

さて、いろいろと判明した今回の話ですが、かなり独自設定が出てきました。

なので、タグに 独自設定 を追加させていただきます。

SAO編ですが、予定ではあと2〜3話くらいで終わる予定です。

そろそろ作者の力の限界を感じ始めている今日この頃ですが、このままALO編も続けてほしいですか？

ちよつとそこら辺の意見も頂けると嬉しいです。

ちなみに、一応頭の中で、どういう話にするか決まっているのですが正直、このままいくとプリニー成分が薄めでデイスガイア成分が濃い目になってしまうと思います。

では、次回の話も出来次第更新するのでどうぞお楽しみに！！

第25話 「裏面への扉が開いた！！」 「裏面へ引き込まれてしまった！！」

黒鉄宮地下にあるダンジョンの壁や床は黒い石造、壁に備え付けられている松明が唯一の光源であったが、渦に引き込まれた先は壁や床を網目状の線が緑色光の輝きを放っており松明のような光源が不要となっていた。

実際は、壁一面の3Dオブジェクトに張られていたテクスチャが剥がれて、緑色光のワイヤーフレームが残ったためこのように見えている。

本来のデータの何十分の一の容量で展開されているこのダンジョンは、ゲームで例えるならば 裏面 と言ったところだろう。

このエリアには、プレイヤーを楽しませるようなゲーム性は排除されHPがそのデータの存在値を表している。 不死属性 はなく。

HP、つまり存在値がゼロとなったデータは、サーバー内から文字通りその存在を抹消^{デリート}される。

それがこの裏面でのルールである。

パルの現在の状況であるがデイスガイア風に例えるならば

「裏面への扉が開いた！！」

「裏面へ引き込まれてしまった！！」

つて所である。

突如現れた鎌によって強制的に黒い渦に引き込まれたパルは、咄嗟に自身と鎌の間に腕を挟むことに成功していた。鎌によって地面に叩きつけられる前に腕を回して鎌を弾くと、何とか着地の体勢を取る。

「
ッ」

振り向きたいのをこらえて思いっきり前に飛ぶと、先ほどまでいた場所に鎌の追撃が空を切る。

パルは崩れた体勢を整えるとともに振り返るとそこには

オブジェクトレイサー による一撃によって消去されたはずの死神がいた。

黒いローブは火傷による穴だらけ、体の至る所から闇が吹き出ている。

死神の状態はダメージを負っているように見えるがHPバーは無傷

だ。

なんで、消されたはずじゃ……

パルの疑問は死神の名前を確認することによって解消された。

J u d g m e n t - s c y t h e 。

運命は断罪へと変わっていた。

オブジェクトデータは、以前のものを流用したのだろう。同じに見えるが中身が違う。

それを証明するかのように死神は突如、カタカタカタカタと歯を鳴らし始めた。死神が愚かな咎人を嘲笑うかのようにすると、その音が合図だったかのように死神の体の至る所から出してきた闇の勢いが上がった。

闇は死神の姿を覆うとパルを囲むように横へ横へと広がって行く。

「カタカタ」

「カタカタ」 「カタカタ」

「カタカタ」 「カタカタ」 「カタカタ」 「カタカタ」

「カタカタ」 「カタカタ」 「カタカタ」 「カタカタ」 「カタカタ」

「カタカタ」 「カタカタ」 「カタカタ」

右手に刀身が光輝く魔剣が出現する。パルの右手に現れた魔剣の重みが、プリニーの時に比べてかなり軽く感じるのは体が変わったからであろう。

四方八方にめぐらされている死神の壁から一体、また一体とパルに向かつて突進していく。

パルは体をひねり、魔剣を横なぎに振るための体制をとる。

本来この技は、剣本体に縦方向に大きく振りかぶってから振り下ろすのだが、今回は広範囲の敵を薙ぎ払うために体の後ろへと大きく引き絞る。空間ごと一刀両断する最強剣技　その名は

「大」

魔剣の刀身から光の奔流が纏わりつき

「次元斬！」

それを薙ぎ払いと共に前方の軍勢に向かって解き放つ。

ラスボスである　The カーディナル Cardinal レヴェナント revenant
のEXスキル

創造主のユニークスキルである　神聖剣　の　聖　が　魔
へと変わった、その名は　魔神剣　。

その前方広範囲技　大次元斬　は、本来、自身へと纏わりついた多数のプレイヤーを広範囲で攻撃する技であり、Lv9999へとなったパルが放つと、九十層クラスのボスモンスターも倒すことのできる殲滅技へと昇華した。

光の奔流が途切れると、死神の数は半分ほど削り取られていた。

前方の敵は一掃したが、範囲外にいる後方の死神は健在である。しかし、パルは硬直時間によって動けないでいた。大技を放った代償は、確実にパルの体の動きを止めた。

そのチャンスを逃すはずもなくパルの後ろから断罪の鎌の斬撃が飛んでくるが、パルのHPのドットほど程しか削れていない。レベル制MMOにおいて、数の壁よりもLvの壁は厚すぎる。しかも100倍近くのLv差は理不尽すぎるにもほどがある。

HPバーが数パーセントを削ったところで硬直時間が途切れるとパルは、魔剣で十本以上の鎌を受け止め、それを押し返し一番近くにいた敵から一撃の名のもとに切り伏せていく。まさに無双である。

外見が変わったパルと中身が変わった死神は、数分前とは皮肉にも立場が逆転していた。

戦闘開始から三十分が立つ頃には、死神の姿は無くなり赤いローブの人影一つとなった。

死神を倒し終わったバルは、自身のステータスや装備、アイテム等を確認していると部屋の中央　　ちょうど、コンソールがあった位置に螺旋階段が出現した。

「これを登れって事ツスカ」

僅かに逡巡しながらも、登るしかないと結論付けるとバルは、足場が問題ないか確認しながら階段を一段一段登り始めた。

ダンジョンの天井を超えても、どこまでも続いている階段を一定のスピードでひたすら登り続ける。

時折、半年ぶりの人型の感覚を取り戻すかのように肩や足を動かしながらパルはこの先にいるはずの最強の敵について考えた。

さっき程まで戦っていた死神は、おそらくアインクラッド上で90層クラス。それを増殖させて総体で一つの巨大ボスに仕立て上げたカーディナルが次に用意するとしたら
今の状態で勝てる確率は極めて低い、おそらく負けてしまうであろう敵。

予想が外れることは多分ないだろう。少しでも、勝率を上げるためにはどうすればいいか、パルはひたすら考えた。

ステータスや装備は、今のパルと同じ。剣は、おそらく違っだろうがこの世界に 魔剣良綱 と全く同じものではないが同程度の剣ならばおそらく存在する筈だ。違う所があるとすれば、相手はAIでこちらは自分という意思を持っていることぐらいである。

そこから、切り崩すしかない。経験、知識、あらゆる面から少しでも勝つための策を考える。

階段を登り終えるところは

空を見上げるとそこには次の階層の基礎は無いことから間違いない。
ここはプレイヤーの最終到達階層である第百層 ヴァルハラ。

中央付近にそびえ立つ 紅玉宮 はこの裏面で唯一、テクスチャが剥がれることなく紅玉の名に恥じない真つ赤な石造り宮殿が存在していた。パールは、着実に、一步一步、歩くような速さで 紅玉宮 へと繋がる一本道を進んでいった。

道の両端が下層に吹き抜けとなってる所に差し掛かるところで、道の中央に人影が一つ存在した。
パールはやはりという気持ちと共にその姿を見るとポツリとつぶやいた。

本来ならば自分がこの姿で現れる筈だった存在。

「
究極超魔人^{アーチャー}
」

生前に丹精込めて育てたキャラである究極超魔人^{アーチャー}が目の前に立ちは
だかった。

第25話 「裏面への扉が開いた!!」 「裏面へ引き込まれてしまった!!」

現在、リアルが忙しい（レポート、就活、中間発表等）ので次回の更新も出来次第投稿です。ちよつと間が空いてしまつかもしれませんが今後ともよろしくお願いします。

では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0288q/>

そーどあーと・おんらいんツス

2011年9月29日14時34分発行